立つ、是を孝沖皇帝とおす、
（孝沖皇帝）名い炳と云ふ、年二歳にして位に即き、三閲月にして崩御におり玉ふ、改元する者一、永嘉と云ふ、梁太后い勃海孝王の子を迎へ立つ、是を孝質皇帝とおす、
（孝質皇帝）名い纘と云ふ、章帝の曾孫あり、年八歳にして位に即けり、少くして聰慧く、嘗て朝廷に會せしとき、梁冀を目けて曰へるやう、此れ跋扈將軍ありと、冀い深かく之を惡みたり、
右の者をして餅の中に毒をいれて、之を進めしむ、遂に崩御におり玉ふ、位に在す一年有半にして、改元する者一、本初と曰ふ、冀い蠭吾侯を迎へ立てゝ帝となす、是を孝桓皇帝と稱、
（孝桓皇帝）名い志と云ふ、章帝の曾孫あり、年十五にして位に即く、梁冀い策を定め帝を立つる功あるを以て、封を益し、又其子弟を封して、皆侯とおせり、李固杜喬い清河王蒜を立てんと欲せしに、是よ至り蒜い貶せられて侯とおり自殺せり、李固杜喬の二人も亦獄に下りて死したり、○前の朗陵侯の相たる荀淑と云ふ者少くして、博學に高行あり、李固李膺等皆之を師宗とせり、朗陵に相とし、其治稱して神君（猶神明の宰と云ふ如し）とおす、子八人あり、時人稱して八龍となす、其六は爽字い慈明と云ふ、人の言へるやう、荀氏の八龍、慈明い無雙なりと、縣令い其里を稱して高陽里と曰へり、爽嘗て李膺に謁しけるに、因りて之がために御し、既に還り喜こびて曰へるに、今日乃ち李君に御者するを得たりと、同郡に陳寔と云ふ者あり、淑と名聲を齊しく得たり、嘗て淑に詣るとき、長子の紀字い元方と云ふ者車を御せり、次子の諶字い季方と云ふ、驂乘せり、孫群字い長文と云ふ、倚立して車中より抱きて、淑の家に詣るとき、八龍い更迭左右に侍り、淑の孫彧字い文若と云ふ、倚幼あるを以て膝の上に抱き置けり、大史の奏上るやう、德星（景星あり、其狀ち常あし、有道の國に見ゐると云ふ）あり見ゐる五百里の內に賢人の聚まるあらんと、陳寔い大丘長となり德を修むること淸淨けれゞ、吏民皆之を追思したり、紀諶の子其父の優劣を其祖に問ふ、陳寔の曰へる元方い兄たりがたく、季方い弟たりがたしと、○詔して獨行（正を守りて、人に依附らざるを言ふ）の士を擧ぐ、涿郡の崔寔と云ふ者公擧（門名、府にあり、吏民の上章及び、徵れて詣る者を掌どるあり）に至り病と稱して對策せずして、退ぞき政論、政事の議論なり）を著はす、其略に曰へるに、聖人い物に凝滯せずして、能く推し移る、俗士い苦んで世の變遷に從ふを知らず、以て上古結繩の約束も亦能く治まる、後世に至り聖人出てゝ、之に易るに書契を以てす、亂秦の後俗益〳〵澆薄し、結繩の約束の能く治むる所よ非ず、禹い干羽を兩階に舞して有苗格服し、高帝い匈奴に平城に圍まれ、陳平の秘計を用めて出づるを得たり、夫刑罰ある者い亂を治むるの藥石あり、德敎なる者い平を興する粱肉なり、德敎を以て弊を除くい、是れ粱肉を以て疾を治むるなり、刑罰を以て平を治るい、是れ藥石を以て供養する

なり、數世より以來政事をなす恩を以て人に貸すなし、馭者ハ其轡を委て、馬ハ其銜を委く、四牡横に犇り(下民の横恣なるに喩ふ)皇路(王の輅車なり)ハ險き路に陷りて傾むかんとす、將ゝ勒を拑め、輈を韃り以て之を救んとす、豈和鑾を鳴し、節奏を清するに暇あらん哉、此段ハ蓋し法度律令を棄て、世の亂るゝに至り、道德のみを以て之を治むる能ハざるに喩しならん)昔し文帝ハ肉刑を除くと雖ども右の趾を斬るの刑に當てるハ棄市し、笞るゝ者ハ往往にして死に至る者あり、是文帝ハ嚴を以て平を致し、寛を以て平を致すに非るなりと、仲長統と云ふ者其書を見て曰ふやう、凡そ人主たる者ハ宜しく一通を寫し之を坐側に置くべきなり、○朱穆と云ふ者あり、冀州の刺史となり、令長(縣令亭長なり)風を望み印綬を解めて去る者數十人なり、到るに及びて、貪汚(賂を貪り、行ひの汚しからざるを云ふ)の罰を刻部て奏上げたり、官者あり家に歸り、父を葬るに玉匣(天子を葬むる禮に供するものを云ふ)を用ゐければ、朱穆ハ之を案べ驗て、其棺を割り之を出だせり、上ハ之を聞て大ひに怒り、朱穆を徵して廷尉に詣る、大學生たる劉陶等數千人、書を上つり、穆のために訟へて謂へるに、中官(宦官なり)たる者ハ皆國の權柄を竊持り、手に王爵を握り、口に天憲を銜む、朱穆ハ獨り亢然として顧みず、心を竭し、憂ひを懷き、上のために深く計る、臣等願くハ朱穆の罪にハんと請ひければ、上ハ之を赦玉ハる、劉陶ハ又疏を上つりて、朱穆及び李臂を以て王室を輔翼んと乞ひ、書を以て奏上しかど、省ゐられずと云ふ、○梁冀ハ凶恣なること日ゝ積み、外戚を以て、事を用ゐる者二十年、威内外に行ハれ、天子ハ徒だに手を拱くのみなりしかば、上ハ宦者の單超等と謀り、兵を勒へて、遂に梁冀の印綬を收む、梁冀ハ之に因り自殺しければ、梁氏たる者ハ少長となく、皆棄市の刑に行ハれたり、是ゝ於て單超等の五人ハ皆侯となる、梁冀の誅されしより、天下異政を想望り、黄璐と云ふ者首めに太尉となる、○陳蕃ハ處士徐穉姜肱等を薦め擧げたり、穉字ハ孺子と云ふ、豫章の人ゝして、陳蕃の守たる時、特に一榻を設けて、以て穉を待ち、去らば則ハち之を縣く、穉ハ諸公の辟に應ぜず、然るに其死するを聞く、輙ハち笈(書物箱なり)を負ひ、赴むきて之を弔するに、豫じめ一鷄を炙り、酒を以て綿に漬し、暴し乾して、之を裹み、冢隨の外に到り、水を以て綿に漬し、白茅を以て飯の下に藉き、鷄を以て前に置き、祭畢りて謁を留め、喪主に見へずして行けりと云ふ、姜肱ハ彭城の人なり、二弟あり仲海李江と云ふ、俱に孝友あり、常に被を共にす、嘗て盜に遇るとき兄弟ともに死を爭ひければ、盜ハ兩子を釋せり、後穉肱ハ徵れしかど、皆至らざりける、黄譎卒す、四方の名士にして葬禮に會する者七千人なり、穉至り爵を墓前に進め、哀しみ哭き、生芻を置きて去れり、諸名士の曰へるやう、此必らず南州の高士徐孺子なりとて、陣留の茆容と云ふ者をして之を追しめ、以て國の政事を問ひけるに答へず、太原の郭泰と云ふ者曰へ

るよ、孺子の國事に答へざる、是れ其愚は及ぶべからずとなせり、郭泰の初め洛陽に游べるとき、季膺い之と友たり、季膺嘗て鄉里に歸りけるに、送車數千兩にして、季膺い唯郭泰と舟を同じふして、濟り衆賓の之を望む者觀て神仙の如しと云へりとぞ、容年四十餘にして野に畊しけるとき、雨に遇ふて樹下に避けるに、衆い皆い簑笠（兩足を展べて座するを云ふ）せり、容い獨危座（正しく座するを云ふ）して愈〳〵恭し、郭泰い之を見て異とし遂に勸めて學ばしむ、鉅鹿（縣の名）の孟敏と云ふ者嘗て甑を荷ひて地に落せしよ、顧みずして去りければ、郭泰い之を見て問ひけるに孟敏の曰へるやう、甑い已に破れたり、之を視るも亦何の益あらんと、泰い亦孟敏を勸めて學ばしむ、自餘の者にして、郭泰の奬進に因りて名を成せる者甚だ衆しと云ふ、郭泰い有道の士を以て舉られしかど、就らずして曰へるに、吾夜乾象を觀、晝人事を察するに、天の廢する所い支ふべからざるなりと、陳留の仇香、名い覽と云ふ、年四十にして、蒲亭の長とある、民に陳元と云ふ者あり、其母陳元の不孝を告げ訴へければ、仇香い自ら其家に至り、ために人倫を陳べけるに、陳元遂に感悟して孝子とあれり、孝城の令たる王奐と云ふ者、仇香を暑たて、主簿となして、曰へる、陳元い罰せずして、之に化せり、之鷹鸇の鳥雀を逐ふ如き、國法を犯す者を刑する志を少くことなきを得ん耶、仇香の曰へるに、鷹鸇は以て鸞鳳に若すとなすと（言ふい刑罰を以て人を畏するより道德を以て誘導に若かずと云ふの意あり）奐の曰ふやう枳棘い鸞鳳の栖む所にあらず、百里い大賢の路にあらずとて、乃ち仇香に資を與へて大學に入れしむるに、香い常に自から守れり、或とき泰い學中の房舍に就て之を見れば、起ちて床下に拜して曰へるやう、君い泰の師あり、と、徵辟に應ぜずして卒せり、○黃瑯より以來の三公にして、楊秉劉寵の如きい皆人望あり、劉寵い嘗て會稽に守たるとき、郡大ひに治まる、徵れけるに、五六八の老叟あり、山谷の間より出て、人々百錢を賚らし之を送りて曰へる、明府（劉寵を云ふ）車を下る（奉行よなるを云ふ）以來、狗夜吠ず、民い吏を見ず、今聞く當に棄て去らるべしと、故に自ら扶け送り奉つるあり、寵の曰へるやう、吾政、何ぞ能く公の言に及ばん耶父老を勤苦せりと、ために人々一大錢を選び之を受く、後入りて司空となる、楊秉い朝廷に立ちて正直なり、河南に尹たる時、嘗て宦官に忤ふを以て罪を得しかど、後大尉となり、以て卒せりと云ふ、陳蕃い楊秉に繼ぎ大尉とある、數々李膺を以て司隷校尉となすを言ひけるに、宦官い之を畏れ、皆鞠躬め氣を屏めて、敢て宮省に出でざりしとなん、ときに朝廷の綱紀い頽れ弛みたり、膺い獨風裁（風儀體裁なり）を持し名聲を以て自ら高尚にす、士其容接にて名聲を被むる者あり、名けて登龍門（河津い一に龍門と名く、水儉にして通ぜず、大魚其下に集り上るを得ず、上れい則ち龍となる、故に取りて以て譬となすあり、とあると云へり、○劉寬と云ふ者を以て、尙書令とな

せり、寛ㇾ嘗て三郡(司州東海南海なり)を歷り典ぢりけるに仁恕ある政事多く、吏民にして過失あるときㇾ、鞭を以て之を罰したり、○初め上ㇾ侯たるとき、學を甘陵の周福に受く、位に即くに及び擢んでㇾ尚書となせり、時に同郡の房植と云ふ者名聲あり、鄉人ㇾ謠ひて曰へるに、天下の規矩たる者ㇾ房伯武、師に因りて印を獲たる者ㇾ周仲進なりと、二家賓客互に相譏揣(其長短を揣て譏議を云ふ)し、卒に隙をなし、是に由りて甘陵南北部あり、党人の議此れより始まれり、汝南の太守たる宗資と云ふ者范曹を以て功曹となし、南陽の太守成瑨ㇾ、岑脏と云ふ者を以て功曹となす、皆善を褒、違を糾せり謗ㇾ尤も剛勁して、惡を疾むこと讐の如し、二部相謠ふて曰ㇾう汝南の太守ㇾ范孟博南陽の宗資ㇾ尚諾のみを主どる、南陽の太守ㇾ岑公孝、弘農の成瑨ㇾ但座して嘯くのみと、大學の書生三万餘人、郭泰賈彪はㇾ之が冠となく、陳蕃李膺等と更に相推重けれㇾば、學中にて語りて曰へるに、天下の模楷ㇾ李元禮、強禦を畏れざるㇾ陳仲擧と是に於て中外皆風を承け、競ひて人の臧否を言ふを以て相尚べりと云ふ、會々成瑨ㇾ太原の劉瓆と、大赦の後に於て宦官の党を案べて殺せるより、徵されて獄に下り、將に棄市せられんと、山陽の守翟超と云ふ者張儉を以て督郵となし、宦官の家宅の制に踰るものを破り、東海の相たる、黄浮と云ふ者も亦宦官の家屬にして法を犯す者を收へて之を殺しけれㇾば、宦官冤を訴へしより皆罪を得たり、陳蕃ㇾ屢々之を爭ひしかど、上ㇾ遂に之を聽し玉ㇾはとおん、宦官ㇾ人をして書を上つり、李膺ㇾ大學の遊士を養ひ、共に部党を爲し、朝廷を誹訕り、風俗を亂せりと告しめけれㇾば、上ㇾ震怒玉ひて、郡國に詔を下して党人を逮捕へしむ、文案ㇾ三府(三公あり)を經るを以て、陳蕃ㇾ郤ぞけて、之に署名するを肯ぜされㇾば、上ㇾ愈々怒りて膺を北寺の獄舍に下しけるに、辞杜密陳寔、范滂等二百餘人に連なり、使者追捕する者四方に出でてしより、陳蕃ㇾ又極諫けれㇾば、上ㇾ遂に策を以て之を免ぜり、朝廷の者ㇾ震慄れて、敢て復党人のために言ふ者あし、賈彪の曰へるやう、吾西行せされㇾば、大難解けずと、乃ㇾち洛陽に入り、皇后の父竇武に說き、疏を上つりて之を解けり、李膺等の獄の辭、又多く宦官の子弟を引きけれㇾば宦官ㇾ乃ㇾち懼れて、上よ白あげて、党人二百餘人を赦し、皆田里よ歸し、名を三府に書し、終身を禁錮したり、上ㇾ位に在す二十二年、改元する者七、建和、和平、元嘉、永興、永壽、延熹、永康と云ふ、崩御になり玉ふ、竇皇后ㇾ解瀆亭侯を迎へ立て、帝となす、是を孝靈皇帝と稱ふ、(孝靈皇帝)名ㇾ宏と云ふ、章帝の玄孫あり、年十二にして位に即けり、竇太后ㇾ朝廷に臨み、竇武ㇾ大將軍となり、陳蕃ㇾ太傅となる、天下の名賢なる李膺杜密等を徵し、皆朝廷に列しけれㇾば、天下太平を想望り、陳蕃竇武共に議し、官吏ㇾ國の權柄を操弄になし、海内を濁亂を以て、奏上げて曹節王甫等を誅さんとしけるに、謀卒に泄れしかㇾば、官者ㇾ夜所親を召

し血を歃り、共に盟ひ、帝に請ひ前殿に御せしめ、詔の書せし木簡(長さ尺一あり)を作り、王甫を黄門令に拜し、其党に節旄を持しめ、竇武等を收へしめ、誣るに大逆あるを以てし、先陳蕃を執へて之を詶しけれバ、竇武ハ自殺せり、因りて首を都亭に梟し、太后を南宮に遷せりと云ふ、李膺ハ初め禁錮に遇と雖ども、士太夫たる者皆其道を高尚となし、朝廷を以て汚穢とおし、更に相標榜して稱號を爲れり、竇武陳蕃劉淑を以て三君となす、蓋し一世の宗ぶ所を云ふなり、ハ李膺、荀昱、杜密、王暢、劉祐、魏朗、趙典、朱寓を八俊となすハ、人英を言ふあり、郭泰、范滂、尹勳、巴肅、宗慈、夏馥、蔡衍、羊陟を八顧となすハ、能く徳行を以て人を引くを言ふあり、張儉、翟超、岑晊、苑康、劉表、陳翔、孔昱、檀敷を八及となすハ、能く人を導く追宗せしむるを云ふなり、度尚、張邈、王孝、劉儒、胡毋班、秦周、蕃嚮、王章を八厨となすハ、能く利を以て人を救ふを云ふあり、陳蕃竇武事を用ゐるに及び、復李膺等を擧抜たり、陳蕃、竇武の二人死して、李膺等ハ復官を廢せられ禁錮めらる、曹節ハ有司に諷して諸鉤党(拘拔ひきて以て党するを云ふ、)を奏上げしむ、李膺ハ詔獄(詔を奉けて囚人を鞫するなり)に詣り、考(拷に同じ)問に遇て死す、范滂の捕縛に就けるとき、母ハ與に訣かれして曰へるやう、汝ハ今李膺杜密と名を齊ふするを得たり、死するも又何の憾とする所あらんと、范滂ハ跪づきて教を受け、再拜をなし辭するとき、其子を顧みて曰へるに、汝に悪をなさしむるも、悪ハ爲すべからず、汝に善をなさしめんと欲して、我ハ悪をなさずと、聞く者之がために泣を流さゞる者おかりけるとぞ、是に於て党人の死する者百人、其死刑に行われ、徙に處せられ官を廢られ、禁錮せらるゝ者又六七百人あり、郭泰ハ私に痛み曰へるやう、詩に云ふ、人の云に亡ぶる邦國も殄瘁たりと、(蓋し漢室の滅ぶるを言へるならん)、詩に又云ふ、但未だ鳥の爰に止るを瞻るに、誰の屋に於てするを知らずと、(之漢の天下已に亡滅るとも未だ以て誰の手に落るを知らざると云ふに喩へしおり)郭泰ハ好んで、人の臧否をなすと雖ども、危言覈論(存分の諫言、刻き議論を云ふ)をおさず、故に濁世に處て、禍卒に及バずと云ふ、○諸儒に詔して五經の文字を正さしめ、禁碁に命して古文(科斗の書なり、之蒼頡と云へる者鳥の跡の文を觀て作りし文字を云ふ、蒼頡ハ黄帝の史官なり)篆(大篆なり之史籀と云ふ者初めて作りし文字にして、周の宣王の時大篆十五篇を著せり、世に籀文と云ふ者あり、)(隷八分書なり、之程邈と云ふ者の作り初めし文字あり、秦の時に之を作りて始皇帝に奏せりと云ふ)○三体を爲して、之を書し、石に刻して、大學の門外に立てしむ、○上ハ文學を好み、諸生の文章詩賦を能くする者を引き、並びに鴻都門下に詔を待しめ、大學を設け立てしが、諸生ハ皆斗筲の小人(斗筲ハ鄙細に喩ふ)にして、君子ハ之と伍する耻とせり、○西邸を開き官を賣る、各〻貢(二千石ハ二千万、四百石ハ四百万の類あり)あり、峻烈と云ふ者あり五百

萬金を以て司徒の官を得て、其子に問に外議の何如を以てしけれバ、子の曰ふやう、人〳〵其銅貨臭を嫌へるのみと、○鉅鹿の張角と云ふ者妖術を以て教授し太平道と稱し、符水病を療せりとて、弟子を遣ハし四方に游バしめ、轉相誑誘けるより、十餘年の間にして徒衆數十万に至れり、三十六方(方ハ將軍と云ふ如し)を置く、大方ハ萬餘人、小方ハ六七千人にして、各〳〵渠帥を立て、一時俱に起こる、皆黄色の頭巾を著け所在にて家を燔き、財を劫め、旬月餘にて天下皆之に響應へりと云ふ、皇甫嵩等を遣ハして黄巾を討しむ、嵩ハ沛國の曹操と云ふ者と軍を合せて賊を破れり、操の父嵩ハ官者曹騰の養子とある、或人の云へるに、夏侯氏の子なりと、曹操ハ少ふして機變敏警あり、權謀術數あり、任俠放蕩にして行業を始めず、汝南の許劭と云ふ者從兄の請ある者と高名あり、共に鄉黨の人物を覈議論し、毎月に輒ち題品を更ふ、故に汝南の俗に月旦評(毎月の評判記と云ふが如し)と云ふことあり、曹操ハ往きて、許劭に問ひ、曰へるやう、我ハ如何ある人物ぞ、許劭ハ之に答へざれバ、操ハ之を劫せり、乃ハち劭の曰へるに、子ハ治世の能臣、亂世の姦雄ありと、操ハ之を聞き喜びて去れり、是に至り賊を討を以て起れりとぞ、○皇甫嵩ハ張角を討てり、角死せしかバ、嵩ハ其弟と戰かひ破りて之を斬れり、○上ハ崩御にあり玉ふ、位に在す二十二年、改元する者四、建寧、喜平、光和、中平と云ふ、子辯立つ、何太后ハ朝廷に臨めり、后の兄大將軍何進と云ふ者尚書の事を錄

す、袁紹と云ふ者あり、何進に宦官を誅すを勸めけるに、太后ハ之を肯ぜず、紹等ハ衆策し、四方の猛將を召し、兵を引き京に向ハしめ、以て太后を脅かさんとす、卓未だ至らざるに何進ハ兵を勒して諸宦官を捕へ、少長とおく、皆之を殺す、凡そ二千餘人あり、鬚あくして誤り死する者あり、董卓ハ至りて亂の由緣を問ふ、辨時に年十四にして、語を了する能ハず、陳留王ハ之を答へて遺すあし、董卓ハ廢立を謀りしかど、袁紹ハ遂に之を可ず、董卓ハ大ひに怨りければ、袁紹ハ出奔したり、董卓ハ遂に辨を廢し、陳留王を迎へ立つ、是を孝獻皇帝とあす、(孝獻皇帝)名ハ協と云ふ、九歳にして董卓の爲に立てらる、關東の州軍兵を起し、董卓を討ち、袁紹を推して盟主となせり、董卓ハ洛陽の宮廟を焼き、都を長安へ遷つす、長沙の太守富春の孫堅も亦兵を起して卓を討ち、南陽に至り、衆數萬にして袁術と兵を合せたり、術ハ紹と祖を同じふす、皆故の太尉たる袁安の玄孫なり、袁氏ハ四世五公にして、富貴なること他の公族に異なり、袁紹ハ壯健にして威光あり、士を愛しければ、士の輻湊るもの多く、袁術も亦俠氣あり、是に至りて皆起れり、孫堅ハ擊ちて遣ハして荆州を圖りしかど、劉表の將黄祖の歩兵に射られて死せり、○司徒たる王允等ハ密に董卓を誅すを謀れり、中郎將たる呂布と云ふ者膂力あること人に過ぎければ、董卓ハ之

を信愛しけるよ布嘗て卓の意を失なひしことありて、董卓怨り手戟(小なる戟あり)を以て布に擲ちしに、布い避けて免かるゝを得たり、是に於て王允い呂布に結びて内應をなさしめ、董卓の入朝しけるとき、勇士を北掖門に伏せ、之を刺せしかば、董卓い車より墮ちて、呂布と大ひある聲にて呼べるに、呂布の曰へる詔ありて賊臣を討つなりと聲に應じて矛を持し、卓を刺し、趣して之を斬しめたり、是より先き、董卓い塢を郿に築き穀を積み、三十年の儲へをなす、金銀、綺錦より奇き玩弄に至るまで積めること、丘山の如し、自云ふ、吾事成らい、天下に據らん、成らざれば、此を守りて以て老んと、是に至り屍を市に暴しけるに、董卓い素躰肥たり、臍の上に大ひなる灶を置き、之を然す、其光曙に達すること數日ありしかば、董卓の黨い遂に兵を擧げて闕を犯し、王允を殺しければ、呂布い畏れて走りたり、○涿郡の劉備字い玄徳と云ふ、其先い景帝に出づ、中山靖王勝の後なり、大志ありて、語言少なし、喜べるも、怒れるも、顔色に形れず、涿郡の張飛、河東の關羽、備と相善し、備の起るに、二人之に從ふ、○孫堅の子策、弟權と富春に留まり、舒に遷るとき堅死せり、策時に年十四おりしが、往きて袁術に見へ、其父の餘兵を得たり、策い十餘歳の時已よ諸豪傑と交りを結び、名を知らる、舒人に周瑜と云ふ者あり、策と同年にして、亦英達夙成なり、是に至り策に從ひて起る、策の東して江を渡るとき、轉鬪し、向ふ所敢て其鋒に當る者な

し、百姓い孫郎至ると聞て、皆魂魄を失なひしかど至る所、一も犯す所なきより、民皆大ひに悦べりと云ふ○初め曹操い董卓を討するとき滎陽に戰ひしより、還へりて河内に屯し、尋ぎて東郡の太守を領し、東武陽に治せり、已にして袁州に入り之に據り、自ら刺史を領し、使者を遣いし、書を上つり以て、袁州の牧とおある、上い洛陽お還へり玉ひけるに、曹操い入朝し、て、上を許に遷したり、○曹操い擊ちて呂布を殺せり、初め呂布い闕中より出で、袁術に奔り、又袁紹に歸せり、已にして又去りしが曹操に攻られければ、走りて劉備に歸せしに、尋ぎて又劉備を襲ひて下邳に據るとき、劉備い走りて曹操に歸せしかば、曹操い劉備を遣いして沛に屯せしむるや、呂布い陳登をして曹操に見へて徐州の牧たるを求めしかど得ざるより、陳登い還りて呂布に謂て曰へるやう、登い曹公に見へて、言ひけるに、將軍を養ふい虎を養ふ如く、當に其に肉を飽かしむべし、飽ざれば、則いち人を噬むと、公の曰へる、然からず、之を譬ふる、鷹を養ふ如し、餓ゆれば則いち人に附し、飽けば則いち颺り去ると、呂布い復劉備を攻ければ、備い走りて、復曹に歸せり、曹い呂布を擊ちて下邳に至る、呂布い屢し戰ひて皆敗れ困迫て降參しけるに、曹操い之を縛りて曰へるやう、虎を縛るい急にせざるを得ずとて、卒よ縊りて之を殺したり、劉備い曹操に從ひて許に還れり、○袁術い初め洛陽に據り、已にして壽春に據れり、識に漢に代る者い當塗高と云ふを以て自から名字の術路とも塗の訓

に當ると云ひ、遂に帝と稱して、淫侈甚だし、既にして資産空虛なるを以て自立する能はず、袁紹よ奔らんと欲しけるに、曹操ゐ劉備を遣ゐしこを邀ふ、袁術ゐ走り還りて、血を嘔き死せり、○孫策ゐ既に江東を定め、許を襲ゐんと欲して未だ發せず、故殺す所の吳郡の守たる許貢の奴、其出でゝ、獵するに因り、伏して之を射る、創甚はだし、弟の權を呼び、代りて其衆を領せしめて曰へるやう、江東の衆を擧げ、機を西陣の間に決し、天下と衡(衡ゐ輕重を平かにする所以なり、衡を爭ふゐ兵力の加ふるとゝろそ)を爭ふゐ卿ゐ我に如かず、賢に任じ、能を使ひ、各〳〵其心を盡し、以て江東を保つゐ、我ゐ卿に如かずと、言終りて卒す、年二十六、○袁劭ゐ冀州に據り、精兵十萬、騎兵一萬の軍勢を簡びて許を攻んと欲しけれゞ、沮授と云ふ者あり諫めて曰へるに、曹操ゐ天子を奉じ、以て天下に號令せり、今兵を擧て南に向ふ、義に於て違へり、窃に公のために之を懼ると、袁紹ゐ之を聽用ゐずして、曹操と官渡よ相拒ぎ、襲ひて、袁紹の輜重兵(兵器兵粮を運搬するの兵なり)を破りしかゞ、紹の軍ゐ大ひに潰れけるより、慚憤ふり、血を嘔きて死せり、○車騎將軍たる董翁と云ふ者密詔を承くるを稱し、劉備と曹操を誅さんと欲せり、一日曹操ゐ從容に劉備に語りて曰へるやう、今天下の英雄と云ふゐ、唯使君と操とのみと、劉備ゐ方に食しけるに匕箸を失せしに雷震に値ひけれゞ、詭りて曰へる、聖人の云せに、迅雷風烈あるときゐ必らず變ずと、眞に以あるなりとて、雷に値るを以て吾曹操に見扳かれしを畏れ匕箸を失せ〻を言ひまぎらいせしとなん、劉備ゐ既に遣ゐされて、袁術を邀へ、因りて徐州に如き、兵を起し、曹操を討ちけるに、曹操ゐ之を擊ちしかゞ、劉備ゐ冀州に奔り、兵を領し汝南に至り、汝南より、荆州に奔り、劉表と云ふ者に歸せり、嘗つて劉表の坐に於て起ち厠に至るとき、還りて慨然として涕を流しけれゞ、劉表ゐ怪みて之を問へり、劉備の曰へるやう、常時身ゐ鞍を離れず、髀の肉ゐ皆消す、今復騎のらされゞ、髀の肉ゐ復生ぜり、日月の過るゐ水の流るゝ如く、老の將に至らんとす、功業建ず是を以て悲しめるのみと、郷郷の諸葛亮と云ふ者襄陽(府の名)の隆中(山名)に寓居し、毎に自から管仲、樂毅に比せり、劉備ゐ士を司馬徽と云ふ者に訪ひけれゞ、徽の曰へる時勢の務を知る者ゐ俊傑にあり、此間自から伏龍鳳雛(伏龍ゐ孔明を指し、鳳雛ゐ龐士元を云ふ)あり、諸葛孔明ゐ臥龍なりと、備劉ゐ三たび往きて、乃ち亮を見るを得たり、因りて策を問ひけれゞ、孔明の曰へるやう、曹操ゐ百萬の衆を擁し、天子を挾さみ諸侯に令す、此れ誠に與に鋒を爭そふべからず、孫權ゐ江東に據有し、國險にして、民皆之に附けり、之と共に援とあすべくして、之を取るを圖るべからず、荆州ゐ武を用ふるの國にして、益州ゐ險あり四塞にして、沃野千里あり、是れ則ゐち天府の土(天府の土とゐ、多く財貨の

出る土地を云ふ)と云ふべし、若し荊益二州を跨有し、其巖窟よして嶮阻なる地を保たゞ、天下變あるも、亦荊州の軍ハ宛洛(宛縣洛陽を云ふ)に向ひ、益州の衆をして秦川に出しめゞ、孰か簞食壺漿を以て將軍を迎へざらん乎、劉備の曰へる、善しと、是れより孔明と情好日に密なりしかゞ、備の曰へるに孤に孔明あるハ、猶魚の水ある如きなりと、士元、名ハ龐と云ふ、龐德公の從子あり、德公ハ素より重名ありけれゞ、亮ハ毎に其家に至りて、獨床下に拜せりと云ふ、○曹操ハ劉表を擊てり、表卒す、其子琮ハ荊州を擧げて操に降參せり、劉備ハ江陵に奔りけるに曹操ハ之を追へり、因りて備ハ夏口に走るとき、曹操ハ軍を江陵に進め遂に東下しけれゞ、亮ハ備に語て曰へるやう、請ふ、援兵を孫將軍に求めんとて、亮ハ孫權に見へて之を說きしに、權ハ大ひに悅びたり、是に於て曹操ハ權に書を遺りて曰へるに、今水軍八十萬衆を治め、將軍と吳に會獵せんと、權ハ之を以て群下に示しけれゞ色を失なハざるものなし、張昭と云ふ者あり、之を迎へ戰ハんと請ふに、魯肅と云ふ者之を不可となし、權に勸めて周瑜を召しむ、周瑜ハ至りて曰へるやう、請ひ願くハ數萬の精兵を得て、進み夏口に徃き、保任と將軍のために之を破らん、孫權ハ刀を拔き、前の奏案を斫りて曰へるに、諸將吏にして敢て操を迎へんと言ふ者ハ、此の案の如く同じく斬らんと、遂に周瑜を以て三萬人を督おしめ、劉備と力を合せて操を逆へ擊しめ、進みて赤壁に遇へり、周瑜の部將たる黃蓋と

云ふ者曰へるやう、曹操の軍ハ方に進みて、船艦ハ首尾相接せり、宜しく燒て、之を走らすべきなりとて、乃ハち蒙衝(船の狹くして長きものを云ふ、敵の船を衝破る船あり)十艘を取り、燥萩枯柴を載せ油を其中に灌ぎ、帷幔に裹み、上に旗旌を立て、豫じめ走舸を備へ、其尾に繫なぎ、先書を以て曹操に遺り、詐はりて、降參せんと欲するとなす、時に東南風急ありしかゞ、蓋ハ十艘を以て最も前み著け、中江にして帆を擧ぐれゞ、餘船ハ次を以て俱に進むを見て、曹操の軍は皆指して言へるに蓋ハ降參せしと、相去ること二里餘にして同時に火を發しけるに、火烈しく、折柄風猛しく、船の走ること箭の如く、北船を燒き盡し、烟焰ハ天に張り、人馬のために燒れて海に溺れ死する者甚だ衆し、周瑜ハ輕銳を率ゐて、鼓を大ひに進みしかゞ、北軍ハ大ひに壞れて、曹操ハ走り還り、後に屢々兵を孫權に加へしかど志を得る能ハざるより、操ハ大ひに歎息して曰へるやう、子を生まゞ、當に孫仲謀(權の字あり)の如くなるべし、向者なるものハ劉景升(表の字なり)の兒子にして豚犬あるのみと、○劉備ハ荊州江南の諸郡を狗下しけれゞ、周瑜ハ疏を權に上つりて曰へるやう、備ハ梟雄姿(資と通ぜり)ありて、關羽張飛の如き熊虎大將あり、今此の三人を聚め、驅場に在り、恐らくハ、蛟龍(地中に潛伏し、龍の屬にして角なきものなり)にして雲雨を得ゞ、地中の物に非ざるなり(とハ時を得て起るものハ復制すべからざるを言ふなり)宜しく、劉

備を徙して呉に置くべしと、孫權ハ之に從ハざれバ、周瑜ハ方ゟ北方を伐つを圖んと議せしに會々病て卒せり、魯肅ハ代りて其兵を領し、魯肅ハ權ゟ荊州を以て劉備に借し、共に俱に操を拒がんことを勸めしかバ、權ハ之に從へりと云ふ、權の將たる呂蒙と云ふ者、初め學ハず、權ハ蒙に書を讀むを勸めたり、魯肅後に蒙と議論しけるとき、大ひに驚ろきて曰へるやう、卿ハ復呉下の阿蒙に非ずと、蒙の曰へるゟ、士別るゝ三日ならバ、即ハち當に目を刮りて相待つべしと、○劉備ハ初め龐統と云ふ者を用ゐて來陽の令となせしに治らざれバ、魯肅ハ劉備に書を遺りて曰へるやう、士元ハ百里(縣令なり)の才にあらず、治中別駕たらしむれバ、乃ハち其驥足を展るを得んのみと、備ハ之を用ふるに益州を取るを勸めたり、因りて備ハ關羽を留め荊州を守らせ、兵を引き流に泝り、巴より蜀に入り、劉璋を襲ひて成都に入るとき、劉備ハ已に益州を得しかバ、孫權ハ人をして劉備に從ひ荊州を求めしむるに、備ハ之を還へすを肯ぜざれバ、遂に之を爭ふに至り、已にして荊州を分てり、劉備ハ蜀より漢中を取り、自立して漢中王となる、漢中の將たる關羽ハ江陵より出でゝ、樊城を攻め、襄城を拔き取り、許より以南ハ往々遙に應じければ、關羽の威光ハ華夏に震へり、曹操ハ許都を徙し、以て其鋒を避けんと議するに至る、司馬懿の曰へるやう、劉備と孫權とハ外ハ親みありて、内ハ疎し、關羽の志を得るハ、孫權の必らず願ハざる所なり、人を遣ハし、權に勸め、其後を躡しめ、江南を割て以て權を封ずるを許すべしと言へば、操ハ之に從ひたり、時に魯肅已に死して、呂蒙之に代り、亦權に關羽を擊つを圖らんことを勸む、操の師至りて、樊を救ひければ、權の將たる陸遜と云ふ者、又關羽の後を襲ひしかば、羽ハ狼狽て走り還りけるより、權の軍ハ關羽を獲へて、之を斬り、遂ゟ荊州を定めたり、○初め曹操ハ袞州の牧より入りて丞相となり、冀州の牧を領し、魏公に封せらる、銅雀臺を鄴に作くり、已にして爵を進めて王となり、天子の車服を用ゐ、出入に警蹕ハしめ、子丕を以て王の太子となし、操卒す、丕立ちて、自ら丞相冀州の牧となる、魏の群臣言ふ、魏ハ當に漢に代るべしと、丕ハ遂に帝に迫りて位を禪らしめ、帝を以て山陽公となせり、帝ハ位に在して改元する者三、初平、興平、建安と云ふ、元年より二十五年に至るまでハ、則ハち皆曹操の政事をなせる時なり、共に三十一年、位を禪り又十四年にして卒す、漢ハ高祖元年に王となり、五年に帝となりしより、是に至り二十四世、四百二十六年なり

三國

漢

附たり魏呉二僭國

(昭烈皇帝)諱ハ備、字ハ玄德と云ふ、漢の景帝の子にして、中山靖王勝の後なり、大志あり言

語少おく、喜べるも、怒れるも顔色よ形れず、身の長七尺五寸、手を垂るれば、膝より下り、顧みれば、自ら其耳を見たりと云ふ、○蜀中に傳言るやう、曹丕い位を簒ひ立ちて、帝い已に害に遇ふと、是よ於て漢中王喪を發し服を制し、諡して孝愍皇帝と曰ふ、夏四月、帝位に武擔（山名）の南に即き、天下に大赦し、章武と改元せり、○諸葛亮を以て丞相とおし、許靖を司徒とおせり、○宗廟を立てい、高皇帝以下を祫祭りたり、○夫人吳氏を立て皇后とおし、子禪を皇太子となす、○魏主丕、姓い曹氏よして、沛國譙の人なり、父の操い魏王とおり、丕其位を嗣ぎ、首めに九品の等位を立て、人を官つけるの法を置き、州郡に皆九品中正を置き、人物を區別し、其高下い次第せり、是よ於て曹丕い既に漢を簒ひ、自立して帝となり、操を追尊して太祖武帝となし、黃初と改元す、○帝い關羽の皮するに耻ぢ、自ら將として、孫權を伐ちければ、孫權い和好を求めしかど許さいるより、孫權い使者を魏に遣いし降參を請ひけるに、魏い孫權を封じ吳王とおせり、魏主い吳の使者趙咨と曰ふ者に問ふて曰へるやう、吳王頗ふる學を知れり乎と、趙咨い答へて曰へるに、吳王い賢に任じ、能を使ひ、志い經畧（天下を治むる策なり）を存す、餘閑あるを以て經書歷史に博覽なりと雖とも、書生の章を尋ぬ、句を摘むに效いずと、魏主の曰へるに、吳い魏を難かる乎、趙咨の曰ふやう、帶甲百萬の衆あり、江漢を以て城地となす、何の難かることか之有らん、又曰へる、吳に太夫の如き者幾

人なるぞ、咨曰へく、聰明よして特に達たるもの八九十人あり、臣の比の如きい車に載せ斗量を以つて數ふるに勝べからず（蓋し斗量云々い其多きを言ふなり）○帝い巫峽（山名）より夷陵に至り、數十の屯營を立て吳の軍と相拒む、累月（數月を累ぬるを云ふ）ありしに、吳の將陸遜い運りに其四十餘營を破りしかば、帝い夜遁れたり、○魏主い吳の侍子（任子あり）を責むるに至らざれば、怒りてこれを伐てり、吳王い黃武と改元し、江に臨みて拒せき守れり、○三年夏四月、帝い崩御になり玉ふ、位に在す三年、改元すること一、章武と云ふ、諡して昭烈皇帝と曰ふ、太子禪位に即き、亮を封じ武鄉侯とおし、太子已に立是を後皇帝とおす、（後皇帝）名い禪、字い公嗣と云ふ、昭烈皇帝の子あり、年十七にして位に即き、建興と改元す、丞相たる諸葛亮い遺詔を受けて政事を輔たり、昭烈帝い終ふるに臨み諸葛亮に謂て曰へるやう、君の才い曹丕に十倍せり、必らず能く國家を安んじ、終に大事を定めん、嗣子輔く可きい之を輔けよ、如し其不可なる、君以て自ら取るべしと、亮い涕泣して曰へるに臣敢て肱股の力を竭し、忠貞の節を效し、之に繼ぐに死を以てせざらんやと、亮い乃ち官職を約し、法制を修めて、敎へを下し曰へるやう、夫參署（行ふ所の事、其同異を參し署してこれを行ふを云ふ、蓋し諸官の評議所あり）い衆思を集め、忠益（國益と云ふ如し）を廣ふするあり、若し、小嫌に遠かり、相違覆（違覆い人の議論よ違ひ反對するを云ふ）するを難かるときい、曠

しく闕損あらんと、亮い乃ち鄧芝を遣いし、吳に使者せしめ、和好を修めしむ、鄧芝い吳王に見へて曰へるに、蜀い重險(荊門重閬の要害なり)の固めあり、吳に三江(吳松江、錢塘江、浦陽江是あり)の阻あり、共よ唇齒をあし、進んでい天下を兼并すべし、退そきてい、鼎足(鼎の三足の如く吳魏蜀と三國幷び立を云ふ)して立べしと、吳い遂に魏と絕して專ら漢とのみ和親を結びたり、○魏主い舟師を以て吳國を擊ちけるに、吳い艦を江に列ねしかば、江水いこれがために盛長せしを以て、魏主い臨望て歎じ曰へるやう、我武夫千群ありと雖ども、施こすべきの術なきなりとて、是より師を引き還せりとなん、○南夷叛せり、漢の丞相たる亮い往きて之を討ち平ぎけるに、孟獲と云ふ者あり、衆夷漢(夷人と漢人とあり)に服せらる、是に於て亮い孟獲を生致て、營陣を觀せしめ、縱して更に戰いしむる、七たび縱し、七たび禽にせしかど、猶獲を遣りけるよ、獲い去らずして曰へるやう、公い天威なり、南人復反かずと、○魏主又舟師を以て吳よ臨みけるとき、波濤の洶湧を見て歎じ曰へるに、嗟乎固天の南北を限る所以なりと、○魏主丕死す、位を僭むこと七年、改元する一、黃初と云ふ、諡して文皇帝と曰ふ、子叡立つ、是を明帝とあす、叡の母い誅さる、丕嘗て叡と出でい獵するとき、子母鹿を見て、既に其母鹿を射、叡に其子鹿を射さしめしかば、叡い泣て曰へるやう、陛下い已に其母を殺せり、臣又其子を殺すに忍びずと、丕い惻然て、是に及びて嗣とあり位に

即けり、○處士あり、管寧、字い幼安と云ふ、東漢の末より、地を遼東に避る三十七年、魏之を徵しけれバ、乃ち海に浮び西に歸へり、官を拜するに受けずと云ふ、○漢の丞相たる亮い諸軍を率ゐて、北の方魏を伐てり、亮い預め發するに臨みて、疏を上つり曰へるに、今や天下い三分し、益州(漢の領地あり)い疲弊せり、此れ乃ち危急存亡と謂ふべきの秋あり、宜しく聖聽を開張て、宜しく忠諫を入るゝの路を塞ぐべからず、宮中府中とい倶に一体たり、儀否を陟罰するも、宜しく異同なかるべからず、若し、姦を作し、科を犯し、及び忠善の者あらバ宜しく有司に附し、其刑と賞とを論じて、以て平明の治を昭にすべし、賢臣を親み、小人を遠ざくる、此れ先漢の興隆所以あり、小人を親しみ、賢臣を遠くる、此れ後漢の傾頽る所以なり、臣い本布衣にして、南陽に躬ら耕せり、苟くも性命を亂世に全ふし、名聞利達を諸侯に求めず、先帝臣の卑鄙を以てせず、猥りに自ら屈して、臣を草廬の中に三たび顧みられ、臣よ問ひ玉ふに當世の事を以てせり、是に由りて感服激勵て、先帝に許すに驅馳(股肱の力を竭すを云ふ)を以てす、先帝い臣の謹愼あるを知り、崩ずるに臨み、臣に寄するに大事(賊を討の事を云ふ)を以てす、命せを受くるより以來、夙夜憂慨し、付託の效あらすして、先帝の明を傷んことを恐る、故に五月瀘を渡り(瀘水い瘴氣多し暑日い行べからず此れ其艱難を言ふなり)深く不毛に入る(草本の生ぜざる地なり、孟獲を討を言ふなり)今

南方已に定まり、兵甲已に足る、當に三軍を奬率て北の方中原（關中の地あり）を定め、舊都（洛陽なり）に還すべし、此れ臣が先帝の報ひて、陛下に忠ある所以の職分なりと、遂に漢中に屯せりとぞ、○明年大軍を率ゐて祁山を攻む、殘陣、整齊て號令明肅たり、始め魏の昭烈帝既に崩御して數歲なりしに、寂然として聞ゆるなきを以て、畧備ふに所あり、猝ま亮の出るを聞て、朝野ともに恐懼たり、是に於て天水、安定等の郡皆亮に應じければ、關中の擧の物を震ふ如く動搖しけるより、魏主の長安に如き、張郃を遣して之を拒がしむ、亮の馬謖と云ふ者をして諸軍を督し街亭に戰はしむるに、馬謖の亮の節制法度に違ひしかば、郃が之に乘じて大ひに破れり、亮の乃ち漢中に還り、已にして復漢帝に言ひ曰く、漢賊（賊の魏を云ふ）兩立せず、王業も偏地（蜀都を云ふ）を守らば安事あらず、臣鞠躬て力を盡し、死して後已んのみ、成敗利鈍に至りては、臣の能く逆しめ覩る所に非るありと、兵を引き散關（關の名鳳州の梁泉縣にあり）に出で、陳倉（邑の名）を圍みて克ず、○吳王の孫權の自ら武昌にありて皇帝と稱し、父堅を追尊して武烈皇帝となし、兄の策を長沙桓王となし、已にして都を建業（郡あり）に遷したり、○蜀漢の丞相たる亮の又魏を伐ち祁山を圍みければ、魏の司馬懿を遣はし、諸軍を督し亮を拒がしむるに、懿の戰ふを肯ぜざれば、貫詡等の云へるやう、岱の蜀を畏るゝ虎の如し、天下の笑ひを如何せんと、司馬懿の乃ち張郃をして亮に向はしむ、亮

の之を逆へ戰かひけるに魏の兵大ひに敗れ、亮の糧食の盡るを以て軍を退ぞけしかば、郃の之を追ひ、亮と戰ひ、伏弩に中りて死せり、亮の已に還りて、農事を勸め武術を講じ、木牛流馬（餉を運送する車なり）を作り、邸閣（米を藏るの處あり）を治め、民を息しめ、兵士を休しめ、三年よして之を用ゐ、衆十萬を悉し、又斜谷口より魏を伐ち、軍を渭水の南に進めければ、魏の將軍司馬懿の兵を引きて拒き守るより、亮の前者數々出るに、皆運糧の繼がずして己の志の伸びざらしむるを以て、乃ち兵を分ちて屯田せり、耕す者の瑕水の濱に居める民の間に雜りて、百姓安堵し、軍に私あらし、亮の數々懿に戰ひを挑みけるに、懿の出でざれば、乃ち巾幗（婦人の首の飾りなり）之を遺るの其丈夫の心あきを辱しめ、之を怒して戰ひを挑なり）婦人の服を以てす、亮の使者懿の軍に至るとき、懿の其寢食及び事の煩簡を問ふて戎事に及ばず、使者の曰へるやう、諸葛公の夙に興き夜に寐ね、罰（杖罪の刑なり）二十以上の、皆親しく之を覽る、啖食ところ數升に至らず、懿の之を聞て人に告げて曰へるやう、亮の食少なく、事煩はし、安ぞ其能く久しからん乎と、亮病篤し、大星あり、赤くして光芒あり、亮の營中に墜けるに未だ幾くならずして亮卒せり、長史たる楊儀と云ふ者軍を整のへ還りけるを、百姓の奔りて懿に告げしより、懿の之を追ひしかば、姜維の楊儀をして旗を反し皷を鳴し、將に懿に向はんとする若くせしむれば、懿の敢て逼らず、百姓の之

がために諺して曰へるやう、死せる諸葛ハ生る仲達(懿の字なり)を走らすと、懿ハ之を聞て笑ひ曰へるに、吾ハ能く生を料りて、死を料る能ハずと、亮ハ嘗て兵法を推し演め、八陣の圖(天地風雲を四正となし、龍虎鳥蛇を四奇となす、凡て八陣なり)を作くれり、是に至り懿ハ其營壘を案べ行り歎じて曰へるやう、天下の奇材なりと、亮の政事をなす、私なし、馬謖ハ素亮に知らる、軍を敗るに及び、涕を泣し之を斬りて、其後たる者を卹む、李平、廖立皆亮に廢せられしかど、亮の喪を聞ゝ及び、皆歎息して涕を流し、卒に病を發し死するに至る、史稱す(陳壽一國誌の評を云ふ)亮ハ誠心を開き公道を以て天下に布き、刑法ハ峻しくありしかど、怨むる者なし、眞に治を識るの良材なりと、其材ハ治國に長じて、將畧ハ長ずる所ゝ非と謂ハ則ハち非なり、初め丞相亮ハ嘗て帝に上表て曰へるやう、臣ハ成都に桑八百株薄田(粗惡の田地を云ふ)十五頃あり、子孫の衣食ハ自ら餘あり、別に生產を治め以て尺寸なりとも長に及バず、臣死するの日內に餘帛あり外に贏材ありて以て陛下に負かずと、是に至り卒するに、其言の如し、忠武と諡せり、○魏主ハ性質土功を好のめり、是れより先既に許昌宮を治め、後又洛陽宮を作り、長安の鐘虛、駱駝、銅人、承露盤(解ハ先に委しく出だせり、洛陽に徙しけるに盤折る、其聲數十里に聞ゆ又銅人ハ重して致す能ず、乃ハち大ひに銅を發し、銅人二を鑄て、司馬門外に列坐せしめ、號して翁仲と曰ふ、土山を芳林園ゝ起し、雜木善草を植え、禽獸を捕へ、其中に致せり、之を諫むる者ありしかど、皆納れざりしと云ふ、○魏主の病あるとき、司馬懿を召して入朝せしめ、曹麥を以て大將軍となし、魏主叡殂す、位を僭する十四年、改元する者三、大和、靑龍、景初と云ふ、子芳立つ、是を廢帝邵陵厲公となす、芳ハ八歲にして位に即けり、司馬懿曹爽の二人ハ遺詔を受けて政事を輔け、司馬懿ハ大傅となる、○漢ハ丞相の亮既ゝ亡するより、蔣琬代りて政事をなせり、楊敏ハ琬を毀りて曰へるやう、事を作す憤々(亂れたる貌を云ふ)前人(亮を指す)に及バず、或人楊敏を推治せんと請ふ、蔣琬の曰へる、吾實に前に如かず、推治べきなしと、琬卒して、費禕董允政事をなせり、公平に亮ありて忠を盡す、允卒す、姜維ハ費禕と並びに政事をなせり、○魏の曹爽ハ驕奢を極めければ、司馬懿ハ之を殺し、懿ハ魏の丞相となり、九錫を加へられしかど受けバ、爽の黨夏侯覇と云ふ者蜀に奔れり、姜維ハ之に問ひて曰へるやう、懿の政事を得るや、復征伐の志ありや否や、覇の曰へる、彼ハ家門を營立せり、未だ外事に遑あらず、鍾士季と云ふ者あり、少しと雖へども、若し朝廷の政事を管らバ、吳蜀の憂ひなし、○魏の司馬懿卒す、其子師を以て撫軍大將軍錄尙書事となす、○吳主殂す、諡して大皇帝と曰ふ、子亮立つ、○漢の費禕ハ汎く衆を愛して疑がハず、降人刺して之を殺せり、姜維ハ事を用ゐて、數々兵を出して魏を攻めたり、○魏の李豐と云ふ者數々魏主に召されければ、司馬師ハ其己を議す

るを知り、之を殺す、魏主い不平なりしかバ、左右の者い師を誅すを勤めしかど、魏主敢て發せざるより、師い遂に魏主を廢し位を僭する十六年、改元する者二、正始嘉平と云ふ、師い高貴卿公を迎へ立つ、是を廢帝とあす名い髦と云ふ、文帝の孫にして明帝の姪あり、年十四にして位よ即けり、○揚州の都督毋丘儉、刺史文欽等兵を起して司馬懿を討ちけるに、司馬懿い撃て之を敗りて師卒す、弟昭師に代り大將軍錄尚書事となる、已にして大都督となり、黄鉞(鉞い黄金を以て之を飾る、天子の杖く所なり)を假る、楊州の都督たる諸葛誕と云ふ者兵を起し昭を討つ、昭攻めて之を殺し、昭い相國とあり、晉公に封ぜられ、九錫を加へしかど受けず、○呉主の亮い政事を親らし、數〻中書に出て大帝の時に舊事を視る、嘗て生梅を食ひ、蜜を索むるに蜜中に鼠矢ありけれバ、藏吏を召して問ふて曰へるやう、黄門(宦官あり)い爾に從ひ蜜を求る邪、吏の曰へるに向に求む、故に敢て與へず、黄門の者服せざれバ、鼠矢を破らしむるに矢中い已に燥きけれバ、大ひて笑ひて曰へるやう、若矢にして先に蜜中にありしかバ、中外俱に濕ほん、今外濕ひ、内燥けり、之必ず所爲ありとて、之を詰りけるに果して服しけれバ、左右の者い之を見て大ひに驚慄せりと云ふ、○大將軍孫綝と云ふ者、難題を問へる多きを以て、病と稱し朝せず、兵を以て宮を圍み、亮を廢し會稽王とあし、琅琊王休を迎へ立つ、休已に立ちて綝を丞相とあす、綝又新宮に禮あきを以て、遂に誅さる、○魏主の髦い威權の日に去るを見て、其恐よ勝ずして曰へるやう、司馬昭の心い路人も知る所あり(蓋し其將に位を簒んとするを云ふ)とて、殿中の宿衛たる蒼頭官奴を率ゐ、鼓を鳴し、譟聲を揚て出で、昭を誅さんと欲す、昭の党たる賈充い入りて魏主と戰ひけるとき、成濟と云ふ者戈を抽き、魏主髦を刺し、車下に殞し、追ふて位を廢し、庶人とあせり、位を僭する七年、改元する者二、正元、甘露と云ふ、是に於て、司馬昭い常道鄉公、璜を迎へ立つ、是を魏の元皇帝となす、常道鄉公元皇帝、初め名い璜と云ふ、燕王宇の子にして、操の孫あり年十五にして位に即き、名を奐と改たむ、○漢の姜維屢々魏を伐ちけれバ、司馬昭い之を患ひ、鄧艾鍾會を遣いし、兵に將として入り寇す、鍾會い斜谷、子午谷より、關中に赴き、艾い狄道より甘松沓(地名)中に赴き、以て姜維と綴れり、姜維い鍾會の已に漢中に入ると聞い、兵を引き、沓中より還へりけれバ、鄧艾之を追蹤て大ひに戰ひ、姜維い敗走して、還り劍閣を守り、以て鍾會を拒ぎたり、鄧艾進みて陰平に至り、無人の地を行く七百里、山を鑿り、道を通し、橋閣を造作り、山高く谷深けれバ鄧艾い氈を以て自から裹み、推轉て下れり、將士い皆木を攀ぢ、崖に縁り、奥貫て進み、江油よ至り、書を以て漢の將たる諸葛瞻を誘ひけるに、瞻い其使者を斬り、陣を綿竹に列し以て待ち、戰ひしに敗績て、漢の將軍諸葛瞻之に死せり、瞻の子尚の曰へるやう、父子ともに、國の重恩を荷ひ、早く黄皓(佞臣なり)ある者

を斬らされ、國を敗り民を珍しむ用みて生るとも、何をかおさんと、馬に策ち陣を冒して死せり、○漢人ハ魏の兵の卒に至るを意はずして、城守をなさず、乃ハち使者を遣ハし璽綬を奉じて、鄧艾に詣りて降參せり、皇子たる北地王諶ハ怒りて曰へるやう、若し理窮まより、力屈し、禍來り將に敗れんとする、便ハち當に君臣ともに城を背にし、一戰して、同じく社稷のために死して、以て先帝に見ゆべきなり、奈何して降らん乎と、帝ハ之を聽玉ハざれバ、諶ハ昭烈帝の廟に詣り哭して、先妻子を殺し自殺したり　艾の成都に至るとき帝ハ已に出でゝ降りけれバ、魏ハ封じて安樂公とおせり、帝ハ位に在す四十一年、改元する者四、建興、延熙、景耀、炎興と云ふ、右ハ高帝の元年乙未より後帝禪の炎興癸未に至るまで、凡そ二十六帝、通じて四百六十九年にして漢亡びたり、○吳王休殂す、諡して景皇帝と曰ふ、兄の子たる烏程侯皓立てり、○魏の司馬昭ハ是より先に已に九錫を受け、已にして爵を進め晉王となす、昭本じて、子炎嗣げり、魏主奐ハ位を僭する六年にして、改元する者二、景元、咸熙と曰ふ、炎ハ魏主に迫りて位を禪しめ、封じて陳留王とおす、後卒して晉人之を謚して元と曰ふ、○魏ハ曹丕より是に至り凡そ五世、四十六年にして亡びたり、○漢亡びしより後、又甲申の年を歷て正統を闕くこと一年なり、

西晉

（西晉世祖武皇帝）姓ハ司馬、名ハ炎と云ふ、河内の人にして、昭の子、懿の孫なり、昭ハ晉王となりて、世子を立つるを議せり、議者賈充等の云へるやう、炎の髮ハ立ちて地ゟ委し、手を垂るゝ膝を過ぐるハ人臣の相に非るを以て遂に立つ、已にして嗣ぎて王となり、帝位に即き、懿を追尊して、宣皇帝となし、師を景皇帝とおし、昭を文皇帝とおして、大ひに宗室の者を封ぜりと云ふ、晉ハ吳を滅ぼすの　志　あり、羊祜ハ之を以て荊州軍事を都督せしむ、吳ハ陸抗と境を對し、使命常ゟ通ぜり、或とき陸抗ハ羊祜に酒を遺りけれバ、羊祜ハ之を飮て疑ハず、陸抗疾るとき、羊祜に之に成藥を與ふれバ、陸抗ハ之を服して曰へるやう、豈人を酖（鴆毒なり）する羊叔子（叔子ハ祜の字あり）ならん哉と、羊祜ハ務めて德政を修め、以て吳人を懷け、兵を交ふる毎に、日を刻し方に戰ふ、敢て掩襲せず、陸抗も亦其邊境を成る十卒に告げて、各〻分界を保するのみ、細利を求むるなかれと（蓋し侵掠すべからざるを云ふ）時に吳王皓ハ德政を修めずして、天下を兼併せんと欲し、術士に天下を取るを筮ハしむ、筮者の曰へるに庚子の歲に青蓋（車の蓋あり、青蓋車ハ王の乘車を云ふ）當に洛陽に入るべしと、蓋し衛璧の事を謂ひけるに、皓ハ之を悟らずして諸將の謀を用ひ、數〻晉國の邊境を侵盜せしかば、抗ハ之を諫めしに聽かずして陸抗卒せり、羊祜ハ吳を伐んと請ふ、議者多く同じからず、羊祜ハ歎じて曰へるやう、天下憙の如くならず、

ざること、常に十の七八あり、惟杜預張華の二人い其計を賛成し、羊祜の病るに入朝し面り陳述るを求めたり、晋帝い羊祜をして臥しながら諸将を護せしめんと欲す、羊祜の曰へるやう、呉を取る必らず臣の行を須ず、但呉を平ぐるの後、當に聖慮を勞すべき耳と、羊祜卒す、杜預を以て鎮南大將軍とおし、荆州軍事を都督せしむ、呉主皓い女色に淫り、人を虐たぐること日に甚だし、杜預い上表げて速かに之を征伐せんと請ふ、上表の至るとき、張華い適〳〵帝と棋を圍みけるよ、即いち枰を推し除け、手を斂め、其決斷あらんことを賛めしかば、帝い之を許せり、山濤と云ふ者あり、人に告げて曰へるやう、聖人に非るより、外寇き、必らず内憂あらん、豈算の得たる者に非ず乎と、時に山濤い吏部尚書たり、山濤い昔し魏晋の間にあり、稽康、阮籍、籍の兄の子咸向秀、王戎、劉伶と相與たり、竹林の七賢と號す、皆老子莊子の教へある虚無の學を崇尚ひ、禮法を輕蔑し、酒を縱まゝにし、昏酣して世事を遺落し、士太夫たる者い之に慕倣て、之を放達と言へり、惟山濤い仍意を政事に富り、是に至りて人の撰擧を典どり人物を甄抜き、各〳〵題目（所謂る四事三類あり）をなして之を奏上げたり、時人之を稱して山公の啓事となす、○晋太擧じて呉を伐つ、杜預い江陵に出で、王濬い巴蜀より下れり、呉人い江磧の要害ある所に於て、並びに鐵鎖を以て、江に横たへ之を截り、又鐵錐の長さ丈餘あるを作くり、暗に江中に置き、舟艦を逆へ拒ぎけるに、王濬い大ひある筏を作くり、水を善くする者を以て筏に乘て先行かしめ、錐に遇ふて輒いち筏を著け去り、又大ひある炬を作り、灌ぐに麻油を以てし、鎖に遇ふて、之を燒きしかば須臾にして鎖い融液て斷ち絶れたり、是に於て船に礙る所なし、遂に先上郡の諸郡に克ち、預じめ人を遣いし奇兵を率ゐ夜渡らしむ、呉將懼れて曰へる北來の諸軍い、乃いち飛びて江を渡れるやと、杜預い兵を分ち、王濬と合し、武昌を攻て之を降せり、杜預の謂へるやう、兵威已に振へり、譬へゞ竹を破るが如し、數節の後い刃を迎ふるのみにて解けり、復手を著くる所おきなりと、遂に群帥に方畧を指授て、徑に建業に造る、王濬い戎卒八萬人にして、舟を方ぶる百里、帆を擧げ直に建業を指し、鼓を鳴し譟聲をあげて石頭城に入りけれゞ、呉主皓い面縛（手を前に縛ばるなり）興櫬（親身の棺なり、棺を負ふて降るい、死罪に伏するを示すあり）して降りしかゞ、踣命侯に封ぜり、是ゟ於て遂に庚子に洛陽に入ると云ふ、識に符合したり、大帝より是に至り四世、帝と稱する凡そ五十二年にして亡び、孫策の江東を定むる以來に遡るに通じて八十四年なり、晋い魏に代り十有六年、太康元年に至り呉を滅ぼし、又十年ゟして、帝い崩御し玉へり、帝の始め位に即くや、嘗て雉頭裘（雉の頭の毛を集めて、作りし裘あり）を殿前に焚きて、以て儉約を示せり、既にして奢り縱恣に至り、數千の後宮い常に羊車に乘れゞ、宮人い竹葉を門に挿みて、鹽を洒ぎ、以て之を待てり、羊車の

至る所、即ち留り酣宴して、群臣と語りけるに、未だ嘗て國を經營るの遠謀あるを言はず、吳既に平ぐより天下に事おしと謂ひ、尽く州郡の武備を去りしりぞ、山濤ゝ獨之を憂ひたりと云ふ、漢魏より以來羌胡、鮮卑の降る者ゝ、多く塞内の諸郡に處れり、郭欽と云ふ者あり、嘗て疏を上つり謂へるやう、宜しく吳を平ぐるの威に及び、漸く内地諸郡の雜胡を邊要の地に徙し、四夷出入の防を峻うし、先王荒服（京都より五百里外を荒服と云ふ、是より内ゝ夷狄の住居を禁ぜり）の制を明かにすべしと、帝ゝ之を聽玉ゝざるより、卒に天下の患ひとなる、帝ゝ位に在して、改元する者三、泰始、咸寧、太康と云ふ、太子立ちて帝となる是を孝惠皇帝と稱ふ、

（孝惠皇帝）名ゝ衷と云ふ、性質ゝ不慧なるものあり、太子たるとき賈氏を納れて妃とおす、充の女なり、權變譎詐のみ多し、衛瓘と云ふ者嘗て武帝に侍せしとき、陽り醉ふて前に跪づき、手を以て床を撫でゝ曰へるやう、此の坐惜むべしと、武帝之を悟り、密かに尚書の疑事（ゝ尚書に決しがたき難事を云ふ）を封じ、太子に之を決せしめけれゞ、妃賈氏ゝ大ひに懼れて、外人を倩ひ草稿を具へ代り對へしめ、太子をして自ら寫さしめしかゞ、武帝ゝ之を見て大ひに悦べるより遂に廢せられざるを得たり、是に至りて位に即き、賈氏を以て皇后とおす、后ゝ政事に參預り、太皇后楊氏ゝ乃ゝち帝の母にして楊后の從妹あり、父の駿ゝ太傅となる、賈后ゝ駿を殺して、太后を廢し、太宰たる汝南王の亮を殺し、太保たる衛瓘を殺し、楚王瑋を殺し、衆望を以て張華、裴頠王戎を用ゐ機密樞要を管らしむ、張華ゝ心を帝室に盡しけれゞ、賈后ゝ凶險ありと雖ども、猶能く敬ひ重ずるを知れり、裴頠と心を同ふして政事を輔くるより、數年の間、暗愚なる人君の上にありと雖ども、朝野ともゝ安靜なるを得たりと云ふ、王戎ゝ時に浮沈て、更に政事向のことゝ匡救くるなし、性質も亦貪吝して、田園の多きこと天下に遍ぬし、自ら牙籌を執りて晝夜會計せり、家に好き李の樹あり、人其種を得るを恐れ、常に其核を鑽りて復生ぜざらしむ、凡そ人を賞し、人を選拔する所、專ら虛名を事とせり、阮咸の子籍の王戎に見へけるとき、王戎ゝ問ふて曰へるやう、聖人ゝ名教（名を以て教へを立つ、所謂る孝弟忠信仁義禮智の如きあり）を貴とび、老子莊子ゝ自然（天然自然に從ふて人爲を容れざるを云ふあり）を明かにす、其旨異同きや、嚮の曰へる、將同じきなからんやと王戎ゝ咨嗟たること良久しふして、遂に之を辟す、時の人三語（將無同）の椽と號せり、是の時に王衍、樂廣皆清談（清虛の談、即ちち老莊の學を云ふ）を善くす、王衍ゝ神慣明かにして秀れたり、少き時山濤ゝ之を見て曰へるやう、何物の老嫗か寧馨兒を生める、然かれども天下の蒼生を誤まる者ゝ、未だ必らずしも此人に非るありと、衍の弟澄、及び阮咸、咸の從子なる脩、胡毋、輔之、謝鯤、畢卓等皆任放を以て達とおし、酣酔て裸体にあるを以て非と

なさず、隣比の舍の郎(吏部郎の役所なり)にて作れる釀熟きければ、畢卓い夜蚤間に至り盜み飲みけるに、守者に縛へられ、旦に之を視れば畢吏部なり、樂廣い聞て之を笑ふて曰へるやう、名敎の中にも自ら樂地あり、何ぞ必らず乃いち爾るやと、初め魏の時何晏等論を立るに天地萬物皆無を以て本となすを以てす、王衍等之を愛重せり、裴頠いまた崇有論を著いせしかど、之を救ふ能いずとあり、㊀太子遹い賈后の生める所に非るより、后い之を廢して殺せり、征西大將軍たる趙王倫い詔を矯りて、兵を勒へ宮に入り、后を廢して之を殺し、張華裴頠の二人を殺して、王倫い相國とある、淮南王允い兵を率ゐて王倫を討ちしかと克ずして死せり、倫又衛尉、石崇等を殺す、石崇の愛妾に綠珠と云ふ婦あり、倫の嬖人の孫秀を云ふ者之を求めしに與へざれば、孫秀い崇等允を率ゐて乱をおすと詗ひ、之を收たり、崇の曰へるやう、奴輩い吾財を利するのみ、收者曰へるに、財い禍たるを知る、何ぞ早く之を散せざると、遂に殺さる、趙王倫い自ら九錫を加へ、帝に逼りて位を禪らしむ、黨與たる者皆卿相となり、奴卒の如き者も亦爵位を加へらるゝに至る、朝會あることに貂蟬(諸武官の冠飾とおす)する坐よ滿ちければ、時人い語りて曰へり、蟬を附けて文とおし、貂の尾を以て飾とおす)する多きを以て貂のみにて飾となすに足らざるより、狗の尾を以て之に續すと云ふ意にて誹りたる者あり)齊王冏い許昌を鎭し、成都王穎い鄴を鎭し、河澗王頴い關中を鎭し、各〻兵を擧て倫を討ちけれバ、倫い誅に伏せり、因りて冏い政事を輔け、奢驕て權を擅まゝにせしより、頴い長沙王乂をして之を殺さしむ、頴も亦功を恃みて驕奢なり、已よりして頴と兵を擧げて反しけれバ、長沙王乂い帝を奉じて頴と戰ふ、頴の將たる陸機と云ふ者戰ひ敗れて收へられ、歎じて曰へるやう、華亭の鶴唳、復聞を得べけん乎と、弟の雲と與に皆頴のために殺さる、機雲の兩子い皆陸抗の子なりと云ふ、頴い兵を進めて京師に入り、丞相となる、已にして鄴に還へれり、頴い頴を表あげて皇太弟となす、東海王越い帝の命を承けて頴を征伐せしかバ、頴い兵を遣いし邁陰に拒ぎ戰ひしが、遂に乘輿い敗績れ、侍中の稽紹と云ふ者身を以て帝を衛りて殺され、血帝の衣に濺ぎたり、頴の帝を迎へて鄴に入るとき、左右の者い帝の衣を洗いんと請ふ、帝の曰せあるやう、稽侍中の血浣ふ勿れと、頴い帝を奉じて洛陽に還るとき、頴の將たる張方と云ふ者洛陽にありて、帝を長安に遷せり、頴い太弟の頴を廢し、更に豫章王熾を立て太弟とおす、東海王越い兵を發し、西の方長安に入り、帝を奉じ洛陽に還り、越を以て政事を輔けしむ、成都王頴い先洛陽に據り、已にして長安に奔り、又武關より新野(縣の名)に奔り、遂に北して河を濟り、故の將士を收めけるに、頓丘(郡なり)の太守のため之執へらる、時よ范陽王虓い鄴に據れるを以て、頴を虓に送る、未だ幾ならずして殺さる、〇帝い麵を食して毒に中りて崩御にあり玉

ふ、或人の曰へるやう、東海王越の之を鴆殺するありと、帝い昏愚なり、天下大ひに饑ることありけれど、帝の曰せあるやう、何ぞ肉糜を食いざると、また華林園に蛙の鳴けるを聞て、帝の曰せに、彼の鳴く者い官のためにする乎、私のためにする乎と、左右の者い之に戯れて曰へるやう、官地にある者い官のためにし私地にある者い私のためにすと、賈氏の權威を專らにする時に方り、人々將に亂れんとするを知るに至り、索靖と云ふ者あり、洛陽宮門の銅駝を指し歎じて曰へるに、會らず汝が荆棘の中に在る見るに至らん耳と、趙王倫の亂を作せし後い諸王迭ひに相殘滅し、天下大ひに亂れたり、○劉淵と云ふ者あり、左國城に興れり、淵い故南匈奴の後にして、匈奴い漢魏より以來い、中國に臣たり、其先世い自ら漢の甥なるを以て漢の姓を冒かせり、父豹い左部の帥となりて淵を生めり、淵い幼して雋異なり、博く經書歷史を習ひ、嘗て曰へるやう、吾い隨陸(隨何陸抗の二人あり)の武なくして高帝に遇ひ封侯の業を建る能いず、絳灌(絳い周勃なり、絳侯に封ぜらる、灌い灌嬰を云ふ)い文學あくして、文帝に遇ひ、庠序の教を興す能いざるを耻づ、豈に惜からず哉と、是に於て武事をも兼ね學び、姿貌い魁偉に、初め侍子とありて洛陽に入りけるとき、豹死せり、武帝い淵を以て豹に代て五部の帥となせり、已にして北部の都尉となる、五部左右及び、前後中を五部と云ふ)の豪傑い多く之に歸せり、帝の世に及んで、用ゐて五部の大都督となせり、威都王顗い上表して左賢王となす、嘗て兵に將として鄴にわらしむ、淵の子聰も、亦驍勇こと人に絶れ、博く經書歷史に渉り、善く文を屬し、弓の三百斤(二人力なり)あるを彎けり、淵の從祖なる宣の曰へるやう、漢亡ぶるより以來、我單于い徒に虛號あるのみにして、復尺土の領地なし、自餘の王侯い、降りて編戶に同じ、今吾衆い衰たりと雖ども猶二萬あり、奈何ぞ、手を斂め役を受け、奄(忽あり遽あり)として百年を過ん乎と、司馬氏い骨肉(兄弟親族を云ふ)相殘ひ四海い鼎の湯の沸る如く起り立たり、左賢王の英武あること世に超たり、呼韓邪の業を復すべし、此れ其時なりとて、乃ち相與よ謀りて之を推けるに、淵い頴に說き、請ふ蹄り、五部の兵を帥み來り助けんと、已に左國城に至るとき、宣等い推して大單手となせり、二旬の間に衆を得る五万にして、離石に都す、胡晉の之に歸する者愈〳〵衆し、乃ち國號を建て漢と曰ひ、漢王と稱せり、淵の族子に曜と云ふ者あり、生れて眉毛白く、目に赤き光あり、幼にして聰慧く、膂力氣量あり、亦好みて書を讀み文を屬し、能く射て鋌を洞すること七寸なり、是に至りて淵の將となる、○巴西(郡なり)の民(西南夷の名あり)に李特と云ふ者あり、初め流涙の民にて蜀に入り、旬月にして衆二萬を得て、廣漢(郡あり)に據り、進みて成都を攻めし刺史たる羅尙と云ふ者に敗られ、其首を斬る、弟に流と云ふ者あり、代りて其衆を領し、ひ復盛なり、流死す、弟雄之に代り、攻めて羅尙を走らせ、成都に入る、是に至り自ら成都王

と稱す、○鮮卑の慕容廆と云ふ者武帝の時より、已に冦をなせしかと、已にして降參しけれバ、以て鮮卑の都督となせり、廆ハ熄を生み、遼東より徙りて徒河に居り、又大棘城に徙る、帝の世ゝ及び、慕容部愈〳〵勢ひ盛なり、○鮮卑の索頭(部名、其俗索を以て頭髮を辮めり、故に此の號あり)拓跋氏、是より先、質子の晉にあるあり、武帝ハ遣歸せり、既にして拓跋力微又其子を遣ハし入貢せしむ、力微死す、其子悉祿官代り立つ、帝の世に及び、索頭ハ國を分ちて三部となし一ハ、上谷の北に居り、祿官自ら之を統べ、一ハ定襄の成樂故城に居り、猗㐌の弟猗盧なる者をして之を統しめ、晉人の之に附く者稍衆し、猗盧ハ漠を渡りて北巡し、又西して諸國を略しければ、諸國の之に降附する者三十餘國に及び、拓跋氏の盛んなる、此に始まれりと云ふ、夷狄の華(中國なり)を亂るの禍いハ、皆漢魏晉の間に萌蘖て、帝の世ゝ至り中國大ひに亂るゝに乘じ、始めて四方に兵を起せり、○帝ハ位に在す十七年にして、改元する者五、元康、永康、太安、永興、光熙と云ふ、太弟立つ、是を孝懷皇帝となす、

(孝懷皇帝)名ハ熾と云ふ、惠帝の十五年に當り、武帝の子二十五人ありしかど、兄弟互ひに屠るの餘、在する者僅かに三人のみ、熾ハ乃ハち其一なり、素より學を好むを以て、故に立てゝ太弟となす、是に至りて位に即く、○成都王雄ハ帝と稱し、國を成と號せり、○漢主の劉淵も亦帝と稱し、徙りて平陽に都し、其子聰及び石勒等を遣ハし、晉の內地郡縣を攻め、以て洛陽に至れり、石勒ハ武卿の羯(虜の別號なり)人なり、是より先嘗て洛陽に至り、上東門ゝ倚り長く嘯きければ、王衍ハ其異志あるを識れり、後寇せしかと、已にして漢に從がへり、○漢主淵卒す、子和立つ、聰之を弑して代り立てり、○太傅たる東海王越ハ兵を遣ハし入りて、宿直護衛しめ、仍りて使者を遣ハし羽檄を以て天下の兵を徵し、入りて援ハしむ、越ハ自ら兵を帥ゐて石勒を討ちて軍に卒す、勒の兵ハ越の軍を敗り大尉たる王衍等を捕ふ、王衍ハ自から言へるやう、少きより仁官の情なし、世事に豫らずと、勒の曰へるに、吾天下を行る多し然れども未だ嘗て此輩の人を見ず、尙生存置くべき乎、或人の曰へる、彼ハ皆晉の王公なり、終に吾用とならず、勒の曰へる、然りと雖ども、要らず加ふるに鋒刃を以てすべからずとて、遂に夜人をして牆壁を推し倒して之を壓殺さしめたり、○漢主聰ハ呼延晏と云ふ者を遣ハし、兵に將として攻めしかバ劉曜、王彌、石勒皆會し、遂に洛陽を陷いれ、帝を執へ平陽に送り、尋ぎて殺さしむ、○帝ハ位に在ます六年、改元する者一、永嘉と云ふ、秦王ハ長安に立て

(孝愍皇帝)名ハ業と云ふ、吳王晏の子にして、武帝の孫なり、秦王に封ぜらる、洛陽已に陷いりければ、荀藩等ハ王を奉じて許昌に赴けり、時ゝ帝年十二、已にして索綝迎へて雍州に入る、刺史たる賈疋(疋古雅字なり)等、奉じて皇太子となし、行臺を建つ、盜あり疋を殺せり、

麴允と云ふ者雍州を領すときに、懐帝の凶問至る、秦王ハ位に長安に即けり、○石勒ハ石虎を遣ハし、鄴を攻めしめ、陷いれて之に據れり、○漢屢々長安ゝ寇す、麴允、索綝ハ屢々之を擊ち敗りしかど、未だ幾ならざるに、漢の兵ハ連に諸郡を陷いれ、長安に逼りて外城（大城なり）を陷いれしかば、麴允、索綝ハ退ぞきて小城（内城なり）を守りけるに、内外の兵路斷絶え城中饑ること甚だしきより、帝ハ出で、降りければ、漢の將劉曜ハ平陽に送りたり、聰ハ群臣を享し、帝に命じ青衣（僮堅の服なり）を著け、酒を行し爵を洗ハしめ、又車蓋を執らしむ、後遂に害さる、帝ハ位に在す四年、改元する者一、建興と云ふ、西晉ハ武帝より、是に至り、凡ぞ四世、五十二年なり、瑯琊王建業立つ、是を中宗元皇帝となす、

通俗十八史略卷三終

通俗十八史略卷四

東晉

（中宗元皇帝）名は睿と云ふ、瑯琊王伷の孫なり、宣帝懿は伷を生み、伷は覲と云ふ者を生めり、或人の曰へるやう、睿の母は實は瑯琊郡の小吏たる牛金と云ふ者と姦通して睿を生しと云ふ、睿は覲に嗣ぎて王となれり、惠帝懐帝の二帝には再從兄弟なり、懐帝の時に睿は安東將軍となりて揚州の諸軍事を都督し建業を鎭せり、睿は王導を以て謀主となし、毎に何事も咨詢せり睿は元より名論なかりしかば、呉人も初めは之に附き從はざりしが、王導と云ふ者勸めて名望の勝れたる顧榮、賀循、紀瞳等の諸人を用ゐて椽屬となし新參古參の者を撫綏むるに至たりて江東の人初めて心を歸せり、其後又庾亮卞壼等百餘人を得て之を百六人の椽と云ふ、桓彝と云ふ者亂を避けて江を過るとき睿の勢ひ微して弱きを見て之を憂ひしが既にして王導に見ゆに及よび退ぞきて周顗に謂て曰へるやう、江左にも管夷吾と云へる、齊の大夫にして桓公を相け諸侯に霸たらしめし、如き王導あれば吾はたま憂ふることなしとまた諸名士新亭に游宴しけるとき周顗と云ふ者中坐にして嘆きて曰へるやう、風景は殊らざるも目を擧て見れば江諸と河濱との異ありとて中國にある洛都は敵に取られしを追懐て互ひに相視て涕を流しければ、王導の曰へる、當に力を王室に戮せてともに神州中國を云

ふを恢復すべし、何ぞ楚州に囚おりて相對して、泣に至らんやと、愍帝は譽を以て左丞相となせり、洛陽の祖逖と云ふ者少くして大志あり、嘗て劉琨と友としよし、或とき琨と同しく寢ねしが、中夜に至りて鷄の鳴く聲を聞て琨を蹴て起ちて曰へるやう、中夜に鷄の鳴くは惡聲にて兵亂の兆なりしが、今吾は兵亂ありて功名を顯はさんと思ひしかば、惡聲には非ざるおりとて、寢床より起き出でて喜びて舞へりと云ふ、是に至り南に渡りて兵を出ださんとを啟に請ひしかば、啟は素より北伐の志あく祖逖を以て、豫州の刺史となし、兵千人を與へて鎧や仗を與へざれば、祖逖は江を渡り中流にして楫を擊揖ひて曰くるやう、祖逖にして中原を肅め清むる能はざれば復此江を濟らず、もし濟るあらば此江の如く吾志ざしを堅うして千古動ぐかざるべしと、愍帝また啟を以て丞相都督中外諸軍事となせしとき長安陷いれり、啟もまた師を出し轉次して檄を移し北伐せしむ、然れども實は啟は行ざりければ群臣遂に勸めて晉王の位に即かしめ、明年に至りて初めて皇帝の位に即きたり、○大尉たる劉琨と云ふ者卒せり初め劉琨は祖逖と共に名望を得しものありしかば、劉琨は或とき人に謂て曰へるやう、常に祖逖の吾より先に北征の鞭を著すを恐ると、愍帝、愍帝のとき並州の副使と云ふ官にあれり、劉琨の師を出だすや、長史李弘は叛きて石勒に降參せり、幽州の刺史たる段匹磾と云ふ者時に薊城にあり、人を遣りて劉琨を邀へたりしかば、劉琨は衆を帥み薊城に

奔り匹磾と血を歃りて同盟し晉室を翼戴けり、然かるに薊城を襲ひ取んとを謀りし段末拉と云ふ者あり、書を遣はして劉琨と內應をあさんと請しが、其書を邏騎に獲られたり、而かれども劉琨實は知らざりしかば竟に匹磾の爲めに縊り殺されたり、○漢主の劉聰と云ふ者卒せり、其子粲代りて立しが其臣靳準と云ふ者の爲に弑さる、劉準はまた之に代らんとせしに石勒の爲に討たる、劉曜は自立して石勒を封じて趙公となせり、劉曜は石勒の自ら趙王と稱するかと疑ひしかば、劉曜もまた改めて趙と號ひ、石勒を號けて後趙となせり○略陽臨渭の氐酋たる蒲洪と云ふ者驍勇して權略あり、群氐は之に畏服へり劉聰は曾て蒲洪を拜して將軍となせしかど受ず、懷帝の世にあり、自ら略陽公と稱し是に至りて趙主劉曜に降參せり、○晉の豫州の刺史たる狙邀卒せり、初め狙邀は譙城を取り竟に進みて雍丘縣に屯せしに後趙の鎭戍の兵にして祖逖に歸服する者甚はだ衆し、祖逖は將士と甘苦を同じくし、農事を勸め、蠶桑を課め、新たに附したる者を撫納ひたり、ときに帝は戴淵と云ふ者を以て將軍となし、來りて諸軍事を都督せしめしかは、祖逖の意へるやう、己れ荊棘たる地を剪り平げ河南の地を收復したるの功あるに、も關係ずして戴淵は雍客にて一旦來りて之を統るを以て祖逖は意に甚だ快々からず、又王敦は朝廷と搆隙をおして將に內難の起るあらんとするを聞て大功の遂くる能はざるを知り感激て病を發し卒せり、豫州の士女之を聞て悲しみ

慟みて恰も父母を喪へる如しと云ふ、○鮮卑の慕容と云ふ者是れより先嘗て使者を晉に遣り帝の命せを受けて平州の刺史となり、是に至りて平州の牧たる遼東公となれり、○初め拓跋錄官と云ふ者死せり、其姪猗盧と云ふ者、三部を總攝したるより劉琨は之と結びて兄弟となり、懷帝の時上表げて大單于の爵となし、代公に封ぜらる、部落を帥ゐて雲中より雁門郡に入りしかば、劉琨は之に與ふるに徑北の地を以てす、是に由りて益〻其勢ひ盛に至り嘗て劉琨の援をおして大ひに劉曜の兵を晉陽に敗りたり、猗盧また成樂に城き北部となし、平城を南部となせり、愍帝は猗盧の爵を進めて王となし、官屬を置きて代郡常山郡を食せしむ、猗盧は少子の比延を愛して嗣とおさんと欲して、其長子の六脩と云ふ者を出して其弟を拜せしめしに從はずして去ければ大ひに怒て之を討ち兵敗れて弒されたり、猗㐌の子普根と云ふ者討ちて六脩を滅して自立せしが、尋きに至りて猗㐌の譖律を殺して其子賀傉を立てり、譖律の子たる什翼犍と云ふ者襁褓ありしかば、其母之を袴の下に匿して殺されざるを得たり、○晉の荊州の刺史王敦反きたり、帝の始めて江東を鎭するや、王敦は從弟の王導と心を同くし翼て之を推戴き、心を推して之に任ぜり、王敦は征伐を總べ、王導は機密の政事を專らにし、群從子弟の者は皆顯要に布列たりしかば、時の人語りて曰へるやう、王敦王導と天子司馬氏と天下を與にせりと、王敦は先に楊州の刺史を領し征討諸軍を都督し、進みて鎭東大將軍となり、江、揚、荊、湘、交、廣の六州の諸軍事を都督し、江州刺史たり、尋きて荊州を領せり、燾は功を恃のみ驕りて恣まゝありしかば、帝は之を畏惡ひて、乃ち劉隗刁協を引きて腹心となして稍王氏の權勢を抑挽しかば王導も亦漸く疎外にせらるゝに至れり、王燾の參軍たる錢鳳と云ふ者は凶狡にして、王敦の異志の心あるを知りて陰かに爲に其策を畫せり是に至り、王敦は遂に兵を武昌に擧け劉隗刁協を誅すを以て名とおし、劉隗刁協は帝に盡く王氏を誅すを勸しかど帝は許し玉はず、王導は宗族の者を率ゐて每旦御史堂に詣りて、罪の決るを待てり、ある時周顗は將に朝廷に入らんとしければ、王導は周顗を呼びて曰へるやう伯仁(周顗の字なり)百口の事(家族を養ひ吾家を全たうすることを嘱むを云ふ)を以て卿を累はさんと欲すと周顗は顧りみずして朝廷に入り帝に見へて、王導の忠誠あることを言ひ申救する甚だ其意を盡せしかば、帝其言を納れ用ゐ玉ふ、周顗醉て出でしとき、王導又呼べり、周顗はまた之と與に言ひて左右を顧て曰へるやう、今年は諸の賊奴を殺し、金印(爵の印しあり)の斗升の如き大ひなるものを取りて肘後に繫て、其爵の高を顯さんと既に出て、又上表て王導の罪おきを明かせしかば、王導は之を知らずして恨めり、帝は王導を召て見玉ひしとき王導は稽首て曰へるやう、亂臣賊子、何れの代にも無きことあきも、意はざりき、今者近く臣の一族より出でんとはと、

帝は之を聞て跣しにて急ぎ遽其手を執りて曰ふせあるやう、茂弘一王導の字あり）よ方に卿に寄するに百里の命を以て、用ちゐて前鋒大都督とおせり、王敦石頭に至り、之に據りて曰へるやう、吾れ復君に事へて盛徳の政事となすを得ずと、劉隗刁協等道を分ちて出で戰ひしが大ひに敗れて還れり、帝は百官をして石頭城に詣らしめ、王敦を見せしめしに、王敦は已に周顗を殺せしかば、王導は之を救はず、後中書省の故事を料撿て周顗の、王導を救ひし上表あるを見るに至り、之を執りて涕を流し曰へるやう、吾伯仁を殺さゞれども、伯仁は吾に由りて死せり、幽冥間にて此の良き友を救はずして死に致したるは甚だ友誼に負けりと、王敦は朝廷に出てずして去り武昌に還れり、帝は竟に王敦の叛しを憂ひ瞋ふり爲に疾をおして崩御におはり玉へり、位にある六年、改元する者三つ、建武、大興、永昌と曰ふ、太子立ちて帝となり玉ふ、是を肅宗明皇帝とおす（肅宗明皇帝）名は紹と云ふ、幼にして聰慧ものおはり、嘗て使者の長安より來るありしとき、元帝は紹に問ふて曰せあるやう、長安の地と日輪と何れが近きやと、紹の曰へる長安の地近きおり、但人の長安の地より來るは聞しが未だ人の日邊の傍より來るを聞かずと元帝は其對へを奇異とし、一日群臣と話り玉ふときに及びしかば、復以て紹に問ひおりけるに紹の曰へるやう、日輪近きなりと、元帝は之を聞て愕然して曰ふせある、何ぞ聞者の言に異なるや、紹曰く頭を擧れは日輪を見るべし、然かれども長安は見へずとおりければ、元帝は益々其對へを奇とし玉ふ、長ずるに及びて仁しみおり孝なり、後文辭を好み、武藝を善くし、賢人を好み士を禮遇し、過失を規して諫むるときは之を受け玉ふ庾亮溫嶠等と布衣交をおせり、王敦石頭におり其勇くして略おるより、經はり告ぐるに不孝の罪を以てして之を廢せんと欲せしかど溫嶠等の衆論に賴りて、其謀を沮み、是に至りて位に即けり、王敦い位を簒ふを謀りて移つり姑熟に屯ろす自ら楊州の牧を領せり、〇王導を以て司徒となし、大都督を加へ、諸軍を督して、王敦を討しむ、王敦復反き兵を發して病めり、郭璞と云ふ者をして、之を筮なはしむ、郭璞の曰へるやう、明公にして事を起さゞれい之を聞て大ひに怒かりて曰へるやう、卿の言ちい幾何おり、郭璞の曰へるに吾命い今日の日中に盡きんと、王敦遂に之を斬りたり、帝い自ら出でゝ王敦の軍を覘がひしとき、王敦い晝寢しおりしに夢に日おりて其營を環ると、驚ろき悟りて曰へるやう、黃色の鬚ある鮮卑の兒來るやと、蓋し帝の母い鮮卑にて生れ玉まひしもの故に明帝を指して云へるおり、速かに人を遣りて之を追しむ及よばず帝い諸軍を帥ゐて出てゝ南皇堂に屯し夜る壯士を募水を渡りて、王敦の兄王含の軍を掩まきて、大ひに之を破れり、王敦い兄軍破るゝと聞て曰へるやう、我兄い老たる婢の如く何の用をかあさん、門戸い衰ろへ、世間の事い去りて已に望おし

と因りて、病あり疲勞たる身も作勢をおして起ち自ら行んと欲せしが、又困定て臥すに至りて遂に卒せり、是に於て王敦の黨い悉く平ぎしより王敦の屍を發きて之を斬る、有司より奏上て王氏の兄弟を罪せんと詔して曰せあるやう、司徒たる王導い君の爲に大義を致し以て親族をも滅亡せり、將に十世、其罪を宥さんとすてふ、悉く其罪を問ふ所なしと云ふ、

○陶侃と云ふ者を以て荊、湘等洲の諸軍事を都督せしめたり、陶侃い少くして父を失ひ且つ家貧し、老廉の士范逵と云ふ者嘗て侃の家に過し時、侃の母湛氏い髮を截之を賣りて酒肴を賸ひ之を侑めたり、是に於いて范逵い陶侃を薦め擧しかば、遂に其名を知らるゝに至れり、初め荊州の都督たる劉弘に用ゐられ義陽の叛賊張昌を討ち、又江東の叛將陳敢と云ふ者を破り又擊ちて湘州の劇賊の杜弢と云ふ者を破りて、江夏の大守より荊州の刺史とありしかば、王敦い之を疾みて、廣州の刺史に左遷したり、陶侃廣州にありて、朝に百壁を齊の外に運び出だし日暮にまた百壁を齊の内に運び入しかば、或ひと其故を問ひしに侃い對へて曰へるやう、吾方に力を中原に致さん、故に勞力を習ふのみと是に至り復荊州を鎭せしに士女皆相慶こびたり、陶侃い性つき聰敏にして恭勤あり、嘗て曰へるよう、大禹の聖人い乃ち日の陰の一寸あるとも移り行を惜みたり、衆人い、當に一分の日陰をも惜むべきあるとて、諸參佐の酒器より樗蒲の具を取りて悉く江に投じて曰へるやう、樗蒲ある者い猪を牧奴の戲れのみ、嘗て船を造りしとき、竹の頭や木屑に至るまで之を籍にしるして之を掌らしむ、後正月元日の朝會に雪霽地濕ひしかば、木屑を以て地に布き其途の便を得せしめたり、後蜀を征つの師を出すに及陶侃の蓄へおきし竹の頭を得て釘を作りて船を裝へたり、其萬事に理を盡して能く綜さむることの緻密ある大率之に類せりと云ふ、○帝い崩御にあり玉ふ、（顯宗成皇帝）名い衍と云ふ、母い庾氏、五歳にして位に即けり、司徒たる王導と帝の舅たる中書令庾亮と政事を輔、太后も朝廷に臨みて政事に與かり玉ふ○歷陽郡の內史たる蘇峻と云ふ者叛きたり、蘇峻い前に臨淮に守たり、王敦の再び禁闕を犯すとき、入り來り衛し が大ひに功ありしより、威光人望ともに漸う著るゝに至れり、歷陽に在るに及びて卒い銳し武器い精なひしかば、志、さし朝廷を輕し亡命を招き納れたり、庾亮い石頭城を修治へて之に備へ、建白げ請ひ願ひて蘇峻を徵じて大司農とおす、蘇峻い兵を擧て姑孰を陷いる、尙書令たる卞壼と云ふ者軍勢を督たて、蘇峻と力戰して死せり、二子も亦之に隨ひ敵に赴むきて死せしかば、母は其屍を撫、曰へるやう、父は忠臣とおりて、死し子は孝子とおりて死せり、何の恨みかこれあらん、庾亮出奔せしより、蘇峻りて蘇峻を討ちて之を斬りたり、○後趙主石勒は大ひに趙の兵を破り趙主劉曜を獲こにせ

り、初め劉曜と石勒と連に攻戰せしかば、互に勝負あり、劉曜は後趙の金墉城を攻め、石勒は自ら將として之を救ひ、大ひに洛陽に戰ふて、趙の兵大ひに潰れり、劉曜は醉ふて馬より墮ち石勒に獲られ歸へり殺され、前趙亡ひたり、○晉の驃騎將軍たる溫嶠卒せり、溫嶠は初め劉琨の爲に遣られて江東に使者するとき、其母行を欲せざれば、溫嶠は裾を絕て去り既に至りしに復北に歸へるを得ざるより、終身之を以て恨みとせり、溫嶠は心を晉室に盡し、王敦蘇峻の平ぐも皆溫嶠の力ならなり、○後趙の石勒は天王と稱せしが、尋ぎて又帝と稱す、嘗て大ひに群臣を饗應しとき問ふて曰へるやう、朕は古への何の主に方ぶ可きや或ひと答へて曰へる漢の高祖皇帝より過ぎたりと石勒は之を聞て笑つて曰く人として豈に自ら我量を知らざるものあらん卿の言は太だ過ぎたり、若し皇帝に遇はゝ北面として之に事へ韓信彭越と肩を比ぶべし、若し光武皇帝に遇はゝ當に中原の地に並ひ驅せて共に天下を爭そふべし、未だ鹿(天下に喩ふ)の誰の手に死するを知らず、大丈夫の事を行ふ當に磊々落々したるとは日や月の皎然ある如くあるべし、終に曹孟德司馬仲達の人の孤兒や寡婦を欺むき狐媚ふて以て天下を取るに效はざるなりと、石勒は自ら學はずと雖へども好みて人に書物を讀しめて之を聽時としては其意を以て得矢を論ぜりと、聞く者悅服するに至れり、嘗て漢書を讀むを聞へて酈食其と云ふ者漢の高祖に勸め六國の後を立るの一段に至り驚ろきて曰へるやう、此法當に失すべきに、何を以て遂に天下を得たりと、張良の諫を聞くに及よび、乃ち曰はく、賴いに此の諫めあるのみと、後使者を遣りて好みを晉に修め、晉其幣を禁けり、石勒卒して子弘代りて立つ、○晉の大尉たる陶侃と云ふ者卒せり、陶侃へ荊、江の八州を都督せしより威光名望は赫然に至れり、或ひとの謂へる侃へ嘗て夢に八の翼を生じ天門に上る、其八重に至りしとき、左の翼を折きて下ると、力よく拔扈せしが、毎に翼を折きたる夢を思ひて自ら之を制へ、軍にある四十一年、萬事に明らかに毅くして善く決斷せり、人々欺むく能へず、南陵より、白帝の地に至るまで數千里の間路に遺たる物ありとも之を拾ひ取るものなしと云ふ、○後趙の石虎と云ふ者其主弘を殺して自立し趙天王とあり、石勒の種族の者を殺して遺すあし、○成國號を改めて漢と云ふ、李雄へ兄の子たる班と云ふ者を以て太子とあせり、雄卒して班代つて立ちしが、雄の子越と云ふ者班を殺して其弟の期を立てり、期へ雄の弟漢王壽の威光名望を聞へて出で外かに屯ろせしむ、壽還へり襲ひ期を殺して遂に自立せりと云ふ、○代王の什翼犍と云ふ者立てり是より先代王の賀傉卒す、弟の紇那と云ふ者嗣で出奔せしかば、鄴律の子翳槐と云ふ者立ちしが、紇那復還へりしより翳槐へ趙に奔り趙へ翳槐を代に納れしかど、翳槐卒するに臨み、諸大人に命じて弟の什翼犍を立てしむ猗盧の死せしより國に內難多かりしかば、部落の者へ離散にありたり、什翼犍へ雄

勇にして智略あり、能く先祖の大業を修め、始めて百官を制らへ、號令明白にして政事ゝ、清簡としたりければ、百姓ゝ之によりて安心するを得たり、是に於て東の方朝鮮の滅貊より西の方破落那に及よび、南ゝ陰山に距り北ゝ沙漠地方に至るまて大率皆歸服へり、衆數十万人ありて、拓跋氏ゝ是より勢ひ愈々大ひに至れりと云ふ、〇晉の丞相たる王導卒せり、初め帝ゝ位に即きて、幼冲くありしかば、王導を見るごとに必らず拜し玉ふ、既に冠しても尚然かり、政事を王導に委ねければ、王導ゝ門地を以て王述を椽とせしかど、述ゝ未だ名を知られざれゝ、人之を痴と云へり、既に見るとき、江東の米の價を問ひしかば、王述ゝ目を張て答へず、王導の曰へるやう、王椽ゝ痴者と云ふべきにあらず、王導の言ばを發するごとに一坐の者皆賛歎ざるものなし、王述色を正して曰へるに人ゝ尭舜（天子の名あり）にあらざれば、何ぞ事ごとに善を盡すを得んと、王導ゝ容ちを改ためて之を謝せり、王導ゝ性つき寛として手厚きものあり、委任する所の諸將多く法を奉ぜず、大臣は之を憂いるより、庾亮ゝ兵を起して王導を廢せんと謀る、或ひは王導に密に兵を備ふるを勧めければ、王導の曰へるよう、吾ゝ元規と（亮の字あり）國の爲に休ひも亦戚ひも同しふするものなり、元規にして若し來らば吾ゝ便ゝち角巾（隱者の頭巾なり）して第に歸らん、復何ぞ懼ゝことあらんやと、庾亮ゝ外鎭に居ると雖へども、遙に朝廷の政權を執れり、上流の地たる武昌に據りて、强兵を擁す、

故に勢ひの强き方に赴むく者ゝ多く之に歸附るに至りしかば、王導ゝ内に不平を抱けり、嘗て西風ありて塵起るに遇ひ扇ぎを擧て自ら顔を蔽ひ、徐に曰へるやう、元規の塵ゝ實に人を汚せりと、簿素寡欲、して善く事に因りて功績を成せり、日用の益あしと雖へども歳の計算に至りて餘りあり、元明世の三皇帝の世に輔相とありて、倉に儲へゝの粟なく衣服も、亦帛を重ざりしと云ふ、〇晉の司空たる庾亮と云ふ者卒せり、初め蘇峻の亂ゝ實に庾亮にして之を激らせしと云ふべきなり、蘇峻の平らきしとき、庾亮ゝ泥首て罪を謝し、外鎭に至り自ら其効を致して罪を贖ゝんことを求む、後江荆等の州の諸軍事を、都督し、殷浩と云ふ者を召て參軍となせり、殷浩と褚裒どゝ皆見識度量ゝ清潔として遠大なり、善く老子、周易の事を談せしより、名を江東に擅まゝにして、殷浩は尤も風流に宗ばる、庾亮は中原を開復んと欲し、疏を上つり大衆を率ゐて移り石城に鎭し、諸軍を遣はし、江汚に羅布して趙を伐の規ごとくあさんと請ふ、蔡謨の曰へるやう、大江を以て蘇峻を禦ぐ能はず、安に能く汚水を以て石虎を禦せがんと、乃ち庾亮に詔して鎭を移すを聽さず、是に至りて武昌に卒せり、〇晉幕容皝を封じて燕王とあす、皝の父遼東公とありしより皝を立てゝ世子とあせり、皝は雄毅して權畧多し、經術を喜む廣卒して皝立てり、其臣下より王と稱するを勧めしかば、皝はこれを晉に請はしむ、晉遂に之を封ぜり、〇帝は位に在ず十八年、頗る事を勤め且儉やかな

る德あり改元する者二咸和咸康と云ふ、二子丕奕は皆襁褓ありしかば、帝の母弟たる瑯琊王立てゝ帝となる、是を康皇帝と曰ふ、

（康皇帝）名は嶽と云ふ、成帝崩御に臨てみ、嶽を以て嗣とおし、遂に位に即き玉ふ、○都督荊江等諸州軍事たる庾翼は人となり、慷慨にして功名を得るを喜のみ、浮華を飾るを尙ばず、殷浩の才智名聲ある世に冠たり、庾翼は之を重せずして曰へるやう、此輩は宜しく之を高閣に束ね置き、天下の太平なるを俟て徐かに、其任を議すべきのみ、何ぞ今世に用ゐる所あし、時の人殷浩を以て管仲、諸葛亮に擬せり、其出でゝ朝廷に事へ、或ひは家に處るを以て江東の興亡を卜ひて曰へるやう、淵源（殷浩の字あり）出でざれば、蒼生にして如何ぞ安するを得べき、庾翼は殷浩を請ふて司馬とおせしに應ぜず、庾翼は殷浩を以て王夷甫の如く清談を善くするのみにして何の世に用おきものありとて、之を嘲ける、瑯琊の內史たる桓溫と云ふ者豪氣にして風槩ありしかば、庾翼は嘗て之を薦めて曰へるやう、英雄たる才智あるものは宜しく委ぬるに、昔し方叔召伯の如き周の宣王を補けて中興の功を奏たる如きの任を以てすべしと、是に至り、庾翼い胡を滅ぼし蜀を取るを以て、己れの任となし、衆を悉く北伐せんと欲し移りて襄陽に鎭せり、已にして翼に詔して征討諸軍を都督せしむ、庾翼い溫を以て前鋒の督とおせり、○漢主の李雄と云ふ者卒せり、子勢代り立つ、○帝い位に在す三年にして崩御におり玉まふ、改元する者一建元と曰ふ、太子立ちて帝とおり玉ふ、是を孝宗穆皇帝と稱ふ

（孝宗穆皇帝）名い聃と云ふ、三歲にして位に即き玉ふ、會稽王の昱と云ふ者政事を輔佐たり、○庾翼卒せり、桓溫を以て荊梁等州の軍事を都督せしむ、翼い初め其子を上表て荊州を領せしめたり、何充の曰へるやう、荊楚い國の西門あり、豈白面書生を以て之に當つべけんや、桓溫と云ふ者い英て策略あり、西の方荊州梁州を治むるの任に當る者い溫の上に出るものあしと、丹陽の尹たる劉惔と云ふ者不臣の志あるを知りて昱に謂げて曰へるやう桓溫い形勝の地に居らしむべきにあらずと、聽ずして遂に溫を以て庾翼に代たり、○漢主の李勢と云ふ者驕りて女色に淫、國の事を恤ひとせず、桓溫い師を帥おて漢を伐ちしとき、表を拜まつりて未だ勅許あきに即ち行き進みて成都に至るや、李勢い已に降參せしかゝ、獲て建康に送り漢遂に亡びたり、○燕王の慕容皝卒せり、子儁代りて立つ、○趙天王の石虎い自ら帝と稱せしかど、尋ぎて卒せり其子世代はり立つ、其兄の遵と云ふ者之を弑し自立し趙卒に亂れたり、晉の征討都督たる褚裒と云ふ者上表げて趙を伐んと請ふ是に於て朝野も皆以つて中原に指期て恢復すべしと云ふ、蔡謨い獨り以爲やう德を度力の强弱を量るに如くなし、分表の事を經營い恐らくい其憂ひ朝廷に及ばんと、褚裒い將を遣りて討しに果して敗

れ死せりと云ふ、○趙の蒲洪と云ふ者使者を遣りて晉に降參せり、蒲洪い趙に事ふること累世なり、是に至り石閔と云ふ者趙主遵に語りて曰へるよう、蒲洪は人傑ものなり、今關中を鎭せば、恐くは秦雍等の州は國家の者に非ずと、遂に趙主遵は蒲洪の都督を罷めしかば、蒲洪は怒りて枋頭に歸へり晉に通じたり、○涼州の張重華と云ふ者自ら涼王と稱せり、初め惠帝の世に張軌と云ふ者涼州の刺史となりて、威光は西土に著はる、懷帝の陷沒になり玉ひしとき、張軌は兵を遣はして愍帝を長安に助けたるより、帝は張軌を以て涼州の牧西平公となせり、張軌卒して子寔代りて立つ、寔も亦妖賊の爲めに殺されしかば、其弟茂立てり、趙主の劉曜は茂を擊ちしに茂は趙に降參して卒せり、寔の子駿立てり茂は終るに臨みて駿に語て曰へるやう、必らず晉に奉ぜよ失なふべからずと、駿は復後趙の石勒に臣たると雖ども之を恥るならん、成帝の時遣を蜀に假り以て晉に通ずるに、駿卒して子重華立ちしかば、晉は使者を遣はして仍西平公に拜せしより、重華自ら王となれり、○後趙の石鑑と云ふ者其主遵を弑して自立す、石閔も又鑑を幽めて之を殺して自立し國號を改めて魏と曰ふ、石虎の三十八孫を殺し盡く石氏を滅ぼせり、閔の姓は冉と云ふ、石氏に養はれ是に至り其姓を復し、後燕のために破られ執へて之を殺せりと云ふ、○蒲洪は自ら三秦(梵國が秦の降將三人を封じたるの地名)の王と稱し、姓を符と改たむ、洪は先に趙の將麻秋と云ふ者を擒にし殺さずして其

言を用ゐざるに、宴々に因りて麻秋の爲に鴆殺せられたるより、子の健は麻秋を斬代りて蒲洪の衆を領し、長安に入りて自ら秦天王と稱し已にして帝と稱せり、○趙の姚襄と云ふ者晉に歸して復叛けり、襄の父弋仲は安南赤亭の羌酋なり、懷帝の末年に戎夏は之を襁負て隨ふ者數万人なり、自ら扶風公と稱し、其後前趙の劉曜に服し又後趙の石勒石虎に事へしかば、石虎は甚だ之を重んじ冠軍大將軍となせり、石虎死して趙亂れ冉閔趙を滅すに至り弋仲卒せしより、襄い其部衆を率ゐて晉に來れり、襄に詔して譙城に屯せしめ、後ちまた歷陽に屯せしむ、揚豫州の都督たる殷浩と云ふ者壽春にありて、姚襄の勢ひの强くして且つ盛んなるを惡み、將士を遣りて之を襲はしむ、卒に襄のために斬られたり、是より先朝廷い中原の大ひに亂るゝを聞て、復兵を進めて之を取んことを謀、殷浩其任を受け連年北伐せしが功績を致す能はずして、是に至り、諸軍を率ゐて再び兵を擧たり、姚襄い甲士を伏せて之を邀へ、浩山桑に至りしかば姚襄い伏兵を縱ちて擊ちしに浩い大ひに敗れて走りたり、○涼州の張重華卒す、子曜靈立ちしが、其臣下い之を廢して張祚を立てり、○晉の桓溫い殷浩の敗るゝより、浩の官を免めて庶人とおさんと請ひたり、朝廷始め殷浩を以て桓溫に抗敵せしめしかゞ、浩廢せられしより、內外の大權い一に桓溫に歸けり、殷浩い之を愁ひ怨むと雖ども辭や顏色に形さず

して、嘗て蒼空に向ひて咄々怪事と云ふ字を書きて我用ゐられざるを不平に思ひおりしかば、久之して郗超と云ふ者桓温に勸めて殷浩を令僕に處しめ書を以て之を浩に告げければ、殷浩は欣然て答書を出す當り其誤あらんことを慮はかり、書狀函を開閉する十數回にして、竟にまた誤まりて空函を達するに至りて、桓温は大ひに怒り遂に浩と交はりを絶り、殷浩は卒に謫所にありて死せりと云ふ、○桓温師を帥ゐて、秦を伐、大ひに秦の兵を藍田に敗、轉〳〵戰ふて灞上に至りしかば、秦主符健は長安の小城を閉て自ら守りしかど、三輔(京兆左馮翊右扶風を云ふ)皆來り降參せり、桓温は居民を撫諭して安堵せしめしより、民爭そひて牛の肉や酒を持ちて出迎へ其兵を勞らふに至り男女は皆路を夾みて之を觀たり、耆老は爲に涕を垂て喜こぶものありて曰へるやう、圖らざりき、今日また官軍を觀るを得んとはと、北海の王猛字は景、畧と云ふ、倜儻して大ひなる志ありて、華陰に隱居し桓温の關に入るを聞て褐を被て、之に謁し虱みを捫りて當世の務を談ず恰かも旁はらに人なきが如く平氣なりしかば、桓温は之を異しみ王猛に問ふて曰へるやう、吾命を奉じて賤賊を除きしが、三泰の豪傑は未だ至るものあらざるは何ぞや、王猛の曰へる公は千里を遠しとせずして深く敵境に入れり、今長安の地は咫尺にして灞水を渡らず、百姓未だ公の心を知らず、之れ豪傑の至らざる所以なりと、桓温は默然て更に應ふるなし、桓温は秦の兵と白鹿原に戰かひ利あらず、秦人遂に野の作物を刈取しより、桓温の軍は食に乏しく王猛と倶に還らんと欲せしが、王猛は之に就かざりしとなん、○秦主健卒して子生代りて立てり、○涼州の張祚は女色に淫て人を虐げしかば遂に弑され、其子玄靚代りて立てり、○姚襄は燕に降參し北の方許昌の地に據りて又洛陽を攻む桓温は諸軍を督して襄を討ち進みて河上に至り寮屬と平乘樓に登り、北の方中原を望み歎きて曰へるやう、神州(中國を云ふ)は夷のために侵入れ恰も陸地の水中に沈淪し如く亂れしむること百年なり、王夷甫より諸人者に至るまで皆其責に任ぜざるを得ずと、伊水に至るとき、姚襄は戰かひ連に敗れて走れり、桓温は金墉に屯し諸陵(西晉の帝陵)に謁し鎭戍を置て還へる、姚襄は將に西の方關中を圖んとせり、秦は兵を遣し拒ぎ擊て姚襄を斬りしかば、襄の弟萇も亦衆を以ゐて秦に降參せりと云ふ、○秦の符堅は其君の生と云ふ者を弑し自立して秦天王となれり、王猛を以て符堅に薦め擧るものあり、一めて見るときにも舊より識びとの如しと、自ら謂るやう、玄德の孔明に於る如し、一歲中に五たび官を遷られ、異才ある者を引き揚げ、廢れたる職を修へ農事より蠶桑を飼ふことを課め、困窮の者を恤みしかば、秦の民は大ひに悅びたり、○燕主の慕容儁卒す、子暐代はりて立てり、○晉の桓温は謝安と云ふ者を以て征西司馬となせり、謝安は少くして重名あり、前後も徵辟しことありしが、皆其任に就ざるより、士太夫相謂りて曰へるやう、安石一謝安の字

あり）にして朝廷に出ざれば蒼生如何して安堵するを得んと、年四十餘にして乃ち朝廷に出たり、○帝は位に在ること十七年にして崩御にあり玉ふ、改元する者二さつ永和、昇平と曰ふ、諡おきより、成帝の子瑯琊王立てり、是を哀皇帝と稱ふ

（哀皇帝）名は丕と云ふ、位に即き二年にして、疾に寢玉ひ、又一年にして崩御にあり玉ふ、改元する者二つ隆和、興寧と曰ふ、弟瑯琊王立てり、是を帝奕と爲す、

（帝奕）名は奕と云ふ、成帝の幼子なり、既に位に即きて、會稽王の昱と云ふ者を以て丞相となせり、○桓溫は哀帝の時より大司馬都督中外諸軍事錄尚書事とあり、揚州の牧を加へられ、鎭府を姑孰に移し、希超を以て參軍とあし、王珣を主簿の官となせしかば、時人相語りて曰へるやう、髦參軍、短主簿と蓋し參軍たる都超は髭の多き故なり、主簿たる王珣は身躰の短小故を以て斯く呼びあせしあらん、能く公をして喜こばしめ、能く公に怒らしむと、○燕人攻て洛陽を陷いれければ、戍の將たる沈勁と云ふ者之に死せり、桓溫は師を帥ゐて燕を伐ち枋頭の地に戰かふて大ひに敗れ還へる、○燕の慕容垂は既に擊ちて晉の軍を破り、威光名望は日に盛ありしかば、燕主は之を忌むに至りて、慕容垂は遂に秦に奔りけり、○秦の王猛は諸軍を督たて、燕を伐ちて遂に鄴を圍めり、秦王符堅は鄴に入りて燕主慕容暐を執へ以て歸れり、○晉の桓溫は陰かに不臣の志を蓄らより、嘗て枕を撫、歎き曰へるやう、男子た

る者芳名を百世に流布こと能はざれば、亦當に臭名を萬年に遺すべきあり、宜しく先づ勳功を立て、遠りて九錫を受けんと欲す、枋頭にて敗れしより、威光も名望も頓に挫けたり、鄴超は桓溫に勸めて、徃古伊尹は太甲を放ち、霍光は昌邑を廢したる故事を行ひて大威權を立てしむ、桓溫遂に入朝し、太后に白あげて帝を廢せしめたり、帝は位に在ること六年、改元する者一つ大和と曰ふ、會稽王立ちて帝とある、是を簡文皇帝と稱ふ、

（簡文皇帝）名は昱と云ふ、元帝の子あり、心は淸虛して寡欲し、尤も玄言（老子莊子の道を云ふ）を善せり、桓溫は迎へて位に即かしめ、九閱月にして不豫なりしかば、急に桓溫を召して朝廷に入りて政事を輔しめ、諸葛武侯、王丞相の帝を輔佐たる故事の如くせんと、桓溫望みしとき、已に帝は終んとしければ、桓溫に位を禪らん、否されば、卽ち攝に天子の政事を行へと、或は望む所に副はざらんも知るべからず、時に謝安、王坦之等朝廷にありしかば、桓溫は玉坦之、謝安の其事を沮得ずると疑がひ、心に甚だ之を銜めりと云ふ、帝は位に在て改元する者一つ咸安と云ふ太子立つ是を烈宗孝武皇帝と稱す、

（烈宗孝武皇帝）名は昌明と云ふ、年十歲にして位に即玉ふ、○桓溫は來朝しければ、謝安王坦之に詔して新帝に迎へしむ、都下は洶々として動搖たり、一云へる言に謝安王坦之の二人を誅して晉の皇祚を奪はんと、坦之は之を聞て甚だ懼れしが、謝安は少し

も神色は擾らずして從容あり、桓溫の既に至るや百官は皆道側に拜禮しければ、桓溫は大ひに衞の兵士を陳ねて朝廷の士を延見せしとき坦之は汗流れて衣を沾し、倒に手板（笏なり）を執て大ひに忽遽しが謝安は從容きで、席に就き桓溫に謂て曰へるやう、謝安の聞し事に諸侯に道あり、其道と云ふは四方の隣國は嚴重ある守りありと、明公にして何ぞ警衞の兵を壁の後に置くを須ゐんや桓溫は笑ふて曰へるやう、正に自から戒心おき能はずと、遂に命して警衞士を撤めしめ、謝安と或は笑ひ或ひは語りて日を移つせり、郗超は帳の中に臥して其言を聽居たりしに風吹き起りて帳を開き、郗超の臥するを見て笑ふて曰へるやう、郗生は大幕の賓と云ふべし、桓溫疾あり、姑孰に還へりて危篤おりしかゞ諷して九錫を得ことを求めたりしが、謝安、王坦之は故らに其事を緩もけれゞ、尋ぎて卒せり、〇秦の丞相たる王猛卒せり、秦主の符堅は王猛の死を哭して曰へるやう、天は吾をして六合を一平に一統を欲せざるか、何ぞ吾丞相たる景略（王猛の字なり）の命を奪ふの速かある、王猛は終するに臨み秦主符堅に謂て曰へるに、晉國は江南の僻處に位すると雖ども、然かるに、正朔の位を相承けて、上より下〳〵に至るまで、善く安和たり、臣沒するの後に至り、願はくは晉を討を以て圖となせり、鮮卑の慕容氏、西羌の姚氏は我仇敵なり、終に又人の患害をなすも測るべからず、宜しく漸〳〵に之を除き以て社稷を安べしと、〇涼は秦に降參せり、是より先張玄靚の

叔父たる天錫と云ふ者玄靚を殺して自立したり、天錫は酒を飲むこと限りあし、且つ女色に荒で政事亂れしかゞ、秦は之を伐ちて、兵の姑臧に至るとき天錫は手を後ろに縛り面を前に出して降參しけれゞ、長安に送くれり〇代王拓跋什翼犍と云ふ者の世子たる寔は早く死して繼嗣の者未だ定まらざれゝ、鷹長子の寔君と云ふ者遂に其諸弟を殺し什翼犍をも併て殺せり、ときしも秦の兵州代を擊つに會けれゞ、部落のものは逃潰より國中大ひに亂れたり、是に於て秦王符堅は代州を分ちて二部とおく、河より東しの方は代南部の大人たる劉庫仁と云ふ者に屬し河より西の方は匈奴の劉衞辰と云ふ者に屬して、其部衆を統治めしめたり、代の世子たる寔の子にして珪と云ふ者尚幼くありしかゞ、母の賀氏は珪を以て走り賀納に依り、已にしてまた劉庫仁に依れり、劉庫仁は珪を奉し、恩しみを加へて勤厚く、國の興廢を以て事ふるの意を易へずと云へり、〇晉は秦人の勢ひ强く盛おるより、之を憂ひとおゝ、詔して良將にして北方を鎭め禦ぐべき者を求めたり、謝安は兄の子たる玄と云ふ者を以て詔に應じて之を出せり、郗超は之を歎きて曰へるやう、謝安の明才ある、乃ち能く衆心に違ひ親戚を擧ぐるに、玄の才きも亦其擧ぐる所に負かざるべし、吾嘗つて其才を使用を見るに履履あいだにも未だ嘗て其任めに稱はざるなり、玄の廣陵を鎭するに方劉牢之等を得て參軍となして、戰ふごとに捷たざるなく、北府の兵と號して敵人皆此を畏れしとなん、

○秦兵を遣はして、道を分ち晉に寇し諸軍を陷いれ、襄陽の刺史たる朱序と云ふ者を執へ以て歸へる、己にして又大兵を擧んを議せり、或は謂ふ、晉に長江の險わりと、堅の曰へるやう、吾衆兵を以ゐるや鞭を江に投入るへも、能く其河流を斷べし、時に中外の者皆諫めたりしが、惟慕容垂、姚萇は其釁に乘んと欲つして之に南伐せんを勸めければ、符堅は遂に長安の戍卒六十餘万人、騎兵二十七万を發せり、晉は謝安を以て征討大都督となし、謝玄を前鋒都督とおむ、衆八萬を督して之を拒げり、劉牢之は精兵九千人を帥ゐて洛澗に赴き、直に水を渡り秦の前鋒なる梁成を擊ちて之を斬る、石等は水陸より繼ぎ進みしかば、符堅は壽陽城に登り晉兵の部陣の嚴整しを望み見、又八甲山の草木を望み見て、皆以て晉兵を思ひ、憮然として懼る、神色あり、ときに秦の兵は、肥水に逼りて陣せり、謝玄は人をして謂はしめて曰へるやう、陣を移し少しく却ぞき、我兵に渡らしめ以て勝負を決するを得せしむる可からんや、符堅は晉兵の半ば渡るを聽て之を擊めんと欲し、兵を麾して之を却ぞけしむ、秦兵退ぞく復止むべからず、朱序は陣の後ろに在りて呼はりて曰へるやう、秦兵敗ると、遂に潰散におれり、謝玄等勝に乘じて追ひ擊ちしかば、秦の兵又大ひに敗れしより走るもの風の聲や鶴の鳴く聲を聞ても亦懼れて晉兵至ると意へり、秦王符堅も大ひに狼狽て長安へ還へりしと云ふ、○慕容垂秦國に叛きて河内に起り自ら燕王と稱せり、○姚萇秦國に叛き北地に起り秦王と稱す、之を後秦と云ふ、○慕容仲も亦秦國に叛きて兵を平陽に起し帝と稱へり、之を西燕とおす、出でゝ長安を攻しかば、秦王符堅ゐ出奔せり、後秦主萇ゐ之を執へて殺したり、○晉の大保たる謝安卒せり、謝安ゐ所作の文雅あること王導に過ぎ、德量あり、秦の寇至るに方り、朝野ともに震ひ恐れたり、獨り謝安ゐ夷然にて碁を圍て擊(畑や別莊あり)を以て賭となせり、ときに戰ひの捷し書せ至れり、謝安ゐ方に客と碁をおしおりしかば、觀畢りて坐側に置きしのみにして更に喜こべる色あし、已に碁を罷めしとき客之を問へり、謝安ゐ徐かに曰へるやう、小兒輩已に遂に賊を破れりと、客の去るに至りて、謝安ゐ戶に入りて喜ぶ甚だ已屐齒の折へをも覺り知らざる、其情を矯め物事を鎭める大率如ㇾ此と云ふ、○秦主符堅の子丕と云ふ者晉陽にありて帝と稱せり、○拓跋珪復立ちて代王とおる、是より先劉庫仁已に其臣下のために殺さる、其弟頭眷と云ふ者代りて其衆を領せり、庫仁の子顯また頭眷を殺して自立し遂に珪を殺さんと欲しけれゐ、珪ゐ賀蘭部に奔りて其勢に依れり、是に至りて諸部落の大人たる者珪を推立てゝ主となし、遂に王の位に即かしめ、徙りて牛樂に居り、後改めて魏と稱せり、○燕王垂ゐ中山にありて帝と稱せり、○西燕の人其主沖を殺し段通を立て、又段通を殺し、慕容忠を立て又忠を殺し慕容永を立てり、永ゐ秦主の符丕と云ふ者を擊ちしかゐ、丕ゐ敗れて南に走りしが、晉の將軍ゐ之を遮へ擊ちて殺したり、慕容永ゐ長

子にありて帝と稱せり、○秦の疏族ある符登と云ふ者南安にありて帝と稱せり、○後秦の姚襄い是より先已に長安に入りて帝と稱せんとし、符堅は兵を引きて數〻後秦と戰ひ互ひに勝負あり、○後秦主たる姚萇卒せり、子興立ちて、登を擊ちて之を殺せり、○燕主の垂は西燕を擊て長子の地を抜き取り、遂に西燕主永を殺せり、○燕主垂卒す、子寶代りて立たり、○秦主符堅の敗れしより、中原大ひに亂れ、其大なる者は慕容氏と姚氏となり、迭ひに大號と稱し、其時に乘じて起れり、秦の故臣呂光の如きは涼州に據りて涼天王と稱す、鮮卑乞伏國仁は隴右に據り西秦王と稱す、國仁死して弟乾歸之に繼げり、後又鮮卑の禿髪烏孤と云ふ者あり河西に起りて南涼と號す、○晉は秦國を打ち破りしより以後は江左無事にして、會稽王の道子と云ふ者政事をあせり、帝は酒を嗜て晝夜流連たり、長星見はる、之兵革の象しならんと、帝は酒を擧げて之に向ひて曰はく長星汝ぢに一杯の酒を勸む世豈万年の天子あらんやと、○張貴人年三十にして、寵愛あること後宮に冠て並ぶものあきに至れり、帝は醉中之に戲れて曰ふせあるやう、汝ぢも年を以てすれば、亦當に廢すべきなり、貴人は之を聞て婢に帝の面を被はじめて之を弑せりと云ふ、帝は位に在すこと十五年、改元する者二つ寧康、太元と曰ふ、太子立つ是を安皇帝とあす

（安皇帝）名は德宗と云ふ、幼きときは不慧にして、口言能たはず、寒きも暑きも、飢るも飽も更に之を辨別玉はず、飲食するも寢興するも皆己れの口より言ひ出だすことあし、既に位に即きて、會稽王は大傅の官を以て政事を輔けたり、○魏王の拓跋珪と云ふ者進みて中山を圍みしかば、燕王の慕容寶は遂に出奔し、後其臣下のために弑さる、○燕の慕容祥は帝と稱しければ、慕容麟と云ふ者襲ふて祥を殺して自立せり、魏王珪は慕容麟を破りて之を走らす、麟は慕容德に奔りて德のために殺されたり、德は往きて廣固に據りしが、後に帝と稱せり、是を南燕とあす○燕の慕容盛と云ふ者龍城にありて帝と稱せり、是を北燕とあす、○魏王の珪は帝と稱し平城に都せり、○涼の段業と云ふ者涼王と稱し、張掖に據れは、是を北涼となす、○晉の會稽王たる道子は專ら政事を以て世子の元顯に委じかば、是に至りて晉の政ごと亂れて、東土は囂然く、妖賊の孫恩と云ふ者民心の騷動に因りて、海嶋より出で亂を作せしかば、劉裕と云ふ者孫恩を討ち功績あるに因りて起れりと云ふ、○北涼の沮渠蒙遜と云ふ者段業を弑して自立せり、蒙遜は匈奴の種族なり、後に姑臧の地に遷つれり、○涼王の呂公卒す、子紹代りて立ちしが、庶兄の纂は其位を簒ひ之を弑して代れり、呂紹は又纂を弑して其兄の隆を立てては、隆は後に至りて秦に降參じ涼遂に亡びたり、○隴西郡の李高と云ふ者燉煌郡に據る、是を西涼となす、後又酒泉郡に徙りたり、○柔然と云ふ者漠北の地に起り高車の地を奪ふて之に居り、諸郡を呑併て、兵士や軍馬は繁盛にありしかば、北

方にありて、其雄き名を顯はせり、其地は西の方は焉耆(西域の國名なり)に至り東の方は朝鮮に接し、南の方は大漠に臨み、旁らの小國は共に羈つれられて、屬ふに至り、遂に魏國に敵せりと云ふ、○晉の盜賊孫恩は數々劉裕等に擊ち敗られしより、海に赴むきて死せり、其黨たる盧循、徐道覆等復起りたり、○晉の桓玄と云ふ者叛けり、初め桓玄は父の桓温に嗣ぎて南郡公となす、其才智と門地とを負みて、自から英勇豪傑を氣取り、嘗つて義興縣に守たるとき、歎きて曰へるやう、父は九州の伯となり、兒は五湖の長となるとて、官を棄て國に歸へり、後江州の刺史になり、尋ぎて荊江等八州の軍事を都督して江陵に據る、是に至り兵を擧建康に入り元顯を殺し又道子を殺す玄は相國となりて楚王に封ぜられ九賜を加へらる、已にして、帝に迫りて位を禪らしむ劉裕は兵を京口に起し玄を討ち玄の兵と戰ひて大ひに之を破りければ、玄遂に出走せり、因りて首を江陵に斬り、帝は位に復し、劉裕は京口に鎭せり、○秦の赫連勃々と云ふ者秦に叛き朔方郡に據りて自ら大夏天王と稱せり、勃々は故の匈奴の劉衞辰の子なり、○晉南燕を伐てり、是より先南燕主慕容德卒す、兄の子超立ちて、晉の國境を侵し地を畧しかば、劉裕は表を抗げて之を伐ちたり、○北燕は其臣下たる馮跋と云ふ者の爲に滅ぼさる、是より先北燕主盛は其臣下に弑されしかば、其救父の熙と云ふ者代り立つて至て、馮跋は罪を熙に得たり、因りて熙を弑して熙の養子高雲を立つ、未だ幾ほどなく、又高雲を弑して自立したり、○魏主は人の夫を弑して其妻を納れ之と與に子の紹を生めり、其性たる凶狠にして無賴なるより、珪を弑したり、齊王嗣は紹を殺して立ち、珪に諡して道武皇帝と號ふ、其廟を烈祖と名つく、○晉の劉裕は廣固の地を拔き取り、慕容超を執へ建康に送りて之を斬る、是に至りて南燕亡びたり、○盧循は劉裕の北伐に乘し番禺より出で直に建康を襲ひしかば、劉裕召されて急に還り、諸軍力戰せしかば、盧循は乃はち退ぞけり、劉裕は追ふて之を擊ち破るより、盧循は卒に交州に奔りて刺史の者に敗られ刺史は首を斬りて建康に送らる、○西秦の乞伏乾歸と云ふ者其臣下に殺さる、子熾盤代りて立てり、○西秦襲ふて南涼を滅ぼせり、是より先南涼王たる禿髮烏孤卒す、弟利鹿孤立ちて卒せしかば、弟の傉檀代りて立ち、是に至り、乞伏熾盤の爲に襲はる、熾盤は傉檀を以て歸り之を殺して南涼亡びたり、○後秦主姚興卒す、子泓代りて立つ、晉の太尉たる劉裕之を伐彭城を發し洛陽より武關、潼關に道を取りて長安に入るときに、泓敗れて出で降り後秦亡びたりと云ふ、○夏主の勃々は劉裕の秦を伐と聞ゝて曰へるやう、劉裕は必らず關中を攻め取らん、然かれども、久しく留まる能はず、若し子弟諸將を以て之を守らば吾之を取る地芥を拾ふより易きのみ、是に至り三秦の父老は劉裕の將に還らんとするを聞て、門に詣り涕を流して曰へるやう、未だ夷すの爲に摧殘れり民は王の化に霑ほはず、於今百年にて始めて中國の衣冠を着

しものを見ると八々相賀べり、公は之の民を捨へ、何くに之んと欲するやと、劉裕彭城に還へるとき、勃々は長安を陷しいれ帝と稱して統萬の地に歸へれり、○晉は劉裕を以て相國宋公とあし、九錫を加へたり、劉裕は識に昌明（烈宗孝武皇帝）の後二帝にして天下は變遷と云へるを以て、人をして晉帝を絕りて殺さしめたり、帝は位に在る二十三年にして、改元する者二つ隆安、義熙と云ふ、義熙の元年より十四年に至るは則ち劉裕の政事をおせし日なり、弟琅琊王立つ、是を恭 皇帝と稱ふ、

（恭皇帝）名は德文と云ふ、位に即くの明年、劉裕は位を進められて宋王とあり、彭城より鎭を壽陽に移し、又明年劉裕は建康に還へりたり、帝は位にありて改元する者一つ元熙と云ふ、位を劉裕に禪り已にして殺さる、東晉は元 皇帝より是に至り、凡そ十一世にして一百四年なり、西晉と東晉と通算して一百五十六年にして亡びたり、

南北朝

南朝は晉より之を宋に傳へ、宋は之を齊に傳へ、齊は之を梁に傳へ、梁は陳に傳へ、北朝は諸國魏の爲めに併せられしよし、魏も又後に分れて西魏東魏となれり、東魏は北齊に傳へ、西魏は後周に傳へ、後周は北齊を併せて之を隋に傳へたり、隋は陳を滅ほして然る後南北混じて一となる、今南朝を以て提頭となして而して北朝を其間だに附して書きたり、

宋

（宋高祖武皇帝）姓は劉氏、名は裕と云ふ、彭城の人なり、相傳へ云ふ、漢の世楚の國の元王交の後裔なりと、裕生まれて母死せり、父は京口に僑居せしかバ將に之を棄んとせり、裕の從母い之を救ふて乳おへり成長するに及び勇健して大ひなる志あり、儻かに文字を識れり、小字い寄奴と云ふ、嘗て行きしとき大ひなる蛇に遇ひしかバ、擊て之を傷つけたり、後其所に至る、群兒あり其蛇を擣を見て、裕い問ふて曰へるやう、何をなすぞ、群兒の曰へる、吾王い劉寄奴のために傷けらるると、裕のまた曰へるに何ぞ殺ざると群兒の曰へるやう、寄奴い王者なり死さずと、裕い之を聞ゝ叱付けしかバ、即ち散じ去りてまた見へずと云ふ、初め裕い劉牢之の軍事に參謀たりしとき、嘗て遣いし賊を覘いしむ、賊數千人に遇ふ、因りて、裕い長刀を奮ふて、獨之を追ひ驅けしより衆軍い勢ひに乘じ進み擊て大ひに之を破りたり、裕い是によりて名を知らるゝに至れり、其後將相と爲る二十四年にして、桓玄を誅し孫恩盧循を平げ、南燕後秦を滅ぼし、卒に秦の禪りを受けたり、○西涼の李暠卒す、諡して武昭王と曰ふ、子歆代りて立ち數年あり、是に至り北涼の沮渠蒙遜に誘なはれ、與に戰ひて之を殺せり、是に於て西涼亡ひたり、○宋主位に在る三年にして、改元する者一つ、永初と曰ふ、殆して大

子立たり、是を廢帝滎陽王とおす、
(廢帝滎陽王)名は義符と云ふ、年十七にして位に即き、喪に居りて禮なし、游ひ戯むれて度りなしと云ふ、○魏主の嗣殂す、明元皇帝と諡し、廟を太宗と號す、子燾代りて立てり、○宋主は位にある三年にして改元する者二、景平と云ふ、徐羨之、傅亮、謝晦等廢して之を殺せり、宜都王代り立つ、是を大宗文皇帝となす、
(文皇帝)名は義隆と云ふ、素令き名望あり、少帝廢せられしとき、迎へ入れて位に即かしむ、○夏主の勃々殂す、其子昌代りて立てり、○晉の徵士(徵れて朝廷に事へし士と云ふ事なり)たる陶潛と云ふ者卒せり、陶潛は字を淵明と云ふ、潯陽郡の人にして侃の曾孫なり、少くして高趣あり嘗て彭澤縣の令となり八十日にして、郡の督郵(郡守を糾察るを掌どる官なり)至る、吏の曰へるやう、應に束帶にて之に見ゆべしと、陶潛は之を聞歎て曰へるに、我豈に能く五斗米(縣令の月俸は十五石なり日に算すれば五斗にして一歲を積むときは百八十石となる、五斗は今時の五升一合五勺許に當れり)の月俸を受るを以て腰を折り稽首て鄉里の小兒如きものに向はんやとて、即日に印綬を解めて去りたり、後ち歸去來の辭を賦り五柳先生の傳を著はし、復朝廷に徵れしかど遂に就らず、自ら先世は晉國の臣下たるを以て宋高祖帝の王業漸く隆なるより、復任ふるを肯んせず、是に至りて終せり世に靖節先生と

號ふは此の人を云ふなり、○魏國は數々夏國と戰ひしが、是に至りて其主昌を執へ以ゐて歸る○晉の赫連定と云ふ者平涼にありて帝と稱せり、○西秦主乞伏熾盤卒す、子暮木代はり立つ、○北燕の馮跋殂して弟弘代り立つ○夏主定は西秦を擊ち暮木を以ゐて歸へり之を殺し、西秦亡びたり、定又北涼を擊て其地を奪はんと欲す、吐谷渾と云ふ者其軍を襲ひ定を執へ魏に送りて夏國亡びたり、吐谷渾なる者は幕容氏の別種なり、○北涼の沮渠蒙遜卒す、子牧犍立てり、○宋の謝靈運と云ふ者罪を以て誅さる、初じめ靈運は好みて山澤の遊びをなせり、從者數百人をして木を伐り、徑を開きしかば、百姓は皆驚き擾れ、或ひは其異志の意あるを上表ければ、上は靈運を以て臨川の內史となし、有司は之をは、糾て收へらる、靈運は兵を興して逃逸り、詩を作りて曰く

韓亡子房奮　秦帝魯連耻

蓋し此の詩の意は往古韓の滅たるとき、子房(張良の字なり)は舊發して仇を報ひんと欲し狙擊したり、又魯仲連は晉の臣たるを以て秦の昭王の帝となるを耻て東海を蹈で死せりと云ふ、今靈運も又晉の臣なり、故に晉國の爲に宋を滅し晉を恢復せんとの意ろを示せしものなり、上は詔して追討せしめ、之を擒にし廣州に徙し、已にして棄市せらる、○魏燕を伐ち、馮弘は高麗に奔りて殺され、燕亡びたり、○魏涼を伐つ姑滅の兵潰え、牧犍は降參し後に

殺され、北涼も亦亡びたり、○魏は其司徒の崔浩と云ふ者を殺せり、崔浩は明元帝の時より、已に謀主と為り輙ち功あり、道士の寇謙之と云ふ者を信仰し、魏王に勧て崇め奉へしめ、天師の道場を立て、最も佛法を惡み、沙門を誅し、佛の像や佛の敎たる書物を毀り、魏主は崔浩に命じて、國史を修めしむるに、先世の事を書す皆詳かに實あり、石に刋つけて、之を衢路に立てり、北人忿恚みて、崔浩は國の惡事を暴揚と、譖しければ、魏帝は大ひに怒て遂ゐ案して之を誅し、其一族を殺し夷せりと云ふ、○宋と魏と連年互に相侵し伐ちたり、王玄謨と云ふ者宋に大兵を擧て魏を伐んことを勸む、沈慶之は之を諫めて曰へるやう、畊作の事は奴に問べし、又織ことは婢に問ふべきあり、今國を伐んと欲して奈何ぞ白面の書生と之を謀るを得んと、宋竟に玄謨を遣て師を出し碻磝の城を拔き取り進んで滑臺を圍ましむ、是より先魏主は宋の河南の地を取ると聞て怒て曰へるやう、我は生れて未生髭の燥かざるに已に河南の地は是我所有ありと聞けり、今や天時は尙熱きあり、姑らく戍の兵を歛め、北に歸り、寒に至り河の氷の合るを俟て、鐵き騎兵を遣りて之を蹂躪んと、果して冬に至り魏主自ら兵に將として河を渡る衆兵百萬人なりと號ふ、鼙鼓の聲天地に震ひ渡しかば、玄謨は大ひに懼れて走れり、魏人は之を追ひ擊ち玄謨は遂に敗走しければ、魏帝は兵を引きて南下し直ちに瓜步山に至り江を渡らんと聲言しければ建康の民は震ひ懼れ資擔を荷ひて

將に逃出さんとせり、宋主は石頭城に登り北望して歎きて曰へるやう、檀道濟にして若在せしおらば、豈胡馬に能く此に至るを得せしめんや、道濟は功績を前朝に立て、兵を用ゆに老たり、是より先讒言を受けて收へらる、旦の光あること炬火の如く、幘を脫て地に投いだして曰へる、乃ち文帝の我を殺すは恰も國の要害たる万里の長城を毀る如く此れ自ら滅ぶるの根本に至んと、既に誅されたり、魏人は道濟の誅さるゝを聞て喜こんで曰へるやう、吳（建康は故吳の地あり）の子輩の如きは復憚かるに足ずと是に至て長驅しが、能く之を禦ぐものなしと云ふ、宋人にして玄謨を斬らんと欲するものあり、沈慶之は之を止めて曰へる所あらんや、今戰將を殺して自ら弱すは計の善きものに非るなりと、魏の師引き遠りしかに佛狸は魏主の小字なりの、威光は天下に震ひ、控弦の士も又百万あり、豈玄謨の能く當るば、人を殺し財を掠むること勝〳〵計ふべからず、丁壯者は斬り截し、嬰兒は蚌の上に貫ぬき盤〳〵舞して戲れとなし、兵の過る所ろ赤地に至り、春燕歸り來り巢ふ家なかりければ、林の木に巢へりと云ふ、宋主位に即くより二十八年の間小康と號びなせしかど是に至り兵革の後邑里は遂に蕭條、元嘉の政事衰へたりとあん、○魏の中常侍たる宗愛と云ふ者東宮の官屬を譖しければ、多くは坐せられて誅死るゝより太子の晃は竟に憂を以て卒せり、魏主追悼て已ざりしかば、宗愛は之を憚れて魏主をも亦殺し、後論して太武皇帝と曰

ひ、庶を世祖と號ふ、晃の子濬と云ふ者立ちて宗愛を討ちて之を殺せり、○宋の太子劭と云ふ者巫蠱呪詛て宋主を殺さんと謀しが事發露ければ、宋主は之を廢せんと擬しより、劭は宋主を弑して自立せり、宋主は位にある三十年、改元する者一、元嘉と云ふ、武陸王は兵を擧て劭を討して自ら立り、是を世祖孝武皇帝と稱ふ、(孝武皇帝)名は駿と云ふ、位に即き十二年にして殂せり、改元する二、孝建、大明と曰ふ、太子立つ、是を廢帝とおす、(廢帝)名は子業と云ふ、位に即き、喪に居りて傲り惰けて、戚る容おく、孝武皇帝は骨肉を誅し忌ふて誅殺もの多く、是に至りて尤も甚だしと云ふ、○魏帝の濬殂せり、諡して文成皇帝と曰ふ 庶を高宗と號す、初め大武皇帝は兵を四方に出し經營げて、國頗ぶる虛耗に至り、文成帝嗣ぎて國亂を鎭靜より中外の人心を懷け集げ、是に至て人心復安堵せり、子弘代りて立つ、○宋主は諸父の湘東王等を畏れ忌ひて殿內に幽こめ、或は棰うち或は捉曳して復人たる理を守らず、恣まゝに不道をおせしかば、中外の者騷然たちしより、宋人は遂に之を弑したり、位にある二年改元する者一、景和と云ふ、湘東王立つ、是を太宗明皇帝とおす、(明皇帝)名は彧と云ふ位に即き八年にして殂す、改元する者一、泰始と云ふ、帝の初めより、肅道成は兵に將として征伐し功あり、尋ぎで淮陰に鎭し豪傑を收入れ養ひしかば、賓客始めて盛あり已にして、南兗州の刺史となり、是に至り、渚淵は薦めて右衞將軍となし、顧命(遺詔を受けて嗣君を輔佐るを云ふ)の大臣と共に機事を掌どらしむ、太子立つ、是を後廢帝となす、

(後廢帝)名は昱と云ふ、明帝子あし、昱は實は嬖人の李道兒と云ふ者の子あり、明帝取りて之を子とし養はる、諸王十五六人を殺し、惟昱の立ざるを恐る、十歲にして位に即けり、桂陽王の休範と云ふ者兵を擧て反き建康を攻しかば、蕭道成は擊ちて之を斬る、是に至りて道成は中領軍となる、○是より先魏の獻文帝弘位を太子宏に傳へ自ら太上皇帝と稱せり、然かれども宏は尙幼より仍萬機を總べたり、太上皇は聰睿し夙成にして剛毅決斷よく、黃老子浮屠の學を好む、故に常に遺世るの意あり、太上帝に誅されしかば、馮太后は大ひに怒て遂に之を弑して制を稱へりと云ふ、宋主は疑り恣まゝにして、人を殺を好み、中外の者震ひ懼れたり、蕭道成い袁粲、褚淵等と帝を廢立ことを謀りしかど、袁粲は之を不可とし、褚淵い之を贊成して遂に之を殺せり、帝い位に在る六年、改元する者一、元徽と云ふ、安成王立つ、是を順皇帝とおす、(順皇帝)名い準と云ふ、桂陽王休範の子なり、明帝之を子とし鞠ふ、是に至て位に即けり、○宋の袁粲と云ふ者蕭道成を誅さんと謀る、褚淵 其謀を以て道成に告げり、袁粲 父子

は俱に石頭城に殺さる、百好い之を哀みて曰へるやう、憐むへし袁粲父子の石頭城に死するを、寧ろ袁粲とおりて石頭城に死せん、褚淵となりて生きるを願はすと、沈攸之も亦兵を江陵に擧げ道成を討ちしが軍潰れ走りて縊れ死せり、道成い相國齊公とおり九錫を加へらる、已にして爵を進めて王とおれり、宋主位に在る三年、改元する者一、昇明と云ふ、位を齊に禪り泣て彈指して曰へる、願くい後身とも世を復天王の家に生るゝ勿れと、齊之を弑して、其一族を滅したり、宋い高祖より是に至て八世、凡そ五十九年にして亡ひたり、

齊

（齊太祖高皇帝）姓い蕭氏、名い道成と云ふ、蘭陵の人おり、相傳へて言へる、漢の相國何の後裔なりと、沈深ものにして、大ひなる度量あり、博學にして、文章を能せり、肩に赤き誌ありて、日月の形の如し、宋の時軍中にある久し、民間或い其異相（人臣にあらざるの人相を云ふ）おるを言ふ、宋之れを疑がひしが殺す能わす、竟に宋に代れり、性清儉にして、毎に曰へるやう、我に天下を治むること十年おらしめい、當に黄金の價と土の價と同からしめんと、位に在る四年にして殂す、改元する者一、建元と曰ふ、太子立つ、是を世祖武皇帝となす、（武皇帝）名い賾と云ふ、位に即き十一年にして殂す、改元する者一、永明と云ふ、太子の長懋已に卒せしかば、太孫代りて立つ、是を廢帝鬱林王となす、

（廢帝鬱林王）名い昭業と云ふ、位に即き一年にして改元し隆昌と曰ふ、西昌侯の鸞と云ふ者之を弑せり、新安王立つ、是を廢帝海陵王とおす、

（廢帝海陵王）名い昭文と云ふ、鸞に立てられ、延興と改元せり、鸞い自ら宣城王となる、帝い位に即きて未だ四月おちずして、廢し之を弑せり宣城王自立す、是を高宗明皇帝と稱す、

（明皇帝）名い鸞と云ふ、高帝の兄の子なり、高帝之を愛すること、己の子に過たり、而ふして武帝の太子長懋と云ふ者最も之を惡めり、志を得るに及よび、高武帝の子孫を殺して遺類なきに至る、位に即き五年にして殂す、改元する者二つ、建武、永泰と曰ふ、太子立つ是を廢帝東昏侯となれり、

（廢帝東昏侯）名い寶卷と云ふ、東宮たりしときより、學問を好まず、嬉戲て度おし、既に位に即きて、朝廷の士に接せず、惟嬖倖を親み信とし、屢〻大臣を誅せり、〇魏主の宏殂す、位にある、二十七年、仁みありて親に事へ、孝行おり、且つ恭しく儉にして禮式を制へ、音樂を作り、嚴然にして太平の風あり、胡の衣服を着、胡の言語をなすを禁ぜり、後姓を元氏と改め、都を洛陽に遷せり、實に魏國の盛德の主と云ふべし、諡して孝文皇帝と曰ふ、齒を高祖と云ふ、太子恪代り立つ、〇齊主は昏愚にして女色に淫且狂恣おり、愛幸所の潘妃に金を以て蓮の花を爲り地の上に帖けて之を步かしめて曰ふせあるやふ、此一步一步

に蓮の花を生ずるなりと、蓋し此の時佛法大ひに盛にして、齊主は深く之を信じけれど、潘妃を以て佛菩薩に比へて此の戯れをおせしならん、是より左右の者ゐ事を用ゐて人民を賊虐こと日に甚し、太尉たる陳顯達と云ふ者先建康を襲ひしが敗れて死せり、將軍たる崔慧景は命せを受けて兵を出し(豫州の刺史崔叔業と云ふ者壽陽を以て叛きたり此れ所謂叛洲なり)叛州を討ち、兵を還へし建康に逼る、時に南豫州の刺史蕭懿ゐ兵を將ゐて近きにありければ、齊主は急に召し入れて援はしむ、慧景敗れて死せり、蕭懿を以て尚書とあす、蕭懿の弟南豫州の刺史術は人をして蕭懿に伊霍の事(廢立を謀るなり)を行はしむ、爾らざれば、丞やかに歷陽に還へれと、蕭懿は其謀を用ゐる能はずして竟に死を賜ふ、術は襄陽ありて兵を起し引きて東に至り建康を圍む、齊人主を弑して術を迎へ、齊主位にある三年、改元すること一、永元と曰ふ、時に南康王先に已に自立せり、是を和皇帝と稱す、(和皇帝)名は寶融と云ふ、東昏の末年に寶融は兵を江陵に起し已にして帝と稱し、改元して中興と曰ふ、未だ東の方建康に踣るに及ばず、齊の太后は制を稱ゐひ、蕭術を以て相國の官とあし、梁公に封じ九錫を加へ、尋ぎて爵を進め王となせり、齊主姑孰に至り詔して梁に禪る、位に即き僅に一年にして弑さる、齊は高祖より是に至りて、七世、凡よそ二十三年にして亡びける、

(梁高祖武皇帝)姓は蕭氏、名は衍と云ふ、齊主の疎き一族なり、母は張氏と云ふ、菖蒲の花を生ずるを見る、ときに傍の人皆之を見るなり、因りて之を呑む、已よして衍を生りと云ふ、衍は生れて人に英れ物理に達し文學あり、東昏の初め、衍出でゝ鎭するとき、齊國の將に亂んとするを知りて、乃ち密に武備を修め、驍勇を聚むる萬を以て數ふるに至れり、又材木を伐出し檀溪に沈め、節を積むこと、岡阜の如く多し、兄懿死す、衍は牙(大將の牙旗なり)を建て衆を集め、檀溪に沈め置きし竹木を出し、軍艦を裝り、之に葺に節を以てす、事皆立ちどころに辨ぜざるなし、兵起りて一年餘にして建康に入り、禪りを受けて、帝の位に即けり、○魏主恪殂す、謚して宣武皇帝と曰ふ、廟を世宗と號す、其子詡代りて立つ、年甫めて六歲あり、母の胡氏は朝廷に臨みて制を稱へり、魏主已に長ずるに及びて、山野に狩して遊聘を好み、親ら朝廷に臨みて政事を視玉はず、胡后方に淫亂ありしかば、魏國の政事是に至り始めて亂る、將軍たる張彝の子仲瑀と云ふ者封事(人の知るを避く、故に封じて事を申す上書ありを、上りて、武人を排除て抑損しかばと、仲瑀は喧すしく謗るもの路に盈ち、榜を大巷に立て、期を越めて會集り、其家を毀ちて家族を屠せしかど、張彝父子は更に以て意にかけず、是に至り羽林、虎賁は千人に近く、相率みて尚書省(役所あり)に至り訴へ晉して瓦や石を以

て省の門を撃ちければ、上より下に至るまで、皆懾懼しかど、敢て之を禁じて討たざれば、遂に張彝の第に至り、其舍を焚き彝の父子を提曳し毆き撃て火中に投ぜしに、仲瑀は重傷を受けしも走りて免るゝを得たりしかど彝は遂に焚き死せり是に於て遠近の者皆震ひ駭き、胡后は其凶强もの八人を收へ之を斬て餘の者は復其罪を治して大赦し以て罪を問ざるを示しければ、皆心を安ずるに至れり、懷朔鎭の函使(凡よそ表書は皆函封、函使は使人なり、函を奉じて京師に詣る者を云ふ)たる高觀と云ふ者洛陽に至るとき、張彝の死するを見て、家に還へり貲を傾むけ以て客と交を結びければ、或人其故を問ふ、高觀は之に對へて曰へるやう、禁闕を宿衞する者相率ゐて大臣張彝の第を焚けり、然るに朝廷懼れて、其罪を問はず、政事をなす此の如し國の滅亡る推して知るべきなり、財物豈に常に守るを得べけんやと、高觀は先世(名は謐と云ふ祖父なり)の時に法に坐し北邊に徙れしより遂に鮮卑の風俗に習らふ、沈深ものにして大ひなる志ざしあり、侯景等と相友とし善し、任俠を以て鄕里に雄ものなり、○魏の胡太后朝廷に臨みしより以來、嬖幸の者事を用ゐ、政事は縱弛しに至り、盜賊は蠭起て封疆は日に蹙るに至れり、魏主の詡い寖く成長しければ、太后は自ら爲し行ふ所の不謹なるを知り、務めて惡事を壅蔽るより、母子の嫌隙なることは、日に深し、時に六州の大都督兼秀容縣の酋長たる爾朱榮と云ふ者兵强くありしかば、高歡は爾朱榮に見へて、即ち

兵を擧げ、君の側なる姦人を攘除て清肅んことを勸む、會〳〵魏主殂せり、蓋し胡太后の之を鴆殺するならん、後謚して孝明皇帝と曰ふ、爾朱榮は兵を擧て孝文帝の姪たる、長樂王子攸と云ふ者を立て胡太后を河に沈め、爾朱榮を以て大原王に封じて晉陽に還へれり、北海王たる顥と云ふ者梁に出奔しければ、梁は之を立て將を還はし送りて洛陽に入れしむ、子攸また出奔せり、爾朱榮は河を渡りて來り救ひしかば、顥は走りて死し、子攸は歸へりたり、是に於て爾朱榮に天柱大將軍を加ふ、魏主は陰に榮を誅すを謀れり、榮の朝廷に入るとき魏主は手ら刺て之を殺せり、爾朱世隆は爾朱兆と宗室の長廣王たる曄と云ふ者を立て、洛陽に入れしむ、是に至りて子攸は遂に弑さる、後謚して孝莊皇帝と曰ふ、爾朱世隆は又曄の疎遠なるを以て、之を廢し、孝文帝の姪たる廣陵王の恭と云ふ者を立てり、高歡は兵を起して爾朱氏の一族を誅し洛陽に入り、恭を廢してまた孝文帝の孫平陽王の脩を立つ、脩遂に恭を弑せり、後謚して節閔皇帝と曰ふ、高歡大丞相となり、府を晉陽に建て之に居る、魏主は高歡を畏れて晉陽を伐つを謀ると聞て、高歡は兵を擁ゐて來りしかば、魏主は長安に奔りて關西の大都督たる宇文泰と云ふ者に依り、宇文泰を以て大丞相となし、高歡は魏主を追ひしかど及よばずして、遂に清河王の世子たる善見と云ふ者を洛陽に立て鄴の地に遷りたり、魏は道武帝より是に至り十二世にして一百四十九年、後分かれて東魏西魏となる、

○是より先熒惑星ありて南斗（南極星なり）に入る、梁主の曰へるやう、熒惑星の南斗に入るい蓋し天子殿を下りて走るなりと、乃ち跣しにて殿を下りてこの災厄を禳ひ玉ふ、是に於て脩の出奔するを聞に及び、悪て曰せある、虜も亦天象に應ずる邪と、脩い長安に至り半年を踰て又宇文泰と隙を生せしかバ、宇文泰い遂に之を毒鴆し、後諡して孝武皇帝と云ふ、孝武帝い既よ弑されしより、宇文泰い南易王の寘炬と云ふ者を立てり、高歡い卒するとき、遺言し其子澄に囑けて曰へるやう、侯景い鷙鳥の攻戰て互に勝負あり、高歡い卒するとき、遺言し其子澄に囑けて曰へるやう、侯景い鷙鳥の如く飛揚り大魚の如く跋扈まはる志あり、汝の能く制御る所のものにあらず、侯景に敵するに堪る者い惟慕容紹宗のみと、侯景い果して河南の地を以て西魏に降參し、未だ幾ばくならざるに、復梁に內附せり、梁い侯景を封して河南王となす、侯景の使者梁に至るとき、梁の群臣い皆納るゝを欲せず、梁主も亦自ら謂へるやう、我國家い金の甌の如く一つの缺傷もなく、一國平安あり、恐くい侯景を納るゝ因り以て事を生ぜんと、惟朱异の力めて之を納るを勸めたり、東魏い慕容紹宗を遣りて侯景を擊しむ、侯景敗れて南に走り梁の壽春を襲ふて之に據り、封爵の命令を請ふ、梁就て南豫州の牧となし、已にして東魏と平を梁に求む、蓋其意い侯景を得と欲するならん、侯景い梁の東魏に通ずるを恨み、遂に壽陽にありて叛き兵を引て南に渡り建康を圍たり、梁主位に即くより以來、江左（禁中を謂ふ）久しく無事なりしかバ、惟佛法を崇ひ、屢〳〵身を佛寺に捨て（出家するを云ふ）上も下も皆之に化ふ、侯景の蜜城（宮城あり）に兵を以て打寄るに及び援兵の至るもの皆侯景の爲めに敗らる、梁主い人を遣はし侯景と盟ひ、以て大丞相となす、臺城圍を受る五日にして陷いる、侯景い入りて見しかば、引きて三公の位に就かしむ、梁主い神色も變らずして侯景に謂げて曰へるやう、卿は軍中にある、久し乃ち苦勞たる毋きかと、侯景は退ぞきて人に謂げて曰へる、吾常に鞍に跨がり陣に對し、矢や石の交〳〵下るに了に怖るゝ心あし、然かるに今蕭公に見ゆるに方りて自ら慴れしむ、豈天子の威光は犯難きことに非ずや、吾以て復此人を見るべからずと、梁主は侯景のために制へられ、飲膳も亦裁損れしかば、憂ひ憤ふりて疾をおし、口苦くして蜜を索れども得ず、再び荷々（喉喝きて聲を成さるを云ふ）と曰のみにして遂に殂す、位に在る四十八年、改元する者七、天監、普通、大通、中大通、中大同、大清と云ふ、壽八十六、是よりさき先太子たる統は仁あり事理に明かにして、孝あり儉にして學を好みて、文章を能し、東宮に在す三十年にして終せり、梁主は嫡孫を舍て別子を立つ、是に至りて位に卽く、是を大宗簡文皇帝（簡文皇帝）名は綱と云ふ、東宮たること十八年にして、後侯景の亂に遇ふ、既に立ちて、制を侯景に受くるのみ、湘東王の繹は江陵を鎭し、自ら假黃鉞大都督中外諸軍承制と稱せり、

岳陽王詧は昭明太子統の第三子なり、襄陽を鎮し、繹と相攻む、詧は使者を遣りて西魏に降參として援ひを求めたり、〇東魏の大將軍渤海王たる澄と云ふ者、是より先其下のために殺さる、其弟洋は亟相とあり、齊王に封ぜらる、東魏主に逼りて位を禪らしめ、尋ぎて之を弒し、諡して孝靜皇帝と曰ふ、東魏は國を建つる一十七年にして亡たり、〇西魏は梁の蕭詧を以て梁王となす、〇西魏主の寶炬殂す、諡して文皇帝と曰ふ、子欽代り立つ、〇侯景自立して漢王となり、梁主を廢して之を弒せり、梁主は尸位(其位にありて其任を行はぬものをいふ)こと二年に及ばずして、改元するもの一、大寶と曰ふ、侯景は豫章王の棟を立つ、已にして位を簒へり、是より先始興郡の太守たる陳霸先と云ふ者兵を起して侯景を討つ、ときに湘東王も亦王僧辨と云ふ者を遣りて、侯景を討しむ、侯景が位を簒ひしより數月にして、僧辨霸先のために擊ち敗られ亡げて吳に走りて海に入らんと欲して、其臣下のために斬られ、尸を建康に送り、首を江陵に傳へ、其手足を截りて北齊に送りたりと云ふ、湘東王立つ、是を元皇帝となす、(元皇帝)名は繹と云ふ、一目ゐ眇にして其性ゐ殘忍ものあり、江陵にありて位に即く、侯景の亂より、州郡の大半ゐ西魏に入り蜀も亦魏の所有となる梁ゐ巴陵より以下建康に至り、長江を以て限境となせり、〇突厥ゐ柔然を攻めしかば、北齊ゐ突厥を聲て、柔然を遷せり、是時柔然ゐ勢ひ衰ろへ、突厥始めて兵強よく國大ひあり、〇西魏の宇文泰ゐ其主欽を廢して其弟廓を立てり、是に於て欽ゐ遂に弒にあへり、〇西魏ゐ杜國たる于謹と云ふ者を遣りて梁を伐ち江陵に入りしかば、梁主ゐ古今の圖書十四万卷を焚て、歎きて曰へる、文學武藝の道今夜盡んと、乃ち出て降參せり、或人の問へるやう、何の意にて圖書を焚けりと、對へて曰く、書萬卷を讀むとも今日の如く國の滅亡ことありと、尋ぎて殺さる、位に在る三年、改元して承聖と曰ふ、〇西魏ゐ襄陽を打ち取り、梁王の詧を江陵に徙して、帝と稱せしめ、兵を屯し之を守らしむ、是を後梁とおし、西魏に臣たり、王僧辨、陳霸先の二人ゐ晉安王を奉じて、建康にありて、制を稱ゐしむ、貞陽侯の淵明と云ふ者是より先北齊に獲へられ、是に至り兵を以て之を納る、王僧辨ゐ奉じて建康に歸へり帝と稱せしむ、陳霸先ゐ王僧辨を殺し、淵明を廢して晉安王を立つ、是を敬皇帝となす、(敬皇帝)名ゐ方智と云ふ、元帝の子あり、年十三にして位に即く、陳霸先を丞相となせり、〇西魏の太子、太家宰、安定公、宇文泰、卒す、世子の覺嗣げり御十五、從兄の宇文護と云ふ者之を輔けしが未だ幾くあらずして覺を以て周公とおす、〇西魏主の廓は位を周に讓り、後廓は遂に弒されたり、諡して恭皇帝と曰ふ、西魏國を建つる四世二十四年にして亡たり、覺周天王と稱す、其性は剛くして事を爲し果るものなりしかば、護の權を專らにするを惡みし

より、護は遂に憂を弑すに至る、後論して孝閔皇帝と曰ふ、而して泰の長子たる毓を立てり、㊀梁の丞相たる陳覇先は相國とあり、陳公に封ぜられ九錫を加へられ、尋ぎて又爵を進め王とおれり、梁主改元する者三、紹泰と曰ひ、太平と曰ふ、尸位こと三年ならずして、陳に禪り尋ぎて弑されたり、梁は高祖武帝より是に至りて四世、凡よそ五十六年にして亡びたり、

陳

（陳高祖武皇帝）姓は陳、名は覇先と云ふ、吳興郡の人あり、梁の武帝の大同年中に廣州の參軍とあるときに、廣州に亂を起せし者ありしかば、討ちて之を平げ、因りて其功績を以て將軍とあり、尋ぎて交州の司馬、西江の都護、高要の太守の官とおりて、七郡の諸軍を督し、屢〻寇亂ものを擊ち平げ、侯景の臺城を陷しいれしとき、覇先は始興に守たりしかば、郡中の豪傑に結び、兵を起して侯景を討ち、先づ江州を取り、州の刺史となり、兵を引きて諸軍に會合し、卒に以て侯景を擊ち平ぐに至り、遂に梁に事へて大將とおり丞相とおり、以て禪りを受るに至り、位に即き三年にして殂せり、改元して永定と曰ふ、子二人あり昌と云ひ頊と曰ふ、皆江陵の陷いるとき、長安に沒入れたり、臨川王立つ、是を世祖文皇帝となす、（文皇帝）名は蒨と云ふ、武帝の兄の子あり、武帝の梁の亂を平ぐるときにありて、已に勳功

ありしがば、是に至りて、位に即けり、㊀周主毓自ら帝と稱す、㊁北齊主の洋と云ふ者盡く元氏の一族を滅せり是に至りて洋殂す、論して文宣皇帝と曰ふ、㊂周の宇文護は周帝の事理に明かに提敏にして且つ識量あるを憚かり、竟に毒を進めて之を弑し論して明皇帝と曰ふ、毓の弟ある邕と云ふ者代り立つ、㊃北齊の文宣帝の母弟なる、常山王演と云ふ者其主殷を廢して自立し尋ぎて殷を弑し、演立ち一年にして殂せり、論して孝昭皇帝と曰ふ、母弟の長廣王たる湛と云ふ者又演の子百年を殺したりと云ふ、㊄後梁主の詧れ殂して、太子の嶔代りて立つ、㊅自ら太上皇帝と稱ふ、㊆陳主い難難劬勞の中より起りしものにして、能く民の疾苦を知れり、其性は物事に明察りて儉かに能事に勤む、位に在る八年にして殂す、改元するもの二つ天嘉と曰ひ、天康と曰ふ、太子立つ、是を廢帝臨海王とおす、（廢帝臨海王）名い伯宗と曰ふ、位にある三年にして、改元するもの一、光大と云ふ、安成王頊の爲に廢せらる、㊇北齊の太上皇帝の湛と云ふ者殂す、論して武成皇帝と曰ふ、㊈陳の安成王自立せり、是を高宗宣皇帝とおす、（宣皇帝）名は頊と云ふ、初め陷入にせられ長安に至りしが、文帝の時周の人い頊を送りて陳に還へせり、是に至りて遂に位に即く、㊉周主邕い宇文護を誅し始めて政事を親す、㊊北

齊の後主たる緯と云ふ者嬖寵の者多くして政事亂る、周い齊を伐て鄴に入り、緯を鄴へ歸へりて、之を殺し卒に其一族を殺し夷せり、北齊は國を建る五世、三十年にして、亡びたり、○周主たる邕は沈深にして遠識あり、政事は嚴にして明かなりしかば、稱して賢主とあせり、齊を滅ぼし一年にして殂す、壽三十六、諡して武皇帝と曰ふ、太子贇立ちて皇后楊氏を立てり、后の父隋公楊堅と云ふ者事を用ゐ、上柱國大司馬とある、贇い太子たりし時より、好みて小人を昵近け、立ちて未だ一年ならずして位を子闡に傳へ自ら天元皇帝と稱す、驕侈ること彌〳〵甚だし未だ一年ならずして殂す、諡して宣皇帝と曰ふ、楊堅い自ら大丞相となり、相國隋公に進み、九錫を加へらる、未だ幾ばくならずして周主の禪い位を隋に禪か尋きて弑さる、隋主れい盡く宇文氏の一族を滅したり、周い帝と稱するより是に至りて五世、二十五年にして亡びたりと云ふ、◎陳主位に在る十四年、改元して大建と曰ふ、後殂して太子代り立つ、是を後主長城煬公となす、

（後主長城煬公）名い叔寶と云ふ、太子たりしときより詹事（太子づきの官）たる江總と長夜の飲宴をなせり、位に即きて未だ幾ばくあらずして、臨春、結綺、望仙等の閣を起らへ各〳〵高さ數十丈、連延こと數十間、皆沈香檀香等の香木を以て之を搆造、金玉珠翠（翠い翡翠あり）を以て之が飾とあし、珠の簾や寶玉にて飾たる帳より衣服玩弄物に至るまで、皆瑰麗くしきこと、近古の未だ當て有らざる所あり、其下には石を積て山を爲り水を引きて池とあし、花莽を雜〳〵と種付け、陳主い臨春閣にあり、貴妃の張麗華い結綺閣に居り、龔孔の二人の貴嬪い望仙閣に居り、複道（上下に道あり各〳〵行可らしむるあり）ありて往來せり、江總い宰輔となりて、政事を親らせず、日に孔範等の文士と後庭の酒宴に侍るを狎客と謂ひ、諸貴妃に客と唱和しむ、其曲に玉樹、後庭花等の名あり、君も臣下も酣酒て歌ひ、夕より旦に達れり、宮官、近習の者い內外別なく、連結あり、宗戚の者い縱橫をなし、貨賂い公に行はれる、に至る、孔範い自ら謂へるやう、文學武藝の才能あるい擧朝をして、已に及あしと、將師にして微しく過失あるときい即ち兵權を奪ふ、是に由りて文官武官皆解體になりて遂に以て國の覆滅を速くの基とあれりと云ふ、○後梁主蹄殂して太子琮代り立てり、隋主廢して之を滅せり、琮江陵にありて初めて帝と稱せしより、西魏、周、隋に臣とし、統る所僅に數郡のみ、凡そ三十年にして亡びたり、○隋い晉王の廣を以て元帥とあし、師を帥ゐて陳を伐しむるときに孔顗と云ふ者元帥の長史となり、蘇道衡に問へるやう、江東い戰ひ克べきやと、對へて曰へる必ず、之に克ん、郭璞と云ふ者あり言へるやう、江東は分れ王たること三百年にして、中國と合せり、と、蓋し郭璞は晉人にして數を知れり、晉の元帝南に渡りしより此に至

り二百七十二年、故に將に周からんとすと云へるあらん、陳主ゝ隋の兵ありと聞て、近臣に謂て曰へるやう、王氣ゝ此にあり、彼ゝ何為ものぞ、孔範の曰へる、長江ゝ天然の塹なり、豈能く飛び渡るを得んや、臣ゝ毎に官の卑きを患ふ、虜をして若し長江を渡らゞ、定めて大尉公となさんと、陳主も孔範の言ゞを以て、然なりとなし、伎（女樂あり）を奏し、縱ほゝに酒を飲み、詩を賦して輟ず、賀若弼は廣陵より江を渡り、韓擒虎ゝ横江より宵采石を渡るとき、守者皆醉へり、韓擒虎ゝ遂に新林より進みて直に朱雀門に入りしかゞ、陳主ゝ自ら景陽殿後の井の中に投ぜり、軍人ゝ井を窺ひ將に石を下さんとしけれゞ、乃ち叫ぶ因て繩を以て之を引く、張麗華、孔貴嬪と同束て上れり、乃ち俘にして歸りける、後主ゝ位に在る七年、改元すること三たびなり、

隋

（隋高祖文皇帝）姓ゝ楊氏、名ゝ堅と云ふ、弘農郡の人あり、相傳へて東漢の大尉震の後裔ありと云へり、父楊忠ゝ魏及び周に仕へ勳功を以て隋公に封ぜらる、堅ゝ遂に父の爵を襲げり、堅ゝ生れて異ことあり、宅の旁に尼寺ありしが、一尼ゝ堅を抱き歸へりて自ら之を鞠ふ、一日尼出るありければ、其母に托し自ら抱かしむるに、角出て、鱗起る、母ゝ大ひに懼ろきて、之を地に墜せり、尼心動き函かに還へりて之を見て曰へるやう、我兒を驚かし、晩く天下を得せしむるを致せりと、堅の成長するに及びて相表は奇異あり、周人は皆て武帝に告るやう、普六如堅は反するの人相ありと、堅ゝ之を聞て深く自ら晦匿（我量器をつゝみ匿すを云ふ）せり、女あり周の宣帝の后とある、周の靜帝立つに至り堅は太后の父なるを以て政事を乘り、遂に周の天子の祚を遷し位に即きて陳を平けて天下始めて一とおれりと云ふ、開皇二十年、太子の勇を廢して庶人とおす、初め帝は勇をして政事に參りて決斷をおさしむるに時として利あり不利ありしと云ふ、勇は性ゝ心寛しして手厚く率意にて矯飾あり、帝は性ゝ節儉ありしに勇は服用侈りしかば、恩寵は始て衰へたり、勇は最ゝ寵多かりしかど、妃元氏は却りて寵愛なく疾に遇て死せり、而して庶子多く、獨孤皇后は深く之を惡むに乘して晉王廣は彌ゝ自ら矯り飾りて卒に嫡を奪ふの計をなせり、后も亦帝を贊成し勇を廢し、廣を立て、太子となしたり○龍門縣の王通と云ふ者天下を太平に治むる十二の策を獻上しが、帝は之を用ゆる能はず、罷め歸へりて河水汾水の間に教授せしかば、弟子の遠方より來り學ぶ者甚だ衆しと云ふ、○仁壽四年、帝は不豫なりけるより太子を召し入りて殿中に居しむ、ときに太子は一僕射たる楊素に問ひしに其答書を宮人誤りて帝の所に送りければ、帝は之を覽て大ひに惡

む、ときに帝の寵愛ある所の陳夫人出ゝ衣服を更ふるに方り太子に逼られ之を拒みて免るゝを得たり、帝は陳夫人の神色の異あるを怪しみて故を問ふ、夫人は泫然と涕を垂れて曰へるやう、太子は無禮ありと、帝は恚みて牀を抵て曰せある、人の妾を犯さんとする人の道を知らざる畜生の如き何ぞ大事を付托るに足らん、實に我を誤まる者は獨孤ありとて、將に故の太子勇を召さんとす、太子の廣は之を聞て右庶子たる張衡に殿に入りて帝の疾に侍せしめ、因りて帝を弑し、人を遣はし勇を縊り殺さしめたり、帝は性嚴重にして政事を勤めしかば、令するときは、行はれ、禁ずるとは止む、財には齒ありと雖へとも、功勳ある者に賞を與ふるに至りては、吝まず、百姓を愛み養ひ農事蠶桑を勸課て、徭くを輕くし、賦を薄くし、自ら奉ひ玉ことと儉約なりければ、天下皆之に化ふに至れり、初め禪を受るときは民戶は四百萬に滿ざりしが、末年に八百萬を踰たり、然れども詐力を以て天下を取り、猜ひ深く人を忌、物事に苛しくて察かなりしかど讒言を信とし受け納め、故を以て、功臣故舊の者皆始めより終りよ至るまで身を保全せしものおしと云ふ、位よ在る二十四年、改元する者二、開皇、仁壽と曰ふ、太子立つ、是を煬皇帝とおす、（煬皇帝）名は廣と云ふ、開皇年間の末に立ちて太子となる、是日天下地震せり、位に即きて首めに洛陽の顯仁宮を營造て、江嶺の奇しき木材異りたる石を發し、又海內の嘉木異りたる

草より珍しき禽、異りたる獸に至るまで苟くも珍物と云ふものを求め、以て苑圃よ實て、又通濟渠を開き長安の西の苑より穀水洛水の河流を引き河よ達し、河を引きて汴水よ入れ、汴水を引きて泗水に入れ以て淮水に達せり、又民役を發して邦溝を開き江よ入れ、旁ら御道を築き、樹るに柳を以てし長安より江都よ至るまでよ、離宮を置くこと四十餘所あり、八を遣れし、江南よ往きて龍舟及よび雜船數万艘を造らしめ、以て游幸の用よ備ふ、西苑は周回三百里、其內を海となせり、周回十餘里、蓬萊方丈の諸山を爲り、高さ百餘尺臺觀や宮殿は其山上よ羅絡れり、海北に渠あり、縈り紆りて海に注き入る、渠に緣り沿ふて十六院を作る、門皆渠に臨み華麗なる究極もなし、一院ごとに四品夫人を以て之を主どらしむ、宮殿の樹木の葉花の凋み落るときは、剪綵して花や葉を爲り枝よ綴け、沼の內も亦剪綵して荷芰菱黃を爲り、其色渝るときい、則ち新しき者よ易へ、好みて月夜を以て宮女數千を從へ西苑よ騎にて游幸ありて、曹子建の清夜に西園に遊ぶ詩を用ゐて以て曲とおし、馬の上へよて之を奏せしむ、○後又永濟渠を開き沁水を引き南の方河よ達し北の方涿郡に通ぜり、又汾陽宮を營造し、又江南河を穿ち京口より餘杭縣よ至る八百里なり、○洛口倉を鞏縣の東南原の上よ置く城の周回二十餘里、三千の窖を穿ち興洛倉を洛陽の北に置く城の周回十里、三百の窖を穿ちて、窖よは各〳〵皆八千石を容る、帝れ或は洛陽よ如き、或は江都よ如き、或

い北巡し榆林縣の金河より至り或は五原より如き、長城を巡り、或は河右を巡り、營造をおし巡遊ること虛歲なかりける、又天下の鷹師を徵す、至る者一万餘人なり、又天下の散樂(雅樂に非ざるもの即ち能狂言の如きものを云ふ)を徵す、諸蕃は來朝して百戲を端門に陳して、綵竹を執る者一万八千人、月を終て罷む、其費用巨萬なり、歲を以て常例となせりと云ふ、○高麗王を徵して來朝せしむ、王至らず、大業七年、帝い自ら將として高麗を伐ち天下の兵を徵して涿郡に會せしめ、河南、淮南、江南の地に勅して戎車五万乘を造らしめ、衣服や甲冑等を供へ戲せ、河南、河北の民夫を發し軍の須用に供へ、江淮以南の民夫を以て黎陽及よび、洛口諸倉の米を船にて運搬し、舳艫こと千里、往還するもの常に數十万人にして晝夜も絕る間あし、ために死するもの相枕ほどに多かりければ、天下は騷動て、百姓相困しみ、始めて相聚り盜を爲すに至れり、○滑南の竇建德の兵起る、○帝の徵所の四方の兵、皆涿郡に聚る、一百一十三萬人にして、兵粮を饋運ぶもの之に倍し、首めより尾に至るまで千餘里に亘れり、帝は遼東に至りて城を攻しかど克ずして、諸軍大ひに敗れて還へる、明年再び兵を徵し自ら將として之を擊ちたり、○楚公の楊玄感と云ふ者朝廷の政事の日に紊を見て潛かに亂を作すを謀り、是に至りて餽運る事を黎陽に督して遂に叛きたり、帝い軍勢を引き還へり將を遣はして之を擊しむ、玄感い洛陽より兵を引きて潼關に起き、兵敗れて走り死せり、帝も又涿郡に如きて高麗を伐ちしかば、高麗い使者を遣はして降參を請ふ、帝い亦長安に還る已にして洛陽に如き汾陽に如き江都に如き巡遊すること仍虛歲いなかりける、○浦山公李密の兵起る、李密い少くして才智謀畧ありて、志氣雄遠なり、財を輕んじ、士を好む、嘗て黃牛に乘り漢書を以て牛の角に掛けて之を讀めり、楚公楊素い遇て之を奇とし、是に由りて楊素の子玄感と游びたり、初め玄感に從ひ兵を起せしかど、玄感は敗れしかば、李密い姓名を變へて亡け匿る、時人の皆言へる、楊氏は將に滅ひんとし、李氏は將に興らんとすと、又民間に流謠あり、歌に曰く

桃李子、皇后走二楊州一、宛轉花園裏、勿二浪語一誰道レ許、

蓋し此詩の意に桃李子と謂ふい逃亡たる李氏の子ならん、皇后い何れもきみと訓して天子と云ふとにて即ち煬帝を指すなり楊州(江都なり)に幸きありて花園の裏に宛轉して樂めりとい云へ、浪に語る莫れ誰か許と道ふ者い李密の事なり、密い遂に群盜翟讓等と起りて榮陽を攻め、之を下し牙旗を建て、所部を統べ、西の方に行み、說きて諸城を下し、大ひに獲たりと云ふ、○鄱陽の賊の帥たる林士弘と云ふ者楚帝と稱して、江南の地に據る、○杜伏威い歷陽に據れり、○竇建德い長樂王と稱す、○馬邑の校尉たる劉武周、朔方郡の郎將たる梁師都等は各〳〵郡に據りて兵を起せり、○李密い興洛倉に據り河南の諸郡を畧取り遂に魏

公と稱す、○突厥は劉武周を立て定陽郡の可汗（夷の酋長を云ふ）となし、樓煩、定襄、雁門の諸郡を取れり、○梁師都は彭陰、弘化、延安等の諸郡を取り、自ら梁帝と稱へり、○金城の梭尉たる薛擧と云ふ者兵を隴西郡に起し、自ら西秦の覇王と稱す、○武威の司馬たる李軌と云ふ者兵を河西郡に起し、自ら涼王と稱す、○薛擧は自ら秦帝と稱し、徙りて天水に據る、○蕭銑は兵を巴陵に起し自ら梁王と稱す、○唐公の李淵は兵を太原郡に起し、諸郡に克て長安に入る、時に隋の大業十二年なり、帝は江都にありしかば、李淵は遙に尊びて太上皇と

あし、代王を立つ、是を恭皇帝となす、

（恭皇帝）名は侑と云ふ、煬帝の孫あり、年十三にして李淵に立てられ、大業十三年を以て義寧と改元せり、李淵大丞相となり、唐王に封せらる、煬帝は江都にありて、女色に淫り、人を虐することを日に甚だし、酒を流連けて反きは口を離れず、中原已に亂るゝを見て、北歸に心なし、又從駕り人は關中のもの多ければ人〳〵江都に歸らんと思ひ遂に叛を謀り、許公宇文化及を以て主とおし、夜兵を引きて宮に入る煬帝を縊殺ろし、宗室の者少長となく、皆死せり、之先に文帝悉く宇文氏の一族を滅せり而して其存する者乃ち其子を滅す、天道あり と謂ふべし、惟秦王浩を存して之を立て自ら大丞相となり、衆兵を擁ゐて西せり、○蕭銑は江陵にありて帝と稱せり、○隋帝侑位に即き半年にして唐に禪づる、隋は高祖より

是に至りて三世、凡よそ三十七年にして亡たり、

通俗十八史略卷四終

通俗十八史略卷四

唐

（唐高祖神堯皇帝）姓は李氏、名は淵と云ふ、隴西郡の成紀と云ふ處にて生れし人なり、西涼王の武昭曷と云ふ者の後を受繼ぎたる者にして、其先祖の虎と云ふ者は西魏の皇帝に事へ功多かりければ、封たてられて隴西郡の公とありける、また父に昞と云ふ者あり周の世に於て、唐の公に封ぜられしかば、李淵は其爵を襲ぎたる者ありしが、隋國に煬帝と云ふ天子ありて、李淵を以て、弘化郡の留主と云ふ官におしける、李淵と云ふ者は衆庶を御ふこと寛簡なれば、之に附もの多かりしとおん、ある時煬帝は李淵の相表の奇異にして、淵の名は闕識（淵が名は李子將に興らんとすと云ふ未來記の語にあると云ふとおり）に應るとて之を忌避けられたれば、李淵は陰に懼れて縱まゝに酒を飲み、賄賂おど近習の女官に納て、以て自ら我才智を晦しける、時に天下に盜賊起り立しかば、李淵を以て、山西、河東（二州の名あり）撫慰大使（官の名）とおしたり李淵は制せを承けて、或は官を陟め或は爵を黜等のことを行ひ、且群盜を討ち捕へて、掠しとども多くありける、又突厥と云ふ夷狄あり、國邊に寇しければ、李淵に詔して、之を擊成げしめたり、李淵が次子の世民と云ふ者は、聰明にして勇決且識量も人に過たるものあれば隋室の方に亂れたるを見て、陰に天下を安泰におさんとの志し

あり て、晉陽の宮監(官の名)裴叔と晉陽の令(官の名)劉文靜と云ふ者と、相結たりしかば、文靜は世民に謂ひけるやう、今隋國の主上たる煬帝は南の方江淮を巡り玉ひ群盜は、萬の數より も多く起りける、此の際に當りて、眞に天下を治むる主あり天下の群盜を禦御し用ひたらんには、天下を取りて皇帝とあるは、掌ろを反すよりも容易ことゞもあり、今太原郡の百姓を收拾て兵とせば十萬の人は得べし、又尊公の將ひ從がへる所の兵も五六萬人なるべし、此の多くの兵を以て、虛を乘て、關中に入り、天下國家に號令示めせしかば、半年を過ずして、帝の業は成し得らるべきなり、世民は笑つて申しけるやう君の言は正に我意に合ひしと、乃ち陰に部署をなせしかど李淵は知らざるにやありけん、李淵の兵は突厥と云ふ夷と戰ひて拒ぎ勝こと能はざるにあひ、罪を獲を恐れければ、世民は間を乘て、李淵に說て曰へるやう民の心に順ひて義兵を興せしかば、禍ひも轉じて福とおすことを得べしと、李淵は大に驚き、汝は如何して此の樣ある言を云ふぞ、今吾は汝を縛て縣官(朝廷あり)に告げんと、曰ければ世民は徐に曰へるやう、世民は、天の運時と人民の事爲とを覩るに、此の如し、故に敢て斯く申すあり、必ず我を縛へて告るも亦敢て死するをも辭せざるあり、李淵は曰すらく吾豈に、告げ訴へるに忍びんや、汝愼みて口より出す勿れと、明日復說て曰く、人々皆傳へ申すに李氏は當に圖讖に應るなりと、故に李金才の一族の者は何事もなきに、殘らず殺されけ

る、大人(淵を云ふ)能く賊を滅し盡し、則ち功高くしても賞を受くると能はず、自身もまた益々危ふからん、惟昨日の言は實に以て禍ひを救ふ可し此れ萬全の策ごと、云ふべきか、願くは疑ふ勿れと、李淵は歎美なして曰へるやう、吾一夕汝の言を思ふに亦大ひに理ありと、今日家を破り身を亡なふも、亦汝に由る、家を化し大にして國となすも汝に由るあり、〇之より先に裴叔と云へる人ありて私に晉陽と云ふ處の宮人をして李淵の寢所に侍らしむ、李淵は裴叔に從かひ酒宴をなせしかば、裴叔は酒宴の酣あるとき李淵に曰へるやう、二郎(世民輩行)は陰に兵士や馬を養なひ、大事を擧せんと欲す、裴叔は自ら思へるやう晉陽の宮人をして公に侍らしむる爲めに、事を誹りしと覺られなば、公と併に誅さるゝ事もやありつらんと恐れ懼くのみなり、時に隋の煬帝と云へる天下は李淵い夷の寇に禦ぎ勝つこと能はざるを以て、使者を還はし李淵を執へて江都(都なり罪ある者を詰べも役所の在る所なり)に送り其罪を詰べらるゝに會たり、世民は裴叔あどゝ復說話して曰へるやう、もはや事の起るとは迫りて近きにあり、宜しく早く計ごとを定むるこそ肝要なり、且晉陽と云ふ所の士も馬も精れて强く、又宮監(役所あり)の蓄積は巨萬あり、代王に封たてられし恭帝は未幼沖くもあり關中の豪傑は我れもくと起り立ちたり、公李淵よ、若しも鼓をならして西の方は進行て民を撫育なひ民の心を有しあらば、其事を成の容易あるは囊の中の物を探る如きあり、李淵

は乃ち兵を召募りて事を起さんとす、遠近の士庶赴き集る、仍て使者を遣突厥と云へるものより兵士を借りける、世民は兵を引つれて西河を擊て之を拔取、西河郡の丞高德儒を捕へ其罪を數め(誚讓なり)之を斬りて曰へるやう、汝高德儒よ汝は野鳥(孔雀を指す)を指して鸞(鳳凰を指す)とおすは以て、人主を欺むくなり、吾兵を興すは正に佞人を誅すばかりと云ひて尙も兵を進めて霍邑縣の兵を打破り臨汾縣絳州等の兵に打ち克て韓城を降參なさしめ、馮翊と云ふ者を降がへたり、李淵ハ兵を留めて河東郡を取圍み、自ら兵を引つれて、西の方に攻入り、世子の建成と云ふ者を遣りて潼關を守らしめ、世民ハ渭北(渭水の北)へ徇へ、關中にある群の盜賊ハ悉く李淵に降參なしたりしかバ、李淵ハ諸軍勢を合せて、長安を取り圍みしに打克て恭帝と云へる天子を立てたり、李淵ハ大丞相唐王となりて九錫を加へられ、引き尋いて位を禪り受け、子の建成を皇太子に立て、弟の世民を以て秦王となし、元吉(大祖の三子)を以て齊王とおしたり、○隋國の東都の留守越王侗と云へる者ハ煬帝の孫にして亦衆庶の上に立られて、洛陽と云ふ都にて自ら帝と稱したり、○秦國の主薛擧と云ふ者卒したり、其子の仁杲と云ふ者立て王位を襲たりける、○魏の國の公たる李密と云ふ者ハ隋國の兵と戰ひて大に打敗れて、唐國に降參したりける、○宇文化及と云ふもの、其立てたる所の主浩と云ふ者を弑して宇文化及ハ自ら帝と稱ふ、○陸國の主李軌も亦帝と稱ふ、○唐の秦

王世民ハ秦國の兵を打ち破り秦主の薛仁杲と云ふ所に降參しけれバ世民ハ長安と云ふ所に薛仁杲を送りて市場にて首を斬りたり、○李密と云ふ者の大將たる徐世勣と云ふ者ハ李密の舊の領分ある境に據りて唐國に降參して姓を李と賜はる、○竇建德と云ふ者河北の諸州を打取りて自ら夏王と稱ふ、○李密と云ふ者唐國に叛して唐人に獲られて首を斬らる、○夏主竇建德ハ宇文化及を打破りて之を誅す、○隋主の侗と云ふ者立一年にして王世充と云ふ者に廢せらる、王世充ハ自ら立ちて鄭國の帝となり、尋きて侗を弑す、○唐國にてハ大將を遣て涼主の王軌と云ふ者を襲ちして執へ歸り之を弑す河西と云ふ處ハ平かに治まりたりけり、○沈法興と云ふ者ありて毗陵と云ふ處にて梁國の王と稱ふ、○杜伏威と云ふ者ハ唐國に降參したり、○唐の秦王世民ハ定陽郡の大將宋金剛を擊て之を破り定陽の可汗(夷の天子の名)劉武周及び宋金剛ハ皆走げて死したり、○唐の秦王世民ハ諸軍勢を督して鄭國を伐破りたり、○吳國の主李子通ハ梁國を襲しかば、梁主の沈法興ハ走て死しける、○夏王の竇建德ハ鄭國を救けしが、唐の秦王世民ハ大にこれを打ち破りて竇建德を擒りにしたる、鄭國の主王世充と云ふ者ハ降參し、世民ハ長安と云處に至るに黃金甲を被たる二十五人の大將ハ皆後より從がふ、鐵作の甲をつけたる騎兵ハ萬人甲士三萬人にて俘を大廟(先祖を祭る廟やなり)に獻まつる、竇建德と云ふ者を市に斬りて、王世充をバ赦したり、尋きて潛に人を遣り

て王世充を殺さしむ、○竇建徳の故の大將劉黒闥と云ふ者ありて障南と云ふ地にて始めて兵を起したり、○唐にては大將の李靖と云ふ者を遣りて梁國を伐しむ、梁國の主蕭銑と云ふ者降參したりしかゝ長安と云ふ處に送りて之を斬る、○杜伏威なる者吳主の李子通を擊て之を執へ長安に送りて誅さる、○劉黒闥と云ふ者自ら漢東の王と稱ふ、○楚の國の主林士弘と云ふ者卒したり、其主林士弘に從がひし衆くの者い遂に散〳〵になりたり、○漢東の將黒闥を執へて唐に降參し、黒闥を斬る、○唐の淮南道行臺僕射(官名)輔公祏と云ふ者い丹陽と云ふ處にて反せしかば唐の大將はそれを擊て首を斬りたり、○慶州の都督(官名)楊文幹と云ふ者反したりければ、秦王の世民を遣りて討ちて之を平げ、○突厥と云ふ虜入りて寇せしより、秦王の世民を遣りて、之を禦がしむ、豳州にて突厥の兵に遇ふ、世民は騎兵を帥て馳て虜の陳に詣りて、突厥に告て曰へるやう我は秦王世民あり、虜は其言を聞て敢て戰をなさずして、秦王世民の盟を受けて兵を退けたり、○唐の兵を興してより七年にして偽て王と稱し、衆庶を苦しめし者は皆亡びて、天下は定まりてもはや、事を起す者もなきに至る、是歳に初めて、州、縣、鄉に學校を設置く、帝は親ら國子學(學校の名なり)に詣りて先聖(孔子なり)先子(孟子なり)を釋奠たり、またはじめて官制(大尉、司徒、司空、を三公となし、倘書、門下、中書、秘書、殿中、內侍を六省となし、御史臺、大常、大府を九寺となし、將策監、國子學、天策上將府、左右衞より左右領衞に至る十四衞となす等あり)新に定め律令を天下に頒し、均田(民の貧富は均しからず故に此法を定めて以て民の資產を定るなり)租(田地より出す年貢なり)庸(賦役なり)調(織物を貢を云ふ)の法を定む、丁(二十歳より六十歳に至る者なり)中(十六歳より二十歳に至る者を云ふ)の民は、田一頃(百畝なり)を給へ、篤疾(大病ある者なり)なる者は十の六を減し、寡妻妾(夫のおき者)は七を減し、皆十の二を以て世業となし、十の八を口分人頭割あり)となし丁一人毎に、歳々に租を納める粟二石なり、調は其土地の宜しき所の產物を出し、綾絹絁布を納ざれば、歳々に役すると二十日なり、役を勤めざれば、其備賃を收むる、一日よ布三尺あり、國に事ありて、二十五日、役を勤むるときは、其調をくこと)蟲霜(蟲霜等にて登らざることなり)おりて十分の四以上を損するときは、租を收むるを免し、十分の六以上を損するときは、課(租調あり)役ともに免すなり、民の資業(資產あり)九等(上中下の三等とし又各〳〵上中下に分つ、百戶の家を以て、里とおし、里五つを以て鄉となし、四軒の家を以て隣とおし、隣即ち四軒の家四つあるを保とおす、城邑に在る者を坊と云ひ、田野に在る者を村と云ふ、食祿(朝廷に事へて知行を受くる者)の家い、民庶と共に利益を爭ふことを得ざらしめたり、工商雜類(雜類は俳優の類あり)おどは、

士の伍に預つかるとおく男、女の始て生るゝを黃(黃雀を借りて小兒にたとふ)と云ひ、四歳を小と云ひ、十六歳の者を中と云ひ、二十歳の者を丁と云ひ、六十歳の者を、老と云ふ、毎歳に(計帳年貢の勘定帳)を造りて、三歳ごとに戸籍を造る、○唐の初て晉陽に起るは、皆世民と云ふ者の謀ごとあり、帝は世民を以て儲嗣とあさんと欲しけるに世民は固く辭りて儲嗣とあるとを止めたり、太子の建成と云ふ者は、酒を飲女に淫りて畋をなすとを喜み、齊王の元吉は過失多くして、而して、世民は獨功名、日々に盛なり、建成は乃はち元吉と與に謀を協せて、世民を傾け倒さんとして、意を曲て諸くの妃嬪に諂い事へしかど、世民のみは心を正しくして獨妃嬪等に諂い事へるとはあさりけり、是に由りて、左右の者は皆建成と元吉の二人を譽め立てゝ、世民をば短りたりとなん、○武徳九年六月に太白(星の名)天を經り、秦の分野に見る、建成元吉の兄弟は、世民を殺さんと欲す、秦國の府の僚屬玄齡、如晦と云へる者等は秦王に勸めて周公の事(周公の事は管叔蔡叔の二人を殺したるとあり)を行なはしめんとして、力て請願ひしかば乃ち秦王は建成元吉の二人を殺すとを決したり、是に於て、密に奏上るやう、兄弟(建成元吉を云ふ)ハ專に臣等を殺さんと欲するあり、恰も世充建徳二人が讐を報ゆる如しと、明日、兵士を帥みて、玄武門に兵を伏せ置きければ、建成元吉の二人は入り來り、事の起るを覺りて還らんと欲しけるに、世民は追て建成を射殺

し、尉遲敬徳と云ふ者は、元吉を射殺して、遂に世民を立てゝ太子となし、軍國の事(軍國の事は政治あり)は悉く太子の世民に委ねて處決をなさしめ、然る後に聞奏るとにおしたりける、初め東宮(太子のとあり)官屬の魏徵と云ふ者ありて、屢〳〵建成に勸めて、世民を除かしむ、是に於て、世民は魏徵を召びて責るに、兄弟の間を離すやうな事をおしたると問しも、魏徵は擧止自若して、對へて少しも屈し恐れざりければ、世民は魏徵を禮し厚く遇なしたり、王珪と云ふものも亦嘗て建成の爲に謀しとありしかば、皆諫議太夫と云ふ官とおなし、帝ゝ自ら太上皇帝と稱し、詔を下して、太子世民に位を傳へたり、是を太宗文武皇帝と稱ふ

(太宗文武皇帝)名ハ世民と云ふ、幼日に、書生あり世民を見て曰へるやう、龍鳳の姿(龍や鳳凰の姿とて貴き人相あるを云ふ)天日の表なり(日光かゝやく如く威光のあるを云ふ)成長して其年冠に幾くなりおゝ、必らず能く世の中の事を濟ひなして、民の心を安ぜんと、書生去りたり、高祖神堯皇帝ゝ、人を遣りて、書生を追かけしむるれども、遂に見當らず、乃ち高祖皇帝ゝ書生の曰ひし言の世を濟ひ、民を安するの世の字と民の字を採り、世民と名づけしとなん、世民年十八にして、義兵を擧起たり、ときに、李密と云ふ者ありて唐に降參し、初めて高祖皇帝に見えしに、尚傲慢たる色をなし、秦王に見ゆるに及びても敢て仰ぎ見ず、退

きて而して歎美して曰へるやう、眞に英たる主なりと、高祖皇帝い、秦王の功高かりしより特に天策上將と云ふ官を置き、王公たるもの〻上に位して秦王の世民を以て其官になし、府を開きて屬の者を置き、また館（修文館と云ふ學問所なり後に弘文館と改めたり）を開きて以て、文學ある士を延入たり、杜如晦、房玄齡、虞世南、褚亮、姚志廉、李玄道、蔡允恭、薛元敬、顏相時、蘇最、于志寧、蘇世長、薛收、李守素、陸德明、孔頴達、盖文達、許敬宗、（以上八名）等の人を以て文學館の學士となし、三番に分ちて、日毎に更る〳〵直宿をなさしめたり、秦王の世民い暇日あるときい輙ち、館中に至りて、文籍を討論て、或ときい夜分に至るともありけるとかや、閻立本と云ふ者をして八々の像を圖しめ、褚亮と云ふ者をして贊（ほめ言ぺなり）を書せしめて、十八人の學士と號ひたり、士太夫の其選まれて十八人の中に預る者を指して時人い之を登瀛洲と（瀛洲とい仙人の居る所にて常人の至がたきに喩て其選に預かる者を榮譽とすることなり）謂ひたりける、其時に府僚い多くい、外に補せられて州郡の官となる者多し、杜如晦も亦出て州の官となりしかど、玄齡の曰へるやう、餘人い惜むに足らざれども、杜如晦い王を佐けるの才智おり、大王にして四方を經營と欲せば、杜如晦に非ざるよりい、不可ありと、申上けるに秦王世民い卽ち奏上て杜如晦をぺ、止めて、帷幄（幕中にて太宗の近側に居なり）に參謀あさしめしかど、剖決をなすと水の流るゝ如く滯こ

ふりおく、玄齡の朝廷に入りて事を奏上る毎に、高祖皇帝の仰せらるゝやうは、房玄齡い吾兒の爲に事を謀するとい、千里の遠道を隔て離るとも雖とも、面を對せて語るが如し、秦王世民い功おりて天下の人皆之を稱贊に至るも玄齡、如晦等に賴りて其輔けを得ざりければ、身も危きに幾きとも多くおりしおらんと、策を決じ是に至りて位に卽く、首に當りて宮女二千餘人を放し還したり、〇突厥の頡利突利の二可汗（夷の酋の名）十餘万の騎兵を合せて寇し來り、進み入りて、渭水便橋（便橋とは長安城西頭の門を便門と云ふ、橋は門と正面に對ふ故に便橋と言ふなり）の北に至る上は自ら房玄齡等六人の騎兵と徑に渭水と云ふ川の上に詣りて、頡利などの夷と水を隔として語りけるに、驚きて皆馬を下り、羅びて拜禮をおしたりける、ときしも俄に諸軍勢の繼至るや、旗や甲は野を蔽ふ程の多かりければ、突厥頡利は懼れ、盟を受けて、兵を引き退けたり、〇弘文館を置て、四部二十餘万卷の書物を聚め、天下に文學ある士虞世南等云へるものを選み擧て本官を以て學士の役目を兼しめ、朝廷にて政を聽くの隙には、虞世南等の學士を內殿に引き入れて、前世の人の謂殘せし言や或は行ひたる事蹟を講論て、政事の得失を商權し、或は夜分にまで至りて止むともありたりとなん、三品（位の名）以上の者の子孫を取り擧て弘文館の學士に充てられたり、〇或時に書を上まつりて俟臣を去り退けんと請ひけるも

のあり、曰へるやう、願はくは陽り怒られて、以て之を試み玉へ、固く理を執り屈らざる者は眞直なる臣あり、威光を畏れて假令非理なりと知りて、旨にのみ順ふ者は心の佞たる臣と云ふべきあり、上の曰らるゝやう、吾自ら詐りの事をなす、如何して臣下の眞直あるとどもを責尋らるべきぞや、朕の方に至誠の道を以て天下を治めんと欲しけるに、或は法を重して盜を禁ぜんと請ひ願ふ者ありしかども、上の曰せらるやうゝ、世の中の者にして奢をなすを止め、費用を省き、徭(租稅あり)を輕くし賦(賦役あり)を薄くして廉吏(心の正直の役人なり)を選み用ひて、民をして衣服より食料に至るまで餘りありて充用ならしむるときゝ、自ら盜賊あどおさゝるに至るべきなり、安んぞ法のみを重するを用ゐるに足らざるなり、是より數年の後ゝ路に遺たる品ありとも民皆不自由なければ拾ひとる者もなく、また旅する商人も宿屋に泊を頼まずして野宿するも盜賊の憂なきに至りしどなん、上ゝ嘗て曰せあるやう、君たるものゝ國に依て立ち、國あるものゝ民に依りて保とを得る者なり、故に民を刻めて、上に奉じむるゝ、猶身の肉を割切て以て腹に充るとと同じとにて、腹ゝ一ぱいにおりて飽足るも其れが爲めに身ゝ斃るゝに至るゝ目前のことあり、假へ君ゝ富て饒あるとも民を刻しめしならゞ國の亡ぶるに至るゝ必然たる事なり、又嘗て上ゝ侍臣に語りて仰せらるゝやう、西域の(夷の居る地)胡に賈ありて美き珠を得るものあり、身を割て其美き珠を藏るゝと聞しが實にありしことどもなり、凡そ吏たる者賄(賄ゝ財を以て法を枉るなり)を受け、國の法を枉げて自ら法ある罪を被ると、帝王たる者奢をなし慾にのみ心をかたむけて、國を亡すものあるとは、如何にも此の愚ある胡が大切なる身を割きて珠を藏すの笑ふべきと異りし事ゝあらざぞや、魏徵の曰ひけるに昔し魯の國の王哀公ゝ孔子と云ふ聖人に謂ひ語るに人ありて善く忘るゝ者あり、或時に宅を徙して而して其妻のある所を忘れたりと、孔子又曰へるに、之より一層甚しき者あり、往昔殷の世に桀紂と云ふ天子あり、民を刻しめ國を亡すは其身天子たるの大義名分の重んすべき、を忘れたるものあり(是れ其甚たしきものと云ふへしと)○張蘊古と云ふ者あり、大寶(天子の位なり、箴(戒ふの辭あり)を作り、献つり曰へるやう、一人にて天下を治るも天下を以て一人に奉るとは出來ぬなり、又曰へるに九重(九重は楚の辭ばに出づ關門、遠郊門、近郊門、城門、皇門、庫門、雉門、應門、路門あり)を壯に造り立つるも、居る所は膝を容るの些細あるに過ぎず、彼の昏にして知らざる、桀紂の如き者は其臺を瑤にて鏤め其室を璃にて飾り造り、八珍の美味を前に羅ぬるとも食ふ所は僅に口に適ふに過ぎざるべきあり、唯狂れて念ふ所おきを如何せん、糟もて丘をおすも、また酒にて池をおすの、(酒の池を作り糟の丘をつくる等の事は桀紂の天子のとき、奢りを極めたる故事也)奢を極むるも沒ゝ(悶昧のかたち)として、物の

理の分ちざる如き昏きに居る勿れ、察察（明白なる貌ちあり）として、事物の是非を辨別て餘り善く明らかならざること、望ましけれ、晃旒（天子の冠なり、前後に五色糸にて五色の玉を　とうして垂るゝものなり）の目を蔽ふありとも、形なきに視主纊（黄は黄色なるもの纊は新らしき綿なり耳の傍に垂れて外の事を聽ざるになすあり）の耳を塞くありとも聲なきに聽べしと上は其言を嘉られける、〇（天下國中なり）を分ちて十道とおし、山川の形や土地の便利に因りて關内、河南、河東、河北、山南、隴右、淮南、江南、劍南、嶺南に分ちたり、大將を遣りて、梁師都と云ふ者を討しに、其梁師都の手下のものは之を殺して以て降參なしける、因りて其地を以て夏州と名づけたり、〇大常（官の名）祖孝孫と云ふ壽唐の雅樂（音樂あり）を奏す、〇貞觀二年より又宮女三千餘人を出したり、〇故事（故におしたる政事を云）は軍國の事い中書舍人（官名なり）の各々見る所の事を起草て、其名を署すを五花判事（五花い五采光華の義なり）判事い花字の事を云ふ）と謂ふ、中書侍郎（官名）中書令（官名）の者い之を省審て給事中（官名）黄門侍郎（官名）の者い之を駁正なり、上い王珪と云ふ者に曰られけるに國家に於本中書門下（官名）を置きて相以に諮察をおさしめしかバ、卿が曹雷同（人の言ふ事に附きて和するを云ふ）する勿れと、其時王珪と云ふ者侍中（官名）たり、房玄齡杜如晦と云ふ二人い僕射（官名）たり、魏徵い秘書監（官名）にて、朝廷の政事に預りける、玄齡と云ふ者い能事を謀りしが必らず曰へるに、杜如晦に非ざるよりい事を決むると能いず、杜如晦の至るに及んでい、卒に玄齡の謀を用ひたりけるとあん、蓋し房玄齡と云ふ者い善く斷をなすもの故、玄齡と如晦と二人にて心同くして國の事に力を徇すより、唐世にありて賢き相を稱賛ときい、杜如晦房玄齡の二人を指すあり、魏徵と云ふ者嘗て上に告あげて曰へるやう、願わくい臣にい良臣とおらしめよ、臣にして忠臣おらしむる勿れと、上の仰られけるに、忠臣と良臣とい異たるかと、魏徵の曰へるに、往昔稷、契、皐陶（四人い舜の臣いなり）い君と臣と共に心を協せて尊榮を受けたり、之れ謂はゆる良臣なり、龍逢、比干（殷の紂王の臣あり）の二人い面折（目の前にて諫るを言ふ）廷爭（朝廷にて諫めと、申し上けれバ上い悦びられたりけり、〇初突厥（夷の名）い既に强くして勅勒の諸郡落い分散にありたり、薛延陀、回紇等云へる十五の部落ありて皆磧北の地に居りたり、突厥の頡利と云ふ者は政亂れて治らず、薛延陀、回紇等の部落の者は之に叛爲すものあり、これに加ふるに、民は飢て大いに困しみ、羊馬等多く死しければ、命せを奉て使者するもの還へり來たり、尚ほ又國邊を守る帥も申し上るやう、此の時こそ突厥は討取る可きの狀なりけると、詔を李靖に下して李靖を以て定襄道行軍總管（官名）と云ふ官となし、諸軍勢を

統て突厥を討しむ、李靖は突厥を陰山に襲撃なして攻破りたり、頡利可汗などの夷は戰かはずして遁走しる、唐將は頡利可汗を生擒にし、以て獻まつる時に突利可汗は先きに已に朝廷に參勤してありける、上は突厥の降參したる衆くのものどもを、東の方幽州より西の方靈州に至るの地に居らしめたり、また突利の領地を分ちて四州となし、頡利の領地を分ちて六州になし、左の方には定襄都督と云ふ宦の者を置き、右の方には雲中都督と云ふ宦の者を置きて各々に、其衆の者どもを統て領をなさしむ、突利は順州の都督と云へる宦に頡利を右衞大將軍と云ふ宦になしたりける、○伊吾(夷の名)來りて降參したりしかば、因りて伊西州を置き立てける、○高昌と云ふ地の王麴文泰も朝廷に來りて參內したり、○是より先に四夷どもの君長は闕に至たりて、帝をして天可汗(夷の君長の名)とあらんことを請ひ願ひたり、上の仰せられけるに、吾は太唐の天子なり、又下りて天可汗の事を行ひなすべけんやと、群くの臣どもより四夷に至るまで皆な打ち喜こびて萬歲と稱ひたりける、是れより後に璽書(璽は天子の印なり書は即はち詔のことなり)を西北の君長に賜ひ下さる、皆な因りて天可汗と稱ふ、○貞觀四年、蔡州の公杜如晦と云ふもの卒したり、上ハ如晦の卒したることを語りてハ涕を流して惜まれしとなん、○是歲大に年ありとて五穀ハ豐に稔りける、上の初めて位に即かるゝ時平常群の臣と語られるやうハ、民をして敎へ善き道に化せしむることハ國に大亂のありたる後にもまだ治め行に難き事もあるべきかと、魏徵と云ふ者對へて曰へるやう饑たるものハ如何昧なき食物なりとも食するものなり、渴たるものハ、また如何なる水にても飲むもの故に之らの者に食物も與ふる如く撫育ひしならハ、善き道に入りて自然に化するハ容易きことならずや、封德彝と云ふものゝ曰へるやう、三代(夏殷周の三代)以還、人々ハ漸々と澆訛(人情がうすきこと)になりける、故に秦の始皇帝と云ふ天子ハ法律を重くして民に背くものあるときハ、重き刑に處して民を懼れしめ、國を治めたり、漢の天子ハ國を治むるに、諸國に將軍を置きて天下を治めしが、蓋是等ハ民を治めんとして能く治むること能はず、豈にかして天下を治めんとしたれどもまた能く治むるを欲せざるものにやありけん、魏徵と云ふものまた曰へるやう五帝(少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜)三王(夏の禹王、殷の湯王、周の武王なり)とて往古の天子にて天下を能く治むるものあり皆之らの天下を治めし道を聞くに何れも民に敎るの道ハ全きものにして自然に民を善き道に引き入るゝことを得たりとかや、湯武(殷の湯王周の武王)と云ふもやはり古の天子なりしが皆天下の大に亂たる後を襲ぎ承け、民を治むるに心を刻めしより遂に天下をして泰平に歸すことを得たりとなん、唯だ天下を治むるハ、帝たる道を行ひなば帝たり、王たるの道を行ひ天下を治るに至りて民に安心を致さしむれば王となりたるの道を行ひしものと云ふべきなり、帝となり王となるも、吾天下を治るの政

事は如何にせば、能く民をして安心ならしむるとを得るやを顧りみるこそ肝要なりと、上は卒に魏徴の云ひし言に從がはれたりける、元年、關中と云ふ處は飢饉にして斗（斗とは今の四合三勺八撮餘あり）米の直は絹一匹に當る程に騰貴あり、二年、にまた天下の諸州は五穀に蝗が付きて登ず、三年に大なる洪水ありければ、上は勤めて民どもの難儀を撫ひて、玉ひむかば三年の久しき民の嗟き怨むるものあるを聞ざりける、是に至て天下の諸州は五穀等よく稔て、米の直は大に下落ありて一斗三四錢になりたり、終歲に罪を犯して死刑の斷いを受くるもの纔に十九人なり、東の方は海に至り、南の方は五嶺の地に至るまで、天下は實に善く治まりて盜賊などの憂おき故に、家の戸は外より閉めてたゝ風塵を拒ぐのみあり、また行旅するものは、糧を齎ずして、都給を行く道路にて得るやうに至れり、上の仰せられけるに魏徴は我に勸めて民を仁むの義を行はしめたり、今や民に仁を施したるの效あるに至れり、惜きとは封德彝に此の天下の安穩にありたるを見せずして封德彝の早く死するは歎くに餘りあることどもなりける、封德彝と云ふものは蓋し元年六月に死するものなり、○五年に梯邑新羅等の國々より貢を以て朝廷に來りける、○黨項（西羌の別種あり）より內附するものあり、其地を開きて十六州と爲す、○七年、春、玄武門に酒宴をなして七德九功の舞（七德とは暴を禁じ、兵を戢め、大を保ち、功らを定め、民を安んじ、衆を和げ、財を豐にする是なり○九功い六府三事の功なり、を奏す）魏徴い止をして、武の事を偃めて、文學を修むるとを欲し、宴に侍りて、七德の舞を見る毎に、輒ち魏徴い首を俛して視向きもせず、となん、七德の舞なる者い、秦王の陣を打ち破りし曲の舞なり、九功の舞を見るときい則ちこれを諦視るとかや、王珪と云ふ官になりたりける、○上い親ら囚徒を錄べて死刑に處すべきものを見て閔に思はれ、縱して各々吾家に歸らしめ、來年の秋に期りて、死刑に就るべきを云ひ渡されける、仍りて天下の死刑に處すべき囚い皆縱して家に歸し遣りかねて期したる來年の秋に來りて京師に詣れとの勅を下されけれバ、皆其四人等い期の如く、自ら朝堂に詣りて其罪を受くるを期けれバ、止い皆其四人を赦し玉ふ、三百九十人あり、○上い大上皇を奉げて、未央宮と云ふ殿にて置酒をなされける、其時上皇い顏利可汗に命じて起て舞をなさしめ、馮智戴（南蠻の酋なり）ゐ詩を詠せ上皇い笑ひて仰せらるゝやう、胡（顏利のとなり）越（馮智戴のとなり）の者と一家の如く和合したるとい古より未だなきとなり、○八年吐蕃國より使者を遣して貢を朝廷に入れたり、○九年大上皇崩御なり玉ふ、上皇い位に卽き九年にして、位を禪玉いる、是に至りて九年あり、○吐谷渾と云ふ者あり是より先涼州に入りて寇しけれバ、李靖と云ふものをして諸軍勢を帥あ、これを討破りたり、○十年、吐谷渾い吾子を遣

して朝廷に入りて侍へしむ、○治書、侍御史（官名）權萬紀と云ふ者言上げるに宣饒と云ふ地より銀の發ると大あり之れを採ば歳々に數百萬の銀を得べきあり、上は仰られけるに、卿は未だ一人の賢才ものも朝廷に進め出さずして、專ら、銀を得るの利のみを言ふ、昔堯舜（天子の名）は黄金を巍嵓の山に棄て、珠玉を五湖の川に捐て、淫邪たる欲心を杜き、珠玉を寶とせずして、其身を寶とするを示されたり、また漢の世の桓帝靈帝と云へる二人の天子は諸官の俸祿を減して贖を貨物となし、錢を聚めて私藏とあしたり、卿權萬紀は、桓帝靈帝のあしたる事を以て吾を俟らはんとするかとて、權萬紀をば斷けられしとなん、○府兵を定むる、凡そ十道に府を置こと六百三十四にして關内は二百六十一あり、皆諸衛（左右羽林、龍武、神武、天子の親兵なり）と東宮の六率（左右衛率、宗衛率、監門率あり）に隷屬がふ、上府の兵は凡そ千二百人、中府の兵は千人、下府の兵は八百人なり、三百人を以て團となし、團に校尉（大將なり）あり、五十人を隊となし、隊に正と云ふ者領あり、十人を以て火となし、火に長あり、一人毎に兵甲、粮裝等各自ら備へて、其數あり、之を兵庫に輸置き征に行ときに之を給し、二十歳にして兵とあり、六十歳にして兵を免さる、又能く駒りて射る者を越騎（其兵の勁勇して能く超越を云ふ）となし、其餘を步兵となす、更に統軍とて軍の事を統る者と別將とて別に大將の官を命して、折衝、果毅都尉と名付け、毎年の季に各折衝都尉の官の者は兵を帥て以て戰の事を教へ、馬を給へ騎兵とある者には官より其直金を與へられたり、京師に宿衛する兵は番上相勤る事にして、兵部（兵事の事を宰どる役所なり）より、土地の遠近を以て、其番を給ふ、遠地者は勤ること少なく、近き地の者は數々勤む、然れども皆二月に於して更番るとあり、○十二年、夏旱す、上い五品以上の政事を見るに貞觀年中の初めに比ぶれば、やうと、仰られければ、魏徵の言へるやう陛下の政事漸々と終に至りて其初の如くになし克ざるもの十條ありける、上い深く其言を嘉して政事を奬めて數美られたりとあん、○十四年、上は國子監（大學校なり）に至りて、親ら孔子を釋奠ふ、是時大に天下の名高き儒者を徵し出して學官となし、上い數々國子監に幸きし玉ひて之に經書（禮記春秋周禮儀禮等の書あり）を講論せしめられたり、國子監の學生にして、一部の經書以上を明かに其意義を解するもの、皆官と補るを得せしむ、學舍千二百間を增して築き立て學生を增して、三千二百六十人に滿ちたり、屯衛飛騎（何れも天子左右を衛るの官なり）の武官より、亦博士を給ひて經書を授しむ、能く經書の意義に通じて明かおる者は、貢擧（國〳〵より貢とて學生に擧らるとあり）とあるを聽さる、是に於て四方の學者京師に雲集るもの多く、乃ち高麗、百濟、新羅、高昌、吐蕃の諸酋長の子弟に至るまで皆國子監に入らんと請ひ願ふ者ありて、講筵に昇る者八千餘人に至る、上い卽說多門（先生〳〵て

其說のまち〳〵になると)章句(訓註と云ふ如きなり)ハ繁雜あるを以て、孔穎達と云ふ者に命じて諸の儒者(と顏師古、司馬才章王琰等の人なり)五經と云ふ書冊の疏(注疏とて水の流れ通る如くに其意を解き通すを云ふを、定めしむ、之を正義と謂ふなり、○高昌王の麴文泰と云ふ者是より先に多く西域より出す所の貢を遏絕(途中にて遏絕つことなり)して、中國の人を拘留置きたりしかば、侯君集と云ふ者を以て、交河大總管と云ふ官となし、兵を將ひて之れを擊しむ、是に至りて高昌を滅し其領地を以て西州と名づけたり、○十五年、吐蕃より婚姻をなさんことを求む、文成公主(太宗の女なり)を以て之に嫁りをなさしめける、○十七年、鄭公の魏徵と云ふもの卒したりける、上の仰せらるゝやう、銅を以て鏡となせしならば、人の形容を見て、衣裝や冠を正しくするを得べし、古の事跡を以て鏡となせしならば、國の興て盛なると、國の替れて衰へたるを見る可し、人の行爲を以て、鏡となせしならば、得失を見るべきなり、魏徵が死して朕は一鏡を失したると同じ、魏徵を葬るときに上は自ら碑文を製りて、石に書れたり、功ある臣の長孫無忌、趙郡王孝恭、杜如晦、魏徵、房玄齡、高士廉、尉遲敬德、李靖、蕭瑀、段志玄、劉弘基、屈突通、殷開山、柴紹、長孫順德、張亮、侯君集、張公瑾、程知節、虞世南、劉世會、唐儉、李勣、秦叔寶等の人〳〵の圖を凌烟閣と云ふ殿に畫かしめたり、○太子の承乾と云ふものは不才ものにして、魏王の泰と云ふ者は多能多く寵いりなり、而して魏王の泰は我多能を負にして潛に嫡とならんとの志を懷けり、侯君集も亦我功のあるを負にして怨望とあり、太子たる承乾の暗劣なるを幸とし、其釁に乘入らんとして承乾に反をなさんことを勸めしかど、其謀し事は覺れ官を廢られて、庶人となる、侯君集もまた連坐にて誅さる、泰と云ふ者も險詐たる故に立ちて太子なること能はず、晉王の治と云ふ者を立てゝ、太子となしたりける、魏徵は嘗侯君集を薦擧しかば因りて、上は始魏徵も阿黨すると疑がはれ玉ふ、又魏徵は自ら前後二度の諫を言上るときに其辭を書きて、起居郎の官の褚遂良に示したりと言ものありければ、上は愈〳〵悅び玉はず、魏徵が終するときに、上は公主となるものを面指て、魏徵の子叔玉を妻はさんと欲することを仰せられける、是に至りて其婚姻をなすことも停めて、前に上の自ら立てられたる魏徵の碑をも踣されける、○十八年に上は親ら高麗國を征伐し玉ふ、是より先、高麗に泉(姓なり)蓋蘇文と云ふ者ありて其主を弑しける、新羅國も又使を遣て言やう、高麗は百濟と兵を連ねて、新羅國より、貢ものを入るゝの路を絕斷ことを謀しかば兵をして投援あらんと乞願ふ、上は遂に之を討て先洛陽に至られたり、○十九年、上は洛陽を發玉ふて、定州に至り、諸軍勢を進めて遼水(川の名)を渡りて遼東城を拔取り、白巖城を降參なさしめて、安市城を攻め大に救の兵を城下に打破る、然かれども安市城は險岨に據り、兵は精れて勇し守りをなすこと堅か

りとして、攻落こと能はず、兵事を議る者の申すやうは、烏骨城を抜取り鴨緑水（河の名）を渡りて直に平壌ある都を攻取りて、其本根を覆へしければ、則ち餘の者は、戦はずして降参すべしと、或は又謂へるに、天子の親ら征伐し玉ふとは、諸将と異なり、危ふきに乗入るべきにおらず、上は遼左と云ふ所は早く寒くありて、草も枯れ、水も凍りて、兵士も馬も久しく留まり居るとの難くして、且兵粮も盡かゝりたるを見て、猶ほ下し玉ひて、師を引班しける、是度の征伐に行玉ふや、城を抜取る、十戸口徙す、七萬を三度大なる戦ひをなして、首を斬ると四萬餘級あり、然るに戦士の死する者幾三千人、戦馬の死する者十に七八なりけれゝ此の戦の功を成す能はざるを悔玉ひ、上い歎きて仰らるゝやう、魏徴と云ふ者若し今日に生存しおらば、我にして、此戦に行の労いわらざるなりとて、命せ付て、驛を馳て、魏徴を祠に少牢を以てし、復前に踣したる所の魏徴の碑を立てられける、〇二十年、上い瀼州に如あり、李世勣を遣りて、薛延陀と云ふ者を撃破り勅勒と云へる部落に勅して招き寄せしむ、回紇等十一姓、各使者を遣りて、命せに歸きて、官司を置かんことを乞ひ願ひける、詔して、曰せあるやう、朕い聊偏師（一方の大将あり）に命て頡利を逐ひ攘にし、始めて廟略を（廟堂にて天下を治る策略なり）定め已に薛延陀を滅し鐵勒（勅勒あり）の百萬餘戸の者い州郡とならんとを請ひ願ふ、混元（混沌として未だ分らざる大古を云ふ）より以來殊て前聞せざるとともなり、宜しく禮儀を備へ廟に告て以て天下に頒示（分つてしめすとあり）すべし、上い詩を作りて

して逃去りしとあん、〇上い崩御なり玉ふる、上い位に在すこと二十四年、改元する者一貞觀と云ふ、上い武功（いくさの功らを云ふ）を以て禍亂を治め定めらると雖ども、終に文德（學問の德なり）を以て海内を綏められける、上い常に自ら驕り侈ることい懼るべきありとて、嘗て曰せあるやう、人主たる者い惟一心に攻る者衆きものなり、或い勇力者あり詔諛する者あり、姦く詐はる者あり、嗜欲者ありて、輻湊り各々其身の爲に、自ら售て立身せんとを謀る、人主たる者少しく懈たりて、其謀の一を受しならバ、國の危亡ことい之より隨つて起る、此人主の守に難き所あり、嘗て侍臣に問ひあるやう、創業（天下を治めて王の業を始めるを云ふ）と守成（天下治まりて再び騷の起らぬやうに守りを成を云ふ）とい孰が難かしきとありと仰せられけれバ、房玄齡い對て申し上るやう、草昧（天下の亂れたるを云ふ）の初め、群くの雄れし者並び起り、力の強きを角べて戰爭の各所に起るを治めて、後に臣となすは難し、魏徵の曰すやうは、古しより帝王たる者創業の艱難よりして天下を治むるも後に至りて安逸（おちついてしたいまゝ）と云ふとも失なふ者多きものあり、故に守成は難し、上は房玄齡、魏徵二人の言を聞玉ふて曰あるやう、房玄齡は吾と共に天下を治るの勞をなして、百たび死するの戰爭の中をぬけ出て一生を得たる者なり、故に創業の難きを知る、また魏徵は吾と共に天下を安し常に驕奢より富貴を生じ、禍亂は忽にするところより生ずるを恐る、故に守成の難を知る者あり、然かれども創業の難きとはもはや過往きたり守成の難きは今日にあり、方に諸公と之を愼み玉はんと曰ありけり、上い自ら神采（才華の美發たるを云ふ）あるい臣下に畏れをなさしむるを知りて、常に顏色を温にし群臣に接て、人を導ひき諫をなさしめ、諫むる者賞めて之を來らしむ、惟末年に東征（東の方高麗を打ちし役さあり）の役のみい褚遂良と云ふ者あり嘗より諫めしかと聽玉はず、こゝに於いて太子立て帝ある。是を高宗皇帝と稱ふ、（高宗皇帝）名い治と云ふ、毋公い長孫皇后なり、承乾と云ふ太子の廢せらるゝときに、長孫無忌は力て太宗（先帝あり）に勸めて、治を立てい太子となしたり、東宮（太子のとなり）にいまし玉ふ七年、太宗帝は嘗帝の靴とあるべきことを十二ケ篇に作りて賜ひ仰せあるやう、身を修め、國を治むるとは、盡くに其十二篇の中に在り、一旦朕不諱も更に言遺すとあしと、是に至りて、位に即玉ふ、長孫無忌褚遂良の二人い先の帝の遺詔を受けて政を輔く、李勣と云ふ者を左僕射と云ふ官となし、尋て、司空と云ふ官になりたり、〇永徽五年、太宗皇帝の才人（女官なり）武氏と云ふ者を昭儀（女官の名）とおしける、〇六年に上い皇后の王氏を廢て昭儀の武氏を立ゝ皇后となさんと欲つせらる、許敬宗、李義府の二人いこれを贊成したり、褚遂良と云ふ者可ざりしかバ、依りて李勣に問ひ玉へる、李勣の言上やうい、

后を立る等れ陛下の家事あり、何ぞ必すしも外人に問ふべきとおらすや、遂に昭儀の武氏を后に立るとに決したり、是に於て褚遂良い官を貶さる、李義府と云ふ者い參知政事と云ふ官に在りこの義府と云ふ者い貌がらい温恭あるやうあれども、人と嬉怡て交り語るに狡險くして忌克(人の才能を忌て妄に殘なふを云ふ)ありけれバ、世の人は笑ふ中にも刀の如きものあり、また柔和にして人を害おふ、故に之を李猫(容貌は柔私おるやうなれども内實には狹がしくして猫の如く故に李義府に喩へて云ふおり)の云ふ武氏と云ふ后は長孫無忌の己を助ざるを深く怨みて、顯慶四年に無忌の官を削て、黔州に安置たり、褚遂良と云ふ者先たつ一年にして卒せり、此に至りて無忌と初め議したる者柳奭、韓瑤と云ふ者は皆殺されける、○乾封四年に、上は泰山に封りして毫州に至り老君(老子を指す)を尊びて太上玄元皇帝と云ふ、○李勣を以て、遼東大總管(官の名)とおして高麗を伐しむ、○總章元年、李勣は高麗の都平壤を抜取りて、其王を降參せしめ、高麗悉く平きたり、依りて高麗に安東都護府と云官府を置き立てたり、○上元元年に、帝は天皇と稱し、后は天后と稱したり、○初め帝は賄き妾劉氏の子忠と云ふ者を太子とおす、武后は之を廢て、我子の弘を立て太子とおせしが、弘と云ふ者は仁ありて孝行深く、朝廷の中も世間の人も心を屬しけれども武后の意に忤ひしとどもあるより、之を鴆し、其次の子の賢と云ふ者を立しが又事を以てべ反を

謀るの罪をつけて之を廢して其次子の哲と云ふ者を立て、太子となしたり、○上は一位に在して改元する者十二、永徽。顯慶。龍朔。麟徳。乾封。總章。咸亨。上元。儀鳳。永隆。開耀。永淳。弘道と云ふ、凡そ二十四年にして政事中宮に在ること二十年あり、褚遂良等の八が死してより後は群臣にして敢て諫むる者おく、李善感と云ふ者あり、君事に因りて一そたび諫めしとおりしは、八ゝは鳳凰が山東の地にて鳴くと云ひて、褚遂良等の臣が卒してより後は群臣に諫むる者挙なるに喩へて鳳凰の朝陽に鳴くに比しとて稱賛けるとおん、上は崩御にあり玉ふ、太子の哲は立ちて帝位に即く、是れを中宗皇帝と稱ふ、(中宗皇帝)初めの名は顯と云ひ、後に改めて哲と云ふ、既に位に即て韋妃を立てゝ后とおし、改元して、嗣聖と云ふ、明年に武后は帝を廢て、廬陵王となりて、而して、其弟の旦を立て帝とおす、旦帝の位に即て廬器を擁するとと云ふは天子の位に居ると名のみにして政事に預からぬとおり)者七年にして、改元し垂拱と云ひ、永昌と云ふ、太后はまた旦を廢し、皇嗣となし、太后は自ら帝と稱す、是を則天武氏と云ふ、○則天武氏は、故の荊州の都督(官の名)たる武士彠の女おり、太原と云ふ處の人にして年十四、其容貌の美しきを太宗聞し召して、後の宮とおせしとなん、貞觀十一年に才人(女官の名)とおる、其時に天下の歌曲を武媚娘と名づく、已に識を成す、(世間に媚娘と云ふ歌曲がはやりて、其れがあんに武

し(武媚と號す)が天子になると云ふ前兆になりしと云ふことなり)貞觀の末に太白(星の名)屢〻畫見えたりける、太史(天文を見る官なり)は占ひて云へるやう、女の主が盛になるならん、又秘密の記(未來記なり)を傳ふ、中に唐三世の後は女主の武王が代りて天下を有つことなるべしと云ひあれば、太宗は之を惡み玉ひける、嘗て太宗は群の臣下と宴しけるときに、各の臣に小名(幼少の時の名)を言はしめたり、武衞將軍(官名)李君羨と云ふ者は官稱も封邑も皆武の字あり、而かるに小名は五娘と云ふ、太宗は愕きて仰せあるやう、何物の女子か、乃ち爾に健ことぞ、或ひと、奏聞けるに、李君羨と云る者不軌を謀ると、遂に李君羨を誅す密に太史の李淳風に問ひ玉ひける、淳風對へて言上るやう、臣仰ぎ天象を觀、俯して曆數を察するに、其人は已に陛下の宮の中にあり、三十年を過ずして、當に天下に王となり、而して唐の子孫を殺して殆と盡すに至るべし、其兆し已にや成、太宗皇帝崩御になり玉ふ、ときに方人は年二十二にして尼となり、寺に幸きし之を見て泣く、時に王皇后と蕭淑妃と、寵を爭ふて、密に方人に髮を長さしめ、高宗に勸めて、之を宮に納しむ、既に入り后は淑妃(蕭夫人なり)と共に寵を失なひたり、武氏は年三十二、遂に昭儀(女官の名)より后となる、王皇后、蕭淑妃は皆殺されたり、武后の父武士彠に周國公の爵を贈り、太原王を加へたり、高宗皇帝は風眩(風疾にて眩ひするなり)に苦しみて、百司より奉事とを視玉ふ能

はず、時に或は皇后に政事の決斷をなさしめらる、后は性つき事物に明かに敏く、文史を涉獵られて、事を處分するに、皆帝の旨に稱ふ、是に由りて、政事は后に委られたり、故に后の權は人主と侔じけるとなん、世人之れを二聖とて帝と后とは聖たる者と謂ふ、后は高崇皇帝の御世に、自子の弘を殺し、子の賢と云ふ者を廢し、高宗の崩御し玉ふや既に子の哲をして位に卽しめ、又廢して、廬陵王となし、而して子の旦を立てゝ帝位に卽しめ、后は朝廷に臨みて、制を稱し(制を稱すとは天子になり替りて政事をとるとなり)武氏の七廟とて天子の外には出來ぬ七の廟を作りける、英國公の李敬業と云ふ者兵を起したり、因りて之を討平らげしむ、檄に曰へるやう、一杯の土未だ乾かずとて高宗崩御し玉ふて塟りし墓の土のまだ乾く間もなきに、六尺なる孤は安くに在べき、又曰せあるやう、試に今日の域中の成行を見よ、是誰が家の天下ぞ、(周氏の天下か李氏の天下か分らぬを云ふ)太后は將を遣りて擊て李敬業を殺したり、越王の貞と云ふ者も亦兵を擧起して天下を匡し復さんとしけるに、克たずして死したり、太后は遂に唐の宗室の者を大に殺し、自ら名を曌と改め、皇帝と稱して、國號を周と云ひ、旦と云ふ者を以て、皇嗣となし、姓を武と改めける、時に武曌は年六十七なり、初め武曌は僧侶の懷義と云ふ者を寵愛し、後に至りて、張易之、張昌宗の兄弟を寵し、張易之を五郎(五男なり)張昌宗を六郎と云ひたり、佞者ありて曰へるやう、六郎昌宗は顏の美

しきとゝ蓮の花に似たりと云ふ人ありけるが、吾が謂ふに蓮の花の方却つて六郎昌宗の顔に似たるなりと、武曌ゝ人心の服がはざるを知り、且吾が内行の正しからずして、世の人己れを譏る者あるを畏れ、盛に密事を告申し出る門を開きて、酷き吏の侯思止、索元禮、周興、來俊臣、吉頊等の各人を用ゐ、深文ある吏をして人を罪に入ゝことを鍛錬し其罪となるとゝ少しなりとも遂にゝ之を刑に羅織やうになさしめ、大率反逆の罪を以て人を誣(なき罪をかぶせるなり)誅殺とゝ、紀し勝きれぬほどなり、之等の事を用ゐて天下の人を拑しめ、自由を制しける、然かれども、權數とて謀やむなく算用ありてまた善く人を用ゆるの道を得たるより、賢くして才智ある者も之が爲に其用事を爲すを樂しみたり、徐有功と云ふ者ゝ仁慈深くして善く法度を取り用ひ、武曌も毎に意を屈して徐有功の云ふ言に從がふこと多くありけるとなん、大將宰相たる者ゝ其人の才智に任じ魏元忠、婁師德、狄仁傑、姚元崇等の人々ゝ皆名高き宰相にして、宗璟と云ふ者も亦朝廷に在りて名を顯はせしものなり、婁師德と云ふ者ゝ心寛く仁義に厚く行ひ愼みありて、假令や人をして犯ありとも、更に心に挾けざるものなり、弟あり代州の刺史(官名)に除せらる、時に師德謂へるやう兄弟の家ゝ榮えて天子に寵愛を過るほどに受けたるゝ人々の疾む所なり、何を以て、自ら其禍ひを免れん、弟の曰へるやう、今より、人其面に唾をなすも、之を拭去るのみ、師德ゝ愀然(憂ひ顔をするを云ふ)として、曰

ひけるに、此吾憂とする所以なり、人汝の面に唾せゞ汝を怒るなり、而して之を拭去らゞ、則はち其意に逆ふて其怒を重ぬべきことどもなり、唾ゝ拭ひ去らずとも、自ら乾くべしとて、當に笑ふて唾を受ること人に却て畏懼を懷しむるものぞかし、師德は毎〳〵狄仁傑と云ふ者を薦め擧て、而して仁傑は毎に師德を毀りたり、武曌は仁傑に語て曰へるやう、朕の卿を用ゐるは師德の薦め擧る所なり、仁傑は嘆て曰へるに、婁公(師德を尊稱して云ふ)は德の盛ものなるは我知らざれども師德の爲に容らるゝ久し、武承嗣、三思の二人は太子とならんを種々に營して望み求めける、仁傑は從容て武曌に言ひけるやう、太宗は櫛風沐雨(風雨もいとはぬ艱難苦勞なり)の艱難苦勞して、親ら鋒鏑の危き所を冒し、以て天下を定め之を子孫に傳ふ、太帝(高宗皇帝の謚なり)は盧陵王と皇嗣の旦との二子を以て陛下に托む、今に至りて乃ち之を他の族に移さんと欲せば、天の意に忤なきに非ざるべきなり、姑姪と母子と孰が親しきも、陛下は子を立てしならば、則ち千秋萬歳の後(千秋万歳の後とは死して後と云ふことなり)太廟に配食(天子と一所にまつること)せん、姪を立しならは則ち未だ姪は天子となりて、而して姑を廟に祔合せ祭ることなり)する者あるを聞ず、武曌は稍悟りたるにやありけん、已にして又力めて之を勸めければ、遂に盧陵王を房州より、還へらしめ、都に迎へて、立てゝ皇太子となし、子の旦を以て相王となしたり、是より狄仁傑は最も信じ重ぜらる、仁

傑は好みて、惡きことあれば面あたり折きおどし、朝廷にて議論をなしける故、武曌は常に屈從がひ、稱して國老となし而して名をば呼ばさりける、仁傑卒して武曌は泣き嘆きたり、元行冲と云ふ者博學にして多く物事の理に通じければ、仁傑は之を重ず、行冲は規諫多し白明公の門には、珍しき味物が澤山なり、(善き官員の多くあるを云ふ)請ひ願はくハ、藥物の末に備らんと、(珍味が澤山なれバ病の起る者故藥を進ずること我を等外の官にてもしてもらふと云ふことなり)申せバ仁傑笑つて曰るやう、吾藥籠の中にある物ハ何ぞ一日だもなかるべからざるなり、(汝ちハ吾藥籠の中へ入れておく品物で一日片時もなくてハならぬものなり)姚元等數十人ハ、皆仁傑の薦め擧た所の人なり、或人の曰へるに、天下の桃李(才能ある人にたとふなり)悉く公の門に集る、仁傑の曰るやう、賢き人を朝廷に薦め出すハ國家の爲めにして、私の爲になすに非ざるなり、武曌ハ嘗仁傑に問ひ云へるやう、一人の佳き士を得て之を朝廷に用ゐんと欲すと、仁傑ハ對へて申すやう、張柬之と云ふ者あり老人なれども、宰相たるの才能あり、願くハ之を用ひられんと後竟に柬之を用ゐて宰相となしたりける、武曌ハ疾に寢されて、甚だ重き容躰なり、張柬之ハ崔玄暉敬暉、桓彥範、袁恕巳などの人ゝと、羽林將軍(官名天子親兵の將軍なり)李多祚と兵を擧て國內の亂を起したるものを討破り太子を東宮に迎へ入て、關門を斬て闕に入り、易之昌宗の、二人を廡の下に斬殺し武曌をハ上陽宮に遷し尊號を上つりて、則天大聖皇帝と稱したり、是年の冬に至り年八十二にして殂れ玉ひたり、唐の名を易て周と爲したる間十有六年にして、改元するもの十なり、天授、如意、長壽、延載、萬歲通天、神功聖曆、久視、大足、長安と云ふ、長安の五年、帝ハ復び位に即かれて國號を唐とし、僅に二月にして廢せられ、均州に居ること一年、房州に居ること十三年なり、還り玉ひて太子たること又八年にして、後に正に反る(正に反るハ再び天子の位にかへるを云ふ)韋氏と云ふ者復び皇后なり玉ふ、上ハ房陵郡に在せしとき、毎に自殺せんと欲せられければ、后ハ毎ゝ之を止られたり、上ハ后ともに私に誓玉ひて曰せあるに、異時至り、幸にして復天日を見る(天日を見るとハ元の通に天子の位に即くと云ふことなり)ハ惟ゝ我欲ふ所ろにして心に禁へられぬことともなり、是に至り朝廷は臨玉ふ毎に、后ハ必ず帷幔を施し殿上に坐御て、朝政を預り聞玉ひける、恰も高宗皇帝の世に武皇后の朝廷に臨玉ひたるが如し、上の女に安樂公主と云ふ者ありて、武三思の子崇訓に適したり、武三思ハ是を以て、宮禁に出入することを得たり、武三思ハ韋皇后と竟に密通なせしかど、韋后と三思を雙陸し、上ハ爲に骰の黠して勝負を籌べらる、上ハ遂に三思と政事を圖議するに至りて、張柬之等の者ハ皆制を受けたり、五人(柬之、玄暉、敬暉、彥範、恕己の五人なり)ハ皆王の爵を賜ひて而して、朝政に預ることを罷められける、已にして官を貶して遠地に遣りて、

之を殺せしとなり、安樂公主等の者い勢威に依て事を誅り請謁などに賄を受て、墨勅(天子の玉璽のすはらぬみことのりのとおり)を降し官を除けたり、其勅を降ずに斜に封して中書省の官員に付す、時に之を斜封官と謂ふ、其官職を受くる者凡そ數千人なり、或人皇后い淫亂おりと言上る者ありけれバ、上い之を朝廷に召出して、面前にて詰けるに、其人抗言て不撓ざりけるに、中書令(官の名)宗楚客と云ふ者制を矯りて之を撲殺す、上い意に快快思ひ玉はず、后も其黨の者も懼れたり、馬秦客、楊均などの人〳〵い、皆皇后に幸るゝ者ありしかども、淫事の世間に泄聞ゆるを恐しとおん、安樂公主も亦后に朝廷に臨みて、己を以て皇太女とおらんとを欲ひたり、乃ち相與に謀して、餅の餡の中に毒を入れ上に進む、上は位に復し改元そる者二つ神龍、景龍と云ふ、景龍四年にして、弑されける、温王の重茂(中宗の第四子おり)を立てゝ、后は政ごとを攝おこなひたり、相王の子隆基と云ふ者兵を起し國亂を討破り、后と安樂公主とを斬り、是を睿宗皇帝と稱す、旦を奉じて、立てゝ帝とおす、是を睿宗皇帝と稱す、

(睿宗 皇帝)名は旦と云ふ、初め高宗の崩御玉ふとき、中宗皇帝は廢せられ、武氏后は旦を立てゝ帝となす者七年なり、而して、旦又廢せられて、周の皇嗣たること九年、改めて、相王に封たてられ、居ること十年にして、是に至り復帝となる、隆基を立てゝ太子とおし、宗璟、姚

元之の二人は政を爲し行ふに心を協せ、弊惡ある政事を改め、忠良を朝廷に進て不肖を退ぞけて、功あるものを賞し、罪ある者を罰するに、公平の處分を盡し、請托に賂いなどを納る、ことども行はれず、朝廷の紀綱は修擧て當時人心は翕然たり、祝欽明等の官を貶しけるや、欽明は嘗て八風の舞(舞の名にして、諸〳〵の淫醜ある態を備へたる者あり)をなせしに或人の曰へるやう、五經地を掃ふとて、欽明は儒者の行なしと譏たり、〇帝の妹太平公主と云ふ者は二張(張易之張宗の二人を指す)を誅し韋皇后を誅すの時に有力し者にして既や屢大功を立てられたれば勢ありて尊重れければ、上は嘗政を議なされしが、權威は人主を傾ける程の勢あり其公主の門に出入して賂などを納〻者は市の如く多く集まりたりしが、太子の英て武を憚りて之を易んと欲せらる、韋安石、宋璟張說、姚元之などの各人は上の意を感悟に賴りて、政事は皆太子の處分を取用ゐける、上い復び帝位に卽に及んで、改元する者二つ景雲、太極と云ふ、是に至りて三年、自ら太上皇と稱て位を〻太子に傳

玉ひたり、是を玄宗皇帝と稱ふ、

(玄宗 皇帝)名い隆基と云ふ、初め臨淄王とおる、韋氏皇后の亂を作せしとき、陰に才智ありて、勇士を聚め、密かに國の禍亂を匡正して舊業に復さんと誅りける、太宗い初め驍勇を選びて百人の騎兵となし、武后い增し千人の騎兵となして、左右羽林に隷從がはしめたるが、

中宗皇帝之を萬騎と謂ひて使を置きて之を領せしむ、隆基の皆厚く其豪傑に交を結て韋皇后を誅し睿宗を奉じたり、隆基の封られて、平王となる、睿宗皇帝の將に儲副を建てんとせられける、嫡長子の成器と云ふものの平王の、功あるを以て、力て之に讓る、平王の遂に太子とあり、尋て位を禪受けたり、○開元元年に高力士と云ふもの右監門將軍（天子の右の方の御門奉行あり）とありて、内侍省（宦官の役所）の事を知らしむ、初め太宗の制を定め立、内侍省に三品官を置かざりける、黄衣（宦官の賤者衣服）廩食（倉米をもらふもの）の者ありて、傳命するのみあり、是に至りて、三品將軍に除する者甚多ありて、宦官の者增して三千人の多に至る、内侍の盛なるの此の時より始りしとおん、○二年太常（禮樂のことを司る官あり）の俗樂（舞子俳優を云ふ）を併典するとにありたり、○二年太常（禮樂のことを司る官あり）の俗樂（舞子俳優を云ふ）を併典するとの服を殿の前に焚棄てたり、○興慶宮を作り、樓を置き建て、西の方を花萼相輝と曰ひ、南の方を、勤政務本と云ふ、宋王成器など云ふ者の宅の其側を環りて作り建てける、○三年に盧懷慎と云ふ者黄門監とて官官の取締役とある、盧懷慎心清潔にして謹み深く、儉約にして質素なり、故を以て妻子の饑たり寒たりするとを免れざるのみか、居る所の家も亦破れて風や雨を蔽と能わず、姚崇と云ふ者嘗かた謁告と十餘日なり、政事の委へ積ありても、懷

愼之を決くと能わざりしかば、姚崇朝廷に出、須臾くにして、この委積なりたる政事を裁決して盡しける、姚崇の顧みて齊幹と云ふ者に謂へるやう、吾宰相たるの事を行ふの如何あるものじや、齊幹の對へけるに、時の政事を救ふの宰相と謂ふ可しとて、懷愼の吾才力の姚崇に及ざるを知りて、何ごとにも、姚崇に推讓る、時に懷愼の宰相たるの役目をあさざる姚崇の相手にあるのみにして、恰も食事に相伴あると同じきありとて、伴食宰相と謂ひ心となん、○四年に姚崇の官を罷たり、宗璟代りて黄門監とある、宗璟の宰相となりて、人を擇むとを務めければ、百官の各〻其職に任ひ、好みて帝の怒顔をも犯して正諫ける、上の甚だ之を敬ひ憚る、璟の姚崇と相繼て政を爲すに、姚崇の善く機に臨みて變に應ずるの才あり、宗璟の善く文を守ると固くして、志操の同じからざるも、一人の心を協せ天子を輔佐て、厭役を寛にして公平あり、刑罰の清潔にして省あり、百姓の自然に富を致して人やゝ庶るに至るべし、唐の世にありて、房玄齡杜如晦を稱ひ、後にの姚崇宋璟を稱ふ、他に此等の人に比る者の未あらざるべきなり、姚崇宗璟の二人が朝廷に入りて進見するとあらば、上の輒ちこの二人の者の爲めに起玉ひ、去るときにの則ち軒の下まで臨みて、之を送られける、○八年に宋璟の役を罷らる、○九年に、宇文融と云ふ者あり言へるやう、天下の戸口の逃て家を移す者あり、巧に僞をなして戸籍の數あらざ

る者甚だ多し、請願くハ撿べて其括をあさんと、同平章事(官名)源乾曜と云ふ者之を賛成しけれバ、融を勧農使(官名)となし、奏上て勧農判官(官名)十人を置、天下よ手分して行遣し、競て刻急き事をなしけるに州縣に至るまで、其風を受けて、人民ハ之に労みて騒擾をあし、百姓の之に苦しむとハ實に云ひ盡す能ハざるなり、〇同三品(官名)張説と云ふ者、議論を建て、壮き士を石募りしに、旬日あらざるにして精兵十三万を得たり、因りて諸衛府に分ち隷て更番上下せしむ、兵と農との區分ハ此より始しと云ふ、〇十三年、長上宿衛を更め命けて彍騎と云ふ、彍騎とハ掘強ある者にして強弩をひく騎兵のとなり、〇二十一年、韓休と云ふ者同平章事とある、韓休は人となり、鯁直にして、上ハ時に或ハ宴遊し少しく過たるときハ、輒ち左右に曰あるやう、韓休ハ之を知りたるや、否との言の云終るに、諫の疏ハ已に至る、左右の者の云ひけるに、韓休と云ふ者宰相となりて、より、陛下ハ殊に舊から見ると大に痩玉ひたり、上ハ嘆美曰せらるゝやうハ、吾ハ瘠たりとも、天下ハ肥たるあらん、韓休ハ官を罷られ、張九齢之に繼て宰相となる、〇二十二年、又張九齢と云ふ者中書令となり、李林甫ハ同三品となりたり、李林甫ハ、柔和にして人に佞るとを務め、狡數多く、深く官官及び妃嬪の家に交を結び出入りして、上の動静を伺ひ、故を以て、一つとして知らざるものなし、是に由りて奏對ごとに、常に旨に稱ふ、〇二十四年、幽州の節度使(官名)張

守珪と云ふ者敗軍の大將安祿山と云ふ者を執へて、京師に送る、張九齢ハ批難して曰ふやう、張守珪をして、軍の令づが若し行ハれしなれバ、安祿山ハ、死を免すべきものにあらず、上ハ其才能と勇氣とを惜みて之を赦し玉ひける、張九齢ハ力て爭ふて曰へるやうハ、安祿山ハ反をなすの相あり、誅さゞれバ、後に必ず患ひあすべきなり、上の曰せらるゝに卿ハ王夷甫と云ふ者石勒が奇志の聲視あるを知りて、人を遣り之れを收へんとせしに已よ石勒ハ逃去けるの、故あるを見て、枉ても忠良も害さんとする勿れとて、竟に安祿山を赦して誅さざりしとなん、祿山は、本營州の雜邑の胡なり、初の名を阿犖山と云ふ、母ハ再び安延偃に適したり、故に其姓を昌して安氏と云ふ、營州の部落の破れて散々に逃來る者あり狡黠にして張守珪に愛せらる、又史窄干と云ふ者あり、安祿山と里閈を同ふして、亦驍勇ものなり、張守珪ハ史窄干を遣はして、朝廷に入りて、事を奏上しむるに、上ハ名を思明と賜ひける、〇千秋節(今の天長節と云ふ如し即ち天子の誕生日なり)に群臣皆寶鏡を獻つる、張九齢ハ前世の興て盛なりしとき、廢れて衰へし時の事を述て、千秋金鑑録と云ふ書物五巻を作りて之を上まつる、〇張九齢ハ官を罷められしかバ、李林甫代はりて、中書令を兼たり、上ハ位に在ること久しくして、漸〳〵に奢欲を肆まゝにせらるゝより、李林甫ハ遂よ政を專にするとを得たり、〇二十六年、に忠王を立てゝ太子となす、〇二十九年、安祿山を以て營州の都督と云

ふ官にありしたり、安祿山は、意を傾けて巧よ善く人に事ふ、上の左右の者よりも、平盧軍使たる祿山に皆厚く賂を贈る者は之を賞譽たりける、故を以て上は益々賢ものとなして信ぜられける、○天寶元年、に祿山を以て平盧城の節度使となす、○二年に祿山は朝廷に入りて天子に謁したり、○三年、年の字を改めて載の字となすと曰ふ、○祿山を以て、范陽の節度使を兼しむ、○四載に楊太眞を以て、貴妃となしたる、楊太眞は、故の蜀州の司兵(州を佐くるを掌どる)玄琰の女ありし、上の子壽王の妃となること、十年、上は其太眞の容貌の美しきを見玉ふて、其意を以て、女官とならんとを、請ひ願はしむ、且壽王の爲には別に娶入して、而して後に太眞を納れられける、遂に太眞は寵愛を獨にて專に受たりける、○六載に安祿山を以て、御吏大夫(丞相の副官なり)を兼しむ、祿山は請願ひて、楊貴妃の兒とならんと、九歲安祿山に爵を賜はりて東平郡王となし、河北道の採訪處知使(官名)を兼しむ、祿山の入朝するや、楊釗の兄弟は皆戲水(河の名)に徃て之を迎へける、楊釗と云ふ者楊貴妃の從祖兄なれば、宮中に出入するを得たり、是より先に判度使(勘定奉行なり)とあり、屢奏上るやう、祭藏には金や帛が充物にありたりと、上は群臣を帥みて之を觀玉ふ、是より、金帛を觀ること、糞土の如くに粗末にして、賞を賜はると限なく多く、楊釗に名を國忠と賜ひたり、○十載安祿山の爲に第を起し、華麗なるとは究極なく作りて、上は日々に諸楊(楊貴妃の親類を云ふ)を遣りて、之と遊しむ、祿山は體が肥太りてありければ、上は嘗祿山の肥太りたる腹を指て仰せあるやう、此胡(祿山のことあり)腹中何の有る所なり、祿山對へて申上るやうたゝ赤心あるのみあり、祿山の禁中に入るときい、先貴妃に拜す、上い其故を問玉ひければ、祿山の對ふるやう、胡の人い母を先にして而して父を後にするを以ての故なり、祿山の生れし日に、(小兒を負ふ衣なり)を爲りて、宮人に綵輿を以て之を舁がしめ、上い歡笑ふ聲を聞て、其故を問尋られける、左右の者い楊貴妃い祿兒を洗ふを以て對へたり、上い楊貴妃に浴兒の金銀錢を賜ひ、歡樂を盡して而して罷められける、是より祿山い宮掖に出入して通宵出ず、頗ぶる醜き聲の外に聞ゆるありて、上い聞知り玉ひしかども亦更に疑ひ玉わざりけるとなん、又祿山を以て河東節度使を兼しむ、李林甫い安祿山と語りけるとき、毎に安祿山の情を揣知りて先に之を言ひければ、祿山もまた毎に驚ろきて服ひける、祿山い林甫を見る毎に、盛冬にても、必ず汗を流せしとかや、祿山い林甫を謂て十郎と爲し、既に范陽に歸りしに、其下い長安より歸り來れば必ず、十郎林甫は如何あることを言しやと問尋ぬるのみにして、美言を得しおらば、則ち喜び、或人の言ふに但安大夫に語るは須からく好く吾行狀を黙檢見るべきおり、即ち曰へるやう、噫、我い必らず罪を得て死すべきとおらん、○十一載李林甫卒

したり、林甫い上の左右の者に嬲ひ事へて、上の意を迎合し(迎合いほどよく調子を合するなり)て寵愛を固くし、人の上に言上るの路を杜絶て上をして世の中の事物を聰もし明もしたるを掩蔽しける、林甫い嘗諸御史に語て曰へるやう、御仗ひく馬を見たるか、一たび鳴けば即ち斥去るとて、政事むきの事にても少しく意見がましき言を云ひしならい、即ち官を斥けらるゝと云ふに喩て畏懼しめしとおん、賢き者を妬み、才能ある者を嫉みて、己より勝れたる者は排のけて抑へ付たり、林甫の性つきい陰險(心の中に惡るたくみのあるを云ふ)なり、人々の言へるやう、林甫は口に蜜ありとて、善く言廻し、腹に劍有りとて、心の中に大惡ありと、毎夜偃月堂に獨坐して、深く思ふ所あるは、明日必ず、誅に陷して殺すことあるなり、また屢大獄を起し(大事件のさんみごと仕出來すなり)太子たる者より以下の者は皆林甫を畏れける、林甫い相の位にあること十九年、天下の亂を養成しかども、上は少しも悟玉はず、然るに安祿山は林甫の術數あるを畏る、故に其世を終る迄(林甫の死するを云ふ)敢へ反んせざるなり、是歳に國忠と云ふ者宰相となり、安祿山い必ず反することを言上て曰へるやう、試みに祿山を召玉へと必ず來らざるあり、〇十三載安祿山い召さるゝことを聞て卽ち至る、上は是より國忠の言をば信じ玉はずして、祿山に左僕射の官を加へて歸らしめける、〇十四載安祿山い蕃將(胡人の將となりし者)を以て漢將(漢人の將となる者)に代らんことを請ひ願ひしかども、猶疑がひ玉はず、上表を以て馬三千匹を獻らんと請願ふ、馬一匹毎に二人にて轡を執り、二十二人の大將に部して河南に送らんと、上い始て之を疑ひ、使者を遣りて、其祿山の馬を獻つることを止められける、安祿山は牀に踞りて拜をおさずして曰へるやう、馬は獻つらざるも亦可ことあり、十月に至りおば當に京師に詣るべし、使者は還りしかども亦表を齎還らざりける、是冬、安祿山遂に反なして、我所部る所の兵と奚(匈奴の別種あり)契丹(東湖の種あり)の兵を發することと、凡十五万人なり、祿山は范陽を發し兵を引て南の方に至る、步兵も騎兵も精れて銳し、人馬の蹈立る烟塵が千里て、其勢ひ畏るゝばかりなり、時に承平久しくして、百姓は兵革の事は知らざりける、州縣の兵は敵の風を望みみて、瓦解に逃去りければ、祿山は機に乘じて、進て東京を陷しいれたり、〇平原の大守(官名)顔眞卿と云ふ者兵を起して、賊を討破ぶりしが、上は始め河北の地は賊に從ふと聞玉ふて歎きて曰せあるやう、二十四郡中曾て一人の義氣あるの士はおきやと、顔眞卿の奏上言の至るに及んで、上は大ひに喜びまた曰せあるやう朕が顔眞卿と云ふ者は何狀人なるを識らざりしに、乃ち能し此の如く義兵を擧たりと、〇常山の太守(官名)顔杲卿と云ふ者又兵を起し賊を討しに、河北の諸郡は皆之に應援たり、〇十五載祿山は天子の號を僭付けて、大燕皇帝と稱す、〇賊の大將たる史思明と云ふ者常山を陷入れ、顔杲卿を執へて、洛陽に送り

ければ、祿山は杲卿已に反くを數めたりしに、杲卿の曰へるやう、我は國の爲に賊を討ちたるあり、今日恨むところは唯汝を殺さゝるのみ、如何して反くと謂ふを得ざるあり、杲卿の云へるに臊羯狗とて臊さき牧羊や羯奴たる胡人祿山よ何ぞ速かに我を殺さゝる、祿山は大に怒り杲卿を縛りて咼するとて、身躰の肉を剔り剝の罪になしけるに、杲卿は死に至るまで祿山を罵りて口を絕ざりける、○眞源縣の令(官名)張巡と云ふ者吏と民庶とを帥ゐて、玄元皇帝の廟に至りて哭し兵を雍丘に起して、賊を討ちたり、○朔方郡の節度使(官名)郭子儀河北の數郡を復へし、副元帥の哥舒翰と云ふ者は賊と戰ふて、大に打破れ麾下の兵は哥舒翰を執へて、賊に降參したるより、賊は遂に關中に入りしかば、上は出奔て、馬嵬と云ふ處に次す(次は三宿以上を云ふ)將軍より兵士に至るまで飢疲れて、皆憤り怨み、楊國忠等の人を殺し、上に逼りて、楊貴妃をも縊殺し、然後に兵を發したれども、父老どもは、道を遮絕て、なほ止まるを願ひたり、上は太子に命じて之を慰め撫でけれども、父老は太子の馬を擁て復太子をして行ことを得ざらしむれば、太子は皇孫の俶と云ふ者をして、上に白あげけるに、上の曰せおるやう、天命なるべしと、太子に云ひ喩さとし、汝ち太子勉めて危難を脫して國家の爲に力を致すべし、西北の諸胡どもは、吾之を撫育おふこと、素より厚し、故に汝ち必ず、其

力を得べきなり、且つ旨を宣玉ひけるやう、位を太子に傳へんと欲す、太子は平涼郡に至るとき、朔方郡の留後(官名)杜鴻漸と云ふ者迎へて靈武郡に入りて、馬嵬の命(位を傳へんとの宣告なり)に遵はんことを請ひ願ふに隨ひ上を尊ひて上皇天帝と云ふ、上の位に在すこと四十五年にして、改元する者三先天、開元、天寶と曰ふ、太子立て帝となる是を肅宗皇帝と、(肅宗皇帝)初め名は璵と云ひ、後に改めて亨と云ふ、忠王より太子とある、二十年よして、而して安祿山の亂に遇ふ、是に至りて、位に卽き玉ふ、京兆郡の李泌と云ふもの幼少より才敏の名を聞く、上は東宮に在して、嘗て、李泌とは布衣の交り(布衣の交はり位あるとも位なきものゝ上下のへだてなく交はるを云ふ)をなしければ、使者を遣りて之を召玉ふ、李泌は靈武郡にて謁見をおして、事大小はすべて李泌と謀しける、上皇は成都に至りて、冊寶(天子の位に卽く冊と國を傳へる寶と云ふとなり)を遣送りて靈武に如しめらる、○使者を遣りて回紇より兵を徵さしむ、○招討節度使(官名)房琯と云ふ者賊と陳濤斜に戰ふ、房琯は車戰(牛馬二千乘を以て馬步之を夾むなり)と云ふ戰ひの法を以て大に之を敗りける、○至德二載に安慶緖と云ふ者祿山を殺したり、安祿山兵を起してより、以來目昏(眼病にて物をはつきり見るとのできぬなり)し、是に至りて、復物を見ざるに、又疽と云ふ腫物を病て、

躁暴の行ひのみ、祿山は嬖妾の子を以て慶緒に代りて嗣となさんと欲しける、慶緒は陰に八をして祿山を弑さしめ、而して自ら立ちて、祿山の後を襲ぎたり、祿山は天子の號を僭たること僅に一年餘あり、○上は鳳翔郡に至る、回紇は子の葉護を遣りて精たる兵四千人に將として至らしむ、天下兵馬都元帥(官名)廣平王たる俶と、副元帥郭子儀等は朔方郡及び回紇西域の衆の兵に將とありて、鳳翔郡を發し、長安に至り、賊を擊しに賊軍大に破れ潰へて、大軍は西京に入りたり、僞等の者は、留まりて鎭撫すること三日にして、軍を引き連て、東の方に出、洛陽に至り回紇と夾み擊て賊軍大に打敗れける、遂に東京をば復し、安慶緒は走りて逃て鄴の地を保ける、○賊將尹子奇と云ふ者睢陽を陷いる、張巡、許遠の二人は此役に死じたり、張巡は先に雍丘を守りて、軍を寧陵と云ふ地に移し、屢〳〵賊兵を擊ち破り、既にして而して睢陽に入り許遠と共に防き守り、屢〳〵賊を追ひ却ぞけしかど、兵食の盡たるより、或は城を棄て走らんと欲す、張巡と許遠と謀して曰へるやう、睢陽は江淮の保障の如く要害の地なり、若之を棄てゝ走りしならは、賊兵は必ず勢に乘して長驅まん、是江淮を棄てゝ、豈善く睢陽を守り賊兵を拒ぐこと能はざるなり、故に固く江淮を守りて以て救ひの兵の至るを待に如かざるべしと、茶や紙を食ひしおれども盡たり、遂に馬を食ふ、また馬も食ひ盡し、雀を羅罠を掘て之を食ひしかど又盡たり、張巡は吾愛たる妾を殺して以て士卒に食はしむ、四萬人の兵僅に餘るもの四百人あり、終に一人の叛く者おく、賊兵は城の塹に登りて、擊入りしかど、將より兵士に至るまで皆困病て戰ふと能はず、張巡は西に向て再拜して曰へるやう、臣は已に戰ふべき力は盡たり、生て以て陛下に報るの力おし、死して當に靈鬼(たゝりをなす死神あり)となりて、以て賊兵を殺すべしと言ひ終りて、城遂に陷ぬりければ、張巡、許遠の二人は執へられ、南霽雲、雷萬春等の三十六人は皆賊の爲に殺されける、○是歲に上皇は蜀郡を發して西京に還り玉ふ、○乾元元年、郭子儀等の九人の節度使に命じて、安慶緒を討しむ、○二年、史思明と云ふ者兵を引て安慶緒を救ふ、九節度、郭子儀等の兵は鄴にありて、潰れける、史思明は、安慶緒を殺して、范陽に還へりて、又僭りて天子と號ふ、○李光弼と云ふ者郭子儀に代りて、朔方郡の節度使、兵馬元帥とある、李光弼は號令が嚴かにし善く整ひ、光弼の始めて至りしとき、號令一たび施こしけるに、士卒壁壘より旗幟に至るまで、精きりと明かに皆變りける、後史明と戰ひて屢〳〵打敗りたり、○上元元年、太僕卿(內外の臣下を取締る官)李輔國と云ふ者上皇を西內に遷す、上皇は興慶宮を愛し蜀より歸り玉ひて卽ち之に居る、多くは樓に御して、父老の過ける者往々にて瞻むき拜し萬歲と呼ひける、上皇は常に樓の下にて、酒食を賜ひ下されたり、又嘗將軍郭英乂等を召て宴を賜ひしに、李輔國と云ふ者言ひけるに、上皇は興慶宮に在して日に外人と交通玉ふよ

り、陳玄禮、高力士等は天に不利ことを謀るなりとて、數〻上に啓あげて、上皇を遷さんとしけるに、許し玉はず、因りて上の不豫に乘入りて、衆の者を率ゐて、上皇を劫かし遂に遷しける、上皇は日に以て懌こび玉はず、葷きものを茹玉はず、又五穀をも避て食玉はずして、漸〻と疾をおしたりける、〇二年に史朝儀と云ふ者史思明を殺す、史明は少子を愛し、而して史朝儀を悪み朝儀の軍に敗れたるを以て之を斬らんと欲す、朝儀は、人に思明を射殺さしめ、而して自立したり、〇李光弼と云ふもの、大尉(官名)となりて、諸道の節度行營(ばりの陣屋なり)興平郡定國郡等の副元帥を兼ねしめ、復朔方郡に入る、〇上皇は西内にて崩御あり玉ふ、位を傳へて後七年、壽七十八なり、〇上は疾の床に寐され、上皇の登遐にあり玉ひしを聞し召して、轉々疾は劇て遂に崩御にあり玉ふ、位に在すこと七年、改元する者四、至徳、乾元、上元、寶應と云ふ、初め張皇后は李輔國と云ふ者と相表裏(相須て成立を云ふ)して權を用ひしかど、晩に至りて、更に隙あり(中のわるくある事)上の疾の篤しとき、張皇后は太子を召て謂せあるやう、李輔國は久しく、禁兵を典どりしより、陰に亂を作さんことを謀る、故に誅さゞるべきあり、太子は上の病躰を震驚するを恐れて可玉はず、輔國は我を誅すの謀を聞しとき、上は崩御にありけるを、因りて輔國は張皇后を殺して、後に太子を引立て、帝と爲す、是れを代宗皇帝と曰ふ、

(代宗皇帝)初め名は俶と云ふ、廣平王に封ぜられる、元帥となりて、兩京を定めける、楚王に封ぜられて、後に平王に改む、已にして、而して太子となり玉ひ、名を豫と改め、是に至りて位に即くや、李輔國を誅し雍王の适と云ふ者を以て天下兵馬元帥とおし、諸將と回紇等の救の兵を率ゐ、史朝儀を討て大に之を敗りける、賊將の李懷仙と云ふ者史朝儀を斬りて以て降參したり、賊將張志忠を以て成德軍(常山は號して成德軍と云ふ)を鎭しめ、姓名を李寶臣と賜ひ、薛嵩に相、衞、刑洺、貝磁等の州を鎭しめ、田承嗣と云ふ者をして、魏博、德、滄瀛等の州を鎭しめ、李懷仙には盧龍(幽州を云ふ)を鎭しむ、朝廷にては兵革の事を厭苦しみて、苟めにも、國内に事の無からんを冀ひ、因りて而して此の諸鎭の事を授けしあり、是より諸鎭は自から黨援ことをおして、河朔の地に敢て朝廷の命に坑ふ者なきに至りしは此の時より始まりけるとなん、〇廣德元年、吐蕃は我朝に入寇しけれぱ、上は陝州に出奔あし玉ひ、吐蕃は長安に入る、關内副元帥(官名)郭子儀と云ふ者吐蕃を擊しかば吐蕃は遁去りたり、〇二年、宦者(おくむきの官の者)の程元振を流罪になしたり、元振は初め李輔國に附きたりしに、輔國死し、元振權を專にして、自ら恣あること、尤も甚だし、また諸將の大功ある者をば忌みて皆之を殘害と欲し、吐蕃の入り來りて寇するや、元振は掩ひ蔽し、我權を恣まゝにするを誅し時あるを以て、奏上ずして、上に狼狽玉ふことを致したるありとて、朝廷

の中より外に至るまで元振の誅計を齒切して、遂に漆州に流罪になすに至りけり、○臨淮王李光弼と云ふ者卒したり、上の陝州に幸し玉ひしとき、李光弼を撫綏ずると是までよりも厚くありける、素李光弼は郭子儀と同じく名を得たるものなり、光弼は徐州に在るよ及びて、兵を擁て敢て朝廷に入らず、且塵下の諸大將も復尊び畏れざりければ、光弼い之を愧恨みて、遂に疾ひをなし、而して遂に死たりける、○永泰元年、平盧の將李懷玉と云ふ者節度使(官名)侯希逸と云ふ者を逐而して、自ら留後の官職を知りければ、詔のりし因て留後の官を授け、名を正己と賜ひたり、○叛したる大將の僕固懷恩と云ふ者回紇、吐蕃の兵を誘ひて入寇しければ、郭子儀を召して涇陽の地に屯せしめしに、懷恩は道にて死したり、回紇、吐蕃の二虜互に統帥たる者のおきより長とならんとを爭ひて睦しからず、郭子儀は、人を遣りて回紇に說諭して、共に吐蕃を擊たんと欲したりしが、是より先に懷恩い回紇を欺きて謂ひけるやう、郭子儀はもはや死せりと、子儀の使者至るとき、回紇信ぜずして曰へるに、郭公(郭子儀なり)をして在せしならば相見を得べきやと、使者還り報じければ、郭子儀は數騎と出で〻、人をして傳へ呼しめけるやう、令公(郭子儀時に中書令の官たり故に令公と云ふ)來れりと、回紇は大に驚きて藥葛羅の帥をして、弓や矢を執りて、陣の前に立しめたれば、郭子儀は自ら胄を免き、甲を釋て〻、回紇に好を示し進めば、諸酋長の者は相顧りみて曰へるやう、是ころ、郭子儀ありとて、皆馬を下りて、羅ひ拜しけれは、郭子儀も亦馬を下りて、回紇等の手を執りて相語り、酒を取り相與に盟約し、而して還りける、吐蕃は之を聞て大に、驚き夜遁たりしかど、諸軍は回紇と與に追て、大に吐蕃の兵を擊破りたり、○三年、幽州の將朱希彩と云ふ者李懷仙を殺す、詔し因りて、朱希彩を以て鎭の事を領なさしめける、○大曆元年、宦者魚朝恩を誅す、朝恩は肅宗皇帝の時にありて、嘗かた觀軍容使と云ふ官とあり、軍容と云ふ官の名は此の時より始まりしとあん、九節度たる者の相州の戰いに打敗れしは正に其時にあり、廣德の初年より、朝恩は天下觀軍容宣慰處置使(官名)とありて、專ら禁の兵を總て其權威の勢ひあるは朝も野も傾むける程なり、大曆の初め國子監(大學校の官の名)に陪判して、高座に升り、易經と云ふ書を講釋し、易の鼎卦にて鼎足を折公の餗を覆へすと云ふ段に至り、餗は食物なり、鼎への中にある食物を覆すとて、三公の位に居て其任に堪ざるに喩て、宰相を譏りければ、王璡は怒を含み、元載は怡然たり、是に於て朝恩の言へるやう、怒る者は人の常の情にて、笑ふ者は心底の如何を測知るべからざるなりと、朝廷の政事向にして朝恩の手に預らざる者あるときは、輒ち怒て曰へるやう、天下の事は、大小も我手に由らざるものあるべけんやと、上は聞玉ふて、懌びられず、元載は間を乘て其朝恩の專恣にして、法に軌ざるとを奏上げれば遂に朝恩を誅し

たりける、〇七年盧龍の將軍朱希彩を殺して、而して朱泚と云ふ者を以て、鎭を領おさしめ、後に詔して、其職を授けらる、〇九年、朱泚は弟の朱滔を以て鎭を領せしめ、而して、朱泚は入朝したり、〇十二年、元載と云ふ者不軌を謀ると告げ訴へる者あり、因りて元載を誅へ案問をおして、死を賜ひ、其家を籍沒(家財を沒收す)するに、胡椒(南海及び西戎諸國に產す)の多きこと百斛(斛は十升あり)に至る、他の物も是に稱ふて種々なる物品が實に夥きことどもなり、〇楊綰常袞の二人を以て、同平章事(官名)とす、楊綰と云ふ者は、素より淸淨にして、儉約なり、楊綰は常袞と二人の同平章事とあるの制が下りしとき、郭子儀と方に酒宴の坐中にておしける盛樂も五分の四を減したり、京兆の尹(官名)たる黎幹と云ふ者ありて騎從の者甚だ盛あり、即日に之を省き減して、止だ十人の騎兵を存すのみ、楊綰わ、宰相たること三月にして、卒したり、上は楊綰の早く卒したるを痛悼みて曰せあるやう、天命なるか、朕が太平を欲するに、何ぞ天の楊綰の生命を奪ふの速なるや、〇十四年、田承嗣と云ふ者卒したり、姪の田悅と云ふ者代りたり、〇淮西の將軍李希烈と云ふ者節度使を逐しかば、因りて詔して、鎭を以て、李希烈に授らる、〇上は位に在すこと十八年、改元する者二つ、廣德、永泰、大曆と云ふ、崩御になり玉ひて、太子の立て帝とある者是を德宗皇帝と云ふ、

(德宗皇帝)名は适と云ふ、雍王より、太子となりて、是に至り位に即き玉ふ、〇常袞と云ふ者上を欺罔たるとて、其官を貶さる、言こゝろは、郭子儀、朱泚の二人は宰相たり、然れども朝政に預らず、常袞獨り、朝堂に居て二人に代りて、名を署し奏上て、催祐甫と云ふ者の官を貶しける、上の問玉ふよう、催祐甫の罪は如何なるものぞ、二人は其罪に非ずして、初めより事の如何を知らざるを以て對へければ、上は常袞を以て欺罔とし玉ひけるとかや、催祐甫は同平章甫(官名)たり、催祐甫は時の人氣を收めんと欲し、未だ二百日ならざるに、官を除る八百人、上の曰せあるよう、卿の用ある所の者は多く親故に涉るなりと、謗る人ありけるは何故ぞや、祐甫對へて申上るやう、臣は陛下の爲に人を擇ふ、敢て愼まざるべからざるあり、親戚の者より、故舊の者に非ざるを擇び用ゆると能はざるべし、〇淄、靑(共に州名)の李正己と云ふ者あり、天の威光名望を畏れ、表上つりて、錢三十萬緡(緡は一とさしあり)を獻納りければ、催祐甫は請ひ願ひ、使者を遣りて、淄、靑州の將士を慰さめ勞り困りて、以てこの三十萬緡の錢を賜はんとなしたりける、李正己は之より更に慚入り感服して曰(いるよう、天下は以て太平無事とある今より、庶幾ひ望むべきことどもあり、〇上は方に精神を勵まし、世間の治安ならんとを求めれしかば、時に或ひは不次に人を用ひ玉ふ、祐甫は楊炎と云ふ者を薦め擧て、司馬(官名)よ

り、除つけられて、同平章事となる、既にして、而して、祐甫は病氣にありて、政事を視行はざるに至る、○建中元年、始めて兩稅の法とて、一年の春秋二度に稅を取立つるの法を作りたり、唐の初めて天下を治むるや、賦斂を收むるの法は、田地を有し者は、租を納め、身命ある者は庸くを務め、戶ある者は調を納むれども、玄宗帝の末に至りては、版籍が寖〻壞れて、至德年中(肅宗帝のとき)に兵は各所に起り立ち、所在より收むる賦斂などは追催趣して漸く辨を取り、復常に準とある者ありければ、下等の家にては、困弊に勝ずして、大率皆家を徙し或は逃るに至る、是に至り、楊炎と云ふもの朝廷に議を建まつりて、先州縣を治るに入用ある所の費と毎歲天子に上供ところの數とを計て、而して、人民に賦つけ、一年朝廷歲出の高を量りて歲入の制を立て、戶毎に土戶と客戶とを問ず、現在に住居する者を以て簿に編入、人は丁中(十六歲より二十歲までの者)とおし、其人の貧しきと、富かなるとを以て、差別をつけ、また行商をおす者は、州縣にて、三十分の一の稅を出さしめ、土地よ住居する所の民は秋と夏との兩度に稅を徵て、其租庸調より雜の徭等は悉〳〵く省きたりける、○崔祐甫卒す、○忠州の刺史(官名)劉晏と云ふ者を殺す、劉晏と云ふ者は善く金銀財貨の會計を治め、肅宗帝より代宗帝に至る、以來戶部、度支、鑄錢、鹽鐵、轉運等の事を領して、同平章事(官名)を以て戶部度支の二使に充られ、船を漕し車馬を運して、鹽を諸方に出し、朝廷に利益を輸轉百貨のものをし其價直を低昂するを制して、以て軍國の用を充足とよなし、久しく朝廷に在りて財利の權を典どりければ、衆の者どもは顚ぶる之を嫉み、又楊炎と劉晏とは互に睦しく、悅びて交はらざるに至て、劉晏は竟に忠州に宦を貶されたりける、衆の人々は楊炎の旨を希ひてより、劉晏は怨みに望と告上る者ありければ、上は人を遣りて、之を縊殺さしむ、○二年、成德の李寶臣と云ふ者卒したり、其子惟嶽代りて自ら軍務を領なしける、後に王武俊と云ふ者、惟嶽を斬りて、而して、之に代りたり、○楊炎と盧杞と二人の者は同平章事となる、楊炎は未だ幾ばくあらずして、其官を罷めたり、盧杞と云ふ者は、顏面が藍ざめて鬼色の如く、口先にて上手に辨論をおしけれども、上は盧杞を悅ばれける、○尙父(郭子儀の號なり、德宗帝は其功德あるを以て太公望に云ふ者に比して、此の尙父の號を玉ふ)大尉、中書令、汾陽、忠武王、郭子儀と云ふ者卒したり、郭子儀は朝廷に在りて天下を治めて安泰ならしめ、國の危きを救ひ保つこと三十年、其郭子儀の功は天下の蓋になりて、上は疑がひ玉はず、位は臣下たる者の最上を極めて、而して、衆の者は疾まざりける、嘗かた使者を遣て、魏博に至るとき、田承嗣と云ふ者西の方を望み、之を拜禮して曰へるやう、茲田承嗣の膝は人に屈ざること、久し、今郭公の爲に膝を屈て拜禮すと、郭子儀は中書令の官にありて、官吏の功績を校て、黜陟すること凡二十四考にして、我家より分れ出し者三千人に至り、八人の子と

七人の婿とも皆高位高官に上て其名を顯はす、諸孫數十人ありて、安否を問ふ毎に、盡く其誰なるを分辨ること能はずして、たゞ頷くのみなり、年八十三にして而して終したりける、○平盧郡の李正己と云ふ者卒したり、其子納代りて自ら鎭事を領いなしける、朱滔、田悅、王武俊、李納などの人々は或は先に或は後に至りて、皆反なしたりける、○三年、に朱滔、田悅、王武俊、李納の四人は皆自ら王と稱ふ、○李希烈と云ふ者反なしたり、○河北河南の兩地兵を用ひしに、府の庫は數月ならざるに、其費用を支へること能はずして、先富たる商の錢を撿べて萬緡を出す者は、其餘を借て、以て軍事の用に供へ、また諸道の稅を增し、四年に、稅間架とて、家屋の兩架を一間とし其間數に應じて上稅せしめ、また除陌錢とて、物を賣買するに、一緡一千錢の內賣買の兩人より五十錢ヅヽを除取り合せて百錢を官に收めしむるの法を立其軍費の不足に供へたりけるとなん、○李希烈と云ふ者襄城縣に寇しければ、詔して涇原等諸道の兵を發し之を救はしむ、涇原の節度使(官名)姚令言と云ふ者兵を將ゐて、京師を過しに、惟軍を犒ふ、糲食(あらき米の粗末なる食物)菜餤(麥粉にてつゝみたる餅なり)なりしかば、衆の兵士は怒て亂を作し城中に入る、上は畏れ玉ひて出奔したりける、亂兵は大尉の朱泚と云ふ者を奉じて、主となし、司農卿(官名)段秀實と云ふ者朱泚を誅すを謀りしかど克たず、朱泚は衆の士を召集めて、帝と稱することを議しけるに、秀實は朱泚の面に唾して耻しめしかば、秀實は大に罵り、笏を以て朱泚の額を擊ち、血は流れて地に濺く、朱泚は怒りて秀實を殺して、遂に僭りて大秦皇帝と號ふ、是より先術士に桑道茂と云ふ者ありて言へるやう、數年の後に至りて、宮を逃離るゝの災厄あらん、奉天郡に天子となるの氣象あり、宜しく其城を高壯に盛大ならしめ、非常の事に備ふべきなり、上は其言に從がひ玉ひける、是に至りて、遂に奉天郡に奔る、朱泚は奉天郡を犯す、李晟は兵を率ゐて、起き援けしむ、渾瑊と云ふもの朱泚を擊ちて、大に之を破りければ、奉天を取り圍みし兵は解き退ぞきける、李懷光と云ふ者も亦國難に赴きて、朱泚の兵を擊破りて奉天に至り入りて、盧杞の姦を白しあげんと欲す、盧杞は李懷光を隔てゝ入りて、上に見ゆることを得ずして、歸へり行る、遂に表も上まつりて、盧杞が罪惡を暴し白しあげければ、衆の議論喧ましく騰立ちて盧杞を咎むるもの多し、上しは己を得ずして、盧杞の官を貶して遠く新州の司馬となりたり、○興元元年、大赦とて天下の罪人を赦し玉ひける、陸贄と云ふ者上しに勸めて、已れ一人を罪し、以て天下の人民に謝せしむ、奉天に在して下す所ろの書詔は、驕たる將軍より、悍き兵卒に至るまで、皆感心し激み立ゝ、涙を揮さゞるものなし、王武俊、田悅、李納等の人々は表を上つりて、已れの罪を謝したりける、○李希烈と云ふ者、僭りて、大楚皇帝と號ふ、○上は瓊林、大盈の二大庫を行宮の庶下に置きて、諸道より、貢獻たる物を貯へけるに、陸贄は諫めて其庫に建

し榜を除去らしめたり、○李懐光は反を謀りけれは、上は梁州に奔り逃玉ひける、○魏博の田緒と云ふ者田悦を殺し、自ら、軍府を領したり、○李晟と云ふ者長安を克復し、朱泚は長安を棄て逃走る、朱泚の麾下の將軍、之を斬りて降參なしける、李晟の戰ひに勝し事を帛に記し、竿の上にかけて、衆人に示視せる所の露布は已に行在に至り、曰へるやう、臣李晟は宮禁をば肅ひ清めて、寢園に祇謁しけるに、鐘簴とて、廟の樂器なども亦賊の爲に穢されず其儘に飾りて以前の樣は移り易りたるともなくして、廟の貌は故の如く儼然としてありける、上は此の言を覽玉ひ涕を垂て曰せあるやう、天李晟と云ふ者を生みて以て社稷の爲にし、朕の爲にしたるにあらざるべきあり、○車駕は長安の都に還り玉ふ、○顏眞卿は李希烈の爲に殺さる、是より先盧杞は顏眞卿を害せんと欲し、朝廷に建議して曰へるやう眞卿は四方の信ずる所あり、若遣り諭せば、師の勞おりをなさずして定まるべし、乃ち眞卿を遣る故に盧杞の謀計に眞卿は陷入り、使命を受けて希烈の所に至りしに前の如く希烈に殺されしとあん、又人々の言へるやう、眞卿の殺さるゝは國家の元老を失なひし國家の羞をおすなりと、賊中に至り之を留むる二歳にして更に屈せず、竟に賊の爲に縊り殺されける、○貞元元年、盧杞は心を量り赦されて他所に移り、將に再び入らんとして卒したりける、○幽州の朱滔と云ふ者も亦卒す、○馬燧及び諸軍は河中（府中なり）を平ぐ、李懐光は縊れて死したり、○二年淮西

の將軍陳仙奇と云ふ者李希烈を殺し以て降參す、吳少誠と云ふ者また陳仙奇を殺す、朝廷には因りて吳少誠を以て鎭府を領おさしめける、○三年、張延賞と云ふもの、同平章事（官名）とある、是より先、吐蕃の尙結贊と云ふ者ありて、臨夏州に據る、李晟は嘗かた其一つの堡を擊ち破りしかば、渾瑊、馬燧おど云へる者は、各〻兵を擧て、李晟の軍よ抗はんとて臨みしかど、遂に懼れて、和睦を請願ひ、辭を卑くし禮物を厚くして馬燧に和睦をおさんとを求めければ、馬燧は之を信じて、朝廷に請ひしが、李晟の曰へるやう、夷狄どもの言は信じ難し、故に夷狄は擊に若かざるなり、ときに、延賞は李晟と隙ありて睦ましからず、延賞は數々和睦するとの便利なるを言ひて、渾瑊を遣り吐蕃と平涼に盟ひをなさしめける、吐蕃は盟ひをおすとき、兵を伏せ劫かして渾瑊を執へんとあせしかど、渾瑊遁走りて免るゝを得たり、吐蕃は、李晟、馬燧、渾瑊の三人を畏れて曰へるやう、此三人の者を除き去しならば、則ち唐は圖て擊ち克とを得べきなりと、是に於て、李晟をして離間することを謀り、馬燧に因り以て、和睦の盟ひを求め、渾瑊を執へ以て馬燧を賣し、渾瑊と併せて、罪を得せしめば、直に長安を犯んと欲るも亦易し然かるに、渾瑊を失おふに會て、而して其謀を止たりける、○李泌と云ふ者同平章事とある、上はときは李泌と從容て卽位以來の宰相の是非を論じて曰せあるや、人々は盧杞を姦邪なりと言ふ、然れども朕は殊更に姦邪なるを覺り知らず、李泌の對へ

て言へるやう、此れ陛下の姦邪あるを覺り知らざり玉ふは盧杞の姦邪あるを知り玉はゝ、豈して建中年中に杞の姦邪たるを知り玉はゝ、豈して建中年中に陛下の奉天に走り玉ふ如きの亂はおらざるべし、李泌は謀畧ありて、而して好て神仙の詭誕ばかり談し語りければ、竟に世の人に輕しめらるゝに至る、宰相とあり、三歳ならずして、卒したり、〇八年に、陸贄と云ふ者同平章事となる、〇九年に、大尉中書令(官名)西平忠武王たる李晟卒したり、〇十年、陸贄は同平章事の官を罷らる、〇十一年陸贄を忠州の別駕(知事の副官なり)に貶したり、陸贄は建中年中奉天に事ありし以來力を盡して主の威令を宣ること最多し、事あるに隨かひ議論して諫めて上まつり、凡百の奏聞を剴切にして、帝は前に十分言盡して諫め言を後に追ひ思ふて仇の如く怨み玉ふ、又た譖言を受けて貶せらる、初め夏縣の陽城と云ふ者處士(官に就かぬ士)を以て、徵出されて、諫議太夫となる、皆陽城の上品ある風采を想ひ望みける、陽城は職に在ること七年にして而して諫めしとなし、韓愈と云ふ者ありて、爭臣論とて臣下たる者の職分としてあすべき行ひを論議したる文章を作りて、陽城を譏りける、是に至り、判度支(官名)たる裴延齡と云ふ者陸贄を譖言しければ、陽城は諸諫官の者を率引て、闕を守り、裴延齡の姦邪にして佞人なるを論じ、陸贄の罪あきを議したり、時に朝夕悲延齡をして宰相とあさんとしけるに會ひ陽城の曰へるやう、脫延齡を以て宰相たらしめば、當に白麻とて天子の勅書を

も取りて打壞るべしと庭に出でゝ慟哭しければ、遂に裴延齡を宰相となすことを沮たりける、陽城は國子司業と云ふ官に左遷れ、後又道州の刺史に貶されたり、然れど陽城は民を治むるに吾家を治むる如く自ら行ひ勤むる方を考がへ、書て曰へるやう、民を撫字しむに心を勞めて、賦科を收むるの催促などに至りては我考かへ行ふ、政事の拙きは極下等の又下等と云ふべきなり、〇十四年、淮西の吳少誠と云ふ者叛を謀る、〇二十一年上は崩御になり、玉ふ在位すこと二十七年、改元する者三つ、建中、興元、貞元と曰ふ、初め政事清廉明白ある者二歳なり、盧杞用ゐられてより、叛亂相繼ぎて起り、末年に至りては、姑息なるのみ、太子立ちて、帝となり玉ふ、是を順宗皇帝と稱ふ、(順宗皇帝)名は誦と云ふ、太子たりしとき、書を善くする者王伾、棋を善くする者王叔文と云ふ者あり、二人の者は俱に宮中に出入して、娛みの侍にありける、或とき、太子の曰せるやう、某の者は宰相とし某の者は大將とすべしと、異日に至りて其人を用ゐるを幸ふて、密かに學士の韋執誼及び、朝廷の士にして、名望あり速かに其官の昇進を求むる者の陸淳、呂温、李景儉、韓曄、韓泰、陳諫、柳宗元、劉禹錫等に深く相結びて、定て死友(其人の爲めならば一命でもすてると云ふ深き交はりあり)となし、日日相與に合處て游びしかど、何をなせしか蹤跡が秘密にして更に其端倪をも知る者なしとかや、德宗帝崩御になり玉ふて、太子は位

に即玉ひしが是より先に風疾ありて、音が出ざること、五閲月なり、因りて王伾、王叔文等は朝廷にて政事を執行ひける、○陸贄、陽城の二人を追召玉ひて使者を遣りて京師に赴かしめしかど、未だ使者の京師に至らさるに卒したり、○上は位に在して改元し永貞と曰ふ、僅に八月にして、自ら太上皇と稱し、位を太子に傳へ、玉ふ是を、憲宗章武皇帝と稱す、（憲宗皇帝）名は純と云ふ、年二十八にして太子となり玉ふ、國を監す（かりに天下の政事を行ふと）尋ぎて位に即き玉ひける、王伾、王叔文等の官を貶せしに、王伾は病て死し、王叔文には死を賜ひ、其黨與は皆罪せられて遠地に流されける、○元和元年、西川縣の節度使（官名）劉闢と云ふ者反したり、同平章事（官名）杜黄裳と云ふ者、高崇文を朝廷に薦め擧げて、劉闢を討たしむ、○夏州の留後（官名）楊惠琳と云ふ者朝廷の命令を拒みしかば、詔を下して之を討しむ、兵馬使（官名）張承金に斬られける、○高崇文と云ふ者成都の諸軍に充て、劉闢を擒にし京師に送りて之を斬りたり、○二年、鎭海の節度使（官名）李錡と云ふ者反したり、詔して、之を討しむ、兵馬使（官名）張子良と云ふ者李錡を執へ京師に送りて、之を斬りける、○三年、沙陀の朱邪盡忠と云ふ者、其子執宜と、與に來り降參したりける、沙陀の勁勇、とは諸の胡に冠たり、吐蕃は戰ひをなす毎に、沙陀を以て、前鋒とおせしかど、後其回鶻（鶻は徳宗の時に請ふて今の字に改たむ、）に貳心あるを疑ひ、之を河外の地に遷んと欲す、回鶻は懼れて唐に臣服ひければ、之を靈州に置て回鶻の兵を用ゐて、征討しに皆捷を得たりとなん、○杜黄裳より以後、相繼ざて宰相となる者、武元衡、李吉甫、裴垍、李藩、李絳等の者は皆賢き宰相なり、裴垍と云ふ者曾かた、李吉甫の爲に、才能ある者を疏記と三十餘人、數月にして、其人を盡く用ひしかば、翕然（善き者がそろふと云ふと）として、稱賛て、人才ある者を得たりとなす、裴垍は器局が峻れて、萬事に整ひ、人々敢て干るも私しの事は委頼とするあく李藩と云ふ者嘗て裴垍を以て給事中（官名）となし、制勅に不可ものあるときは、即ち勅書を直に塗歸て可否を批判もたりければ、吏たる者より、更に素紙を勅書の尾端に連ねて、之に批判を書べしと請ひける、李藩の曰へるやう、此の如なれば、則ち我意見を錄すの狀にして如何して、制勅に批判すと云ふべけんや、裴垍は李藩を薦め擧て宰相となしけるに、我知りしとは如何なる事ぞやとも、言上ぬと言ふはなくふて主上の意に未だ何事も萌さゝるに我意見を以て爭論けるに、上は多く絳の言ふ所を直ぐなるものとしたりける、時に朝廷に在る崔群に於て爭論けるに、白居易等が如きは皆讜々なり、元和の世に朝廷の清廉明白ありと云ふは此等の人の朝廷に立ち政事に預るあるを以ての故ならん、○七年、魏博の兵馬使（官名）田興と云ふ者朝廷の吏をして貢を收めんと請ける、詔して、田興を以て節度使（官名）となし、裴度を使者に遣

りて、詔を宣して慰め錢百五十萬緡を賜ひ其軍勢を、犒ひ勞りたり、六州の百姓、皆給復と
て夫役を免ずること一年あり、兵軍は賜を受けて、歡びける聲雷の如し、成德(軍の名)袁
鄆諸州の鎭兵使者せしもの、賜を受る多きを見て、互ひに相顧み喫驚して顏色を失なひ、歎
きて曰へるやう、天子の命令に抗せし偏強なる者は、賜をも受くるの益なく、何ぞ天命せに
從ふことの我に益あるやと、田興に名を弘正と賜ひたり、○初め彰義の節度使(官名)吳少誠
と云ふ者死せしかば、弟の少陽と云ふ者軍府を領したり少陽は陰に亡命せし者を養ひけ
るに、少陽は幾もなくしてまた死したりければ、其子元濟と云ふ者軍府を領し、兵士を縱ま
に四方に遣りて、彼此を侵し物を掠め取り、東都、畿內にまで及ぼしたり、詔して、十六道の
兵士を發し元濟を討しに、平盧の節度使(官名)李師道と云ふ者元濟を救さんと請願ひしか
ど、許されず、裴度と云ふ者、淮西の行營にありて、詔を宣て兵士を慰さめ、還りて言へる
やう、淮西の形勢を視るに今にして兵を用ひ討しかば、決して拔き取るべきあり、上は兵事
ことは悉く同平章事(官名)武元衡に委られける、李師道と云ふ者は素より、刺客と姦人とを
養ひ置しにある時、刺客の請ひけるやう、密に往きて、武元衡を刺殺せしかば、則ち他の宰
相たる者は必ず、相爭ふて、兵を出すことを罷むべきなり、武元衡と云ふ者は入朝しける時、
賊暗に乘じて之を射殺し、又裴度を擊て首べを傷つけたれば、上は怒玉ひて、賊を征討する

ことを愈急あり、裴度を以て同平章事(官名)として、上の曰せあるやう、朕は裴度一人よ倚て
征討の命を下し、賊を擊しめば足りとて、裴度に彰義の節度使を兼しめ、淮西宣慰招討使の
官に充て、諸軍勢を督し進みて賊を討しむ、唐鄧二州の節度使(官名)李愬と云ふ者先に賊將
の丁士良、吳秀琳、李祐等を擒にして、之を釋し以て我軍に用ひける、ある時李祐の計畧を用
ひて、雪の降し夜、兵を引きて七十里の路程を過ぎ、蔡州城に入り、鵝鴨池とて水鳥の群り居
る池の邊に至り石碑あどを投入れて、其水鳥を恐懼し、水鳥の群飛する聲にて、軍勢の洪聲
に混し、鷄鳴入りて、元濟の外宅に據りしかば、元濟は牙城に登て拒ぎ戰ひしかど勢ひ敵し
がたく遂に擒りに就り、京師に檻入にて送られ斬られける、元濟は謀叛せしより、誅さるま
で、凡そ兵を起し軍勢を用ゐる三歲あり、時に元和十二年に當れり、淮西ももはや平穩にお
りしかば上は寰ょ驕侈玉ひける、是より先二歲に已に李逢吉と云ふ者を用ゐて同平章事(官
名)とし、十三年に至り、又度支使(官名)皇甫鎛と云ふ者を用ゐたり、鹽鐵使(官名)程异と云
ふ者ありて、常賦の外ある稅を取て之を羨餘と名づけ、上に進めたりければ、寵愛とありて、
並びに同平章事(官名)とおし玉ひしかば、朝野の人々は駭愕て云へるやう、元和の政事は非
理となしたりける、○十四年、鳳翔縣の法門寺塔にある佛指骨(釋迦の指の骨なり)を迎へ奉
つり、京師に至、禁中に留め置くこと三日にして、諸寺に歷送にしたりけるに、王公より士民

に至るまで、瞻視し奉蹄あせしかば、身を捨て佛に布施す者多く、惟其佛に施こし事ふるの及ばさらんを恐れしとかや、時に侍郎(官名)韓愈と云ふ者あり、佛骨の表とて佛は事ふるに足ざるのみならず、夷狄の法にして中國未だ嘗て傳へず、今之を宮中に奉ずるの非理とを上書て、極諫め奉まつり、佛骨を水に投じ火に燒れんとを乞ひけるに、上は大に怒玉ひて、韓愈を潮州の刺史と云ふ官に貶したりける、○平盧の將軍李師道と云ふ者を誅べて斬りたり、○裴度と云ふ者其官を罷られける、○十五年上は暴に崩御にあり玉ふ、上は金丹と云ふ藥を服用て、其藥の多くありしか、心躁くあり玉ひて、左右の者罪を獲て死する者も亦多かりければ、人々皆危ぶみ言へるやう、官者の陳弘志と云ふ者の弑逆たるなりと、其黨の者は之を諱み避て、但上は毒藥に發て崩御よなり玉ひしと云ひける、上は位に在す十六年、改元する者一つ元和と曰ふ太子い立て帝となる、是を穆宗皇帝と稱す

(穆宗皇帝)名は恒と云ふ位に卽き玉ひて、改元して、長慶と曰ふ、四年にして、崩御にあり玉ふ、太子い立て帝となる、是を敬宗皇帝と稱ふ

(敬宗皇帝)名い湛と云ふ、位に卽き玉ひて、酒に荒り女に淫にして、嬖倖の者左右にありて政事を行ひける、○李德祐と云者丹宸とて、屏風の如きものを、絳を以て張り、六扆とて、天子の扆となる六ヶ條を丹展に書て獻上る、其六扆の一條に宵衣とて、未だ夜の明けざるに

裝束して朝廷に出御と云ふこと、二條に正服とて衣服の制を立ること、三條に罷獻とて、玩好物を獻るを罷ること、四條に納誨とて諫言を納ること、五條に辨邪とて姦邪なる人を善く辨別ること、六條に防微とて、患害い微少の中に防き止むると云ふことあり、○上い遊獵を好みて、深夜に狐狸を捕へ、婦人に戲ること度あく、性質又褊屈にして急かなり、宦官の者動もすれば、捶撻ことども多くありければ、皆怨みに望ひける、上いある夜獵して、宮に還御ひ酒宴の酣なるとき、宦者の劉克明と云ふ者一、寶曆と曰ふ、江王立て帝となる、是を文宗皇帝と稱ふ、(文宗皇帝)名い涵と云ふ、穆宗皇帝の子あり、宦者の王守澄と云ふ者に立られて帝となり、王ふ、後に名を昂と改め王ひ、大和二年、に上い親ら策して、詔のりを下して、人才を擧用ゐられける、ときに宦者の王守澄等い益〻〻横恣なりしかば、天子を建置あと、皆其宦者の掌握にありて、其權威のあることい、人主の右に超出でしも、人敢て其非理を言ふ者なしとかや、賢良方正(及第の科目あり)劉賁と云ふ者ありて、對策て、宦官の横恣なるを言ひ極げれば、考官の者い、皆歎美感服あせしかと敢て其言を取り用ゐず、及第する者にして裝休、李郃、杜牧崔愼由等の二十二人の者い皆官を除しつけらる、是に於て衆の議論が起りて囂然く劉賁の正しき對策を取らざるい考官の爲に屈せらるゝと稱ふ、李郃の曰へるやう、劉賁は

下第し、我等が登科するあと、は能く顔の皮の厚きとなるべしとて、疏を上り、授らるゝ所の官職を劉賛に回轉て命られんことを、乞ひしかども、何の報もなかりしとなん、○太和五年、上は同平章事（官名）たる宋申錫と云ふ者と、宦官を誅さんと謀玉ひしかども、善く其謀略をなす克ずして、竟に申錫は官を貶されて死しける、○九年、上はまた李訓、鄭注等の人と宦官を誅すことを謀り玉ひしかど、克く其事せざりける、鄭注と云ふ者は本宦者王守澄の爲めに引用められ、李訓本の名は仲言と云ふ、又鄭注に引用められたり、王守澄に見ゆるに及んで、守澄は李訓を上に薦め擧しに、李訓と云ふ者は僞儻とて志ざし大にして氣性あり、また、文辭を善くし口を善く辯て權數多かりしかば、上は李訓を愛し悦び玉ふ、訓注と云ふ者は善く上の意を揣り知りて數〳〵微言として言を顯はさずして、其意を示して、上の意を動しければ、上は其大事乃ち宦官を誅すを謀るべきを意ひ玉ひて、誠情を以て李訓に告しかば、李訓、鄭注の二人は、遂に宦官を誅すことを以て、己任とおしたり、李訓は既に鄭注と威勢官位等も倶に盛んあるを以て李訓は頗ぶる鄭注を忌て、託するに鄭注は朝廷の中より外に至るまで威勢を協なすを以てし遂に鄭注を出して、鳳翔を鎭せし、宦官の仇士良等を進擢て朝廷よ用ゐ、以て王守澄等の權勢を分ちたり、李訓は同平章事（官名）とおりて、王守澄を排き除んと欲し、請ひ願ひて中使（天子の私の使者を云ふ）を遣りて、守澄を鴆殺したりはる、鄭注は始め李訓と謀りて鎭府に至り、壯士數百人を遣り入りて王守澄の葬事を護衛、仍て請ひ内臣の者をして、盡く守澄の葬事を送らしめ、然る後之を殺せしかば、一人も遺類ものは無かるべし、是に於て李訓は心に以るやう、此の如くおれば則ち功は專ら鄭注に歸するおらんとて、乃ち鄭注に先だち事を發するこゝろを謀り、人をして、金吾廳事（政事を司る役所の名）の後に石榴と云ふ木あり、其より甘露を發するのりと奏上しかば、宰相は百官を帥ゐて、朝廷に出で上に拜し資を申して後上に往き覩玉はんことを勸めしかども、上は宰相をして、先に往きて視せしめられけるに、李訓は僞て言へるやう、甘露の出るは眞瑞おらざるおり、上は顧りみて仇士良等に曰せおるやう、諸宦官を帥ゐ往き視るべしと、仇士良等己に至りしとき、風吹きて引連ねし幕は風に吹き起され、見れば兵器を執る者數限おく多かりしかば、驚き走りて、變事の起るを告げたりける、李訓は金吾廳事を衝る兵士等を呼び殿に上せて、僅かに擊て宦官の者十人餘を死しおるひは傷つけしかど、謀事の成就せざるを知りて走りたり、仇士良等は神策兵（天子の親兵なり、德宗帝のときに左右羽林を分つて神策兵とす）に命じて、金吾廳の吏や兵卒を殺し、宰相の王涯、賈餗、舒元輿等を執へ、逆るに謀反の名を以てし遂に腰を斬る罪に行おひたり、李訓の謀略は憒冒元輿のみ知りて、他の宰相は實に知らざりしとなん、是より天下の政事向は皆北司（宦官を北司と云ふ）にて決斷をなし宰相たる者は

官官より出す所の文書を取行ふのみにして、其本分の政事に預からざりける、李訓はある人の爲に殺され、但首を傳ふるのみ、鄭注も亦鳳翔の監軍（官名軍目付なり）たる官者に殺されける、㊀開成三年、司徒、中書令晉公裴度と云ふ者卒したり、裴度は憲宗帝の時宰相の官を罷し以後は、更に世の中の事に意を用ゐることなくして、花園を作り、池を修治などして、綠野堂、子午橋等の別墅の勝地あり、詩を善くするものと、酒を觴、詩を詠じて、自ら娯しみける然れども、穆宗帝敬宗帝の時に皆一度は朝廷に入りて、政を補佐たりしかば、上の御世に至りても亦平章軍國重事（官名）とありしかば唯時世に浮沈、政事を執行ふのみあり、然かるに四朝（憲宗穆宗敬宗文宗の四人の天子を云ふ）の將相にして、威光や人望が遠き地の四夷にまで達しければ、四夷の者は唐の使者に見る毎に、輒ちほさず、裴度と云ふ者の安否を問ひ尋ぬるのみ、裴度の身は唐の國家に取りては、輕重あるものにして、恰德宗帝の時に郭子儀と云ふ者ありけるが、其郭子儀と云ふ者は朝廷にありて善く政事を治め身を以て國の安危に繫ること久しければ、裴度の身も亦同じく郭子儀の如くなること二十餘年なりしかや、㊁五年、に上は崩御になり玉ふ、上は位に卽玉ふの初めに於て、精力を勵まし、國を治めんとを求め、奢驕を去りて、儉約に從がひ玉ふ、故を以て朝廷の中より外に至るまで、天下の泰平は翼ふべしと謂ひしとなん、然るに宦寺（宦は宦官のとなり寺は寺人內侍を云ふ）

の爲に制へられて、竟に上は充分に政事を爲し玉ふこと能はざりければ、嘗宰相に問玉ひけるやう、何時に至りしかば、天下は太平とあるべしと、牛僧孺と云ふ者答て申すやう、太平と云ふ者は別に象あるものにあらず、卽ち今日が太平と云ふべきなりと、また末年に至りて何れが優るべしと、對ふる者憮然として顏色をかへて驚きたり、上の曰せあるやう、周の赧王漢の獻帝の强臣の爲に制せらる、今朕が家奴（內侍宦官のとなり）の爲に制せられたり、殆ど如ばと云ふべきあり、上は位に在すこと十五年にして、改元する者二つ太和開成と云ふ、弟の顥玉立て帝となり玉ふ是を武宗皇帝と稱ふ、（武宗皇帝）名は瀍と云ふ、穆宗皇帝の子あり、文宗皇帝れ嘗て敬宗皇帝の子たる成美と云ふ者を立て太子とおし、崩御になり玉ふとき、成美を以て國を監しめんと欲せしが、宦者の者等い太子に立玉ふとき已れに由らざるを以て、竟に太子を廢して、瀍と云ふ者を太弟となして、成美をば殺して位に卽玉ふ後に名を炎と改ためける、李德裕と云ふ者を同平章事（宦名）とおす、李德裕と云ふ者は、穆宗皇帝の初めの時より、學士（官名）とありたり、李宗閔と云ふ者あり、嘗て制策に對し答ふるに其爻たる吉甫と云ふ者を切く譏たるを以て之を恨みとし、宗閔を搆罪に陷しければ、是より、各々朋黨を分ちて、更に相互に排わひ、軋わふ者四

十年ならんとしたりける、文宗皇帝の時に在て李徳裕ゐ侍郎(官名)とおりしに、裴度と云ふ者あり徳裕を宰相たらしめんと薦め擧しかど、宗閔ゐ官〳〵の助け引上る爲に、遂に相となる、李徳裕ゐ己れより遥る以て引出し、且牛僧孺を引き入れて、並ひに宰相とおしたり、宗閔僧孺と、相ともに李徳裕の黨の者を排擯て尊さて、徳裕を以て西川郡を鎮せしむ、徳裕は饗邊機を作り、蜀郡の地形を圖き、南の方南詔郡に入り西の方吐蕃の地に達し、軍旅に老たる者と、國邊の事に習ひたるものとを召して、問ふに地の遠近より險峻と平易おその路程に至るまで訪ひ謀て、皆自身に經歴たる如く、士卒を調練し堡障を葺繕て國邊の事に備へ、吐蕃の將軍悉怛謀と云ふ者維州を以て、來りて降參したり、維州は本漢の地より兵を入れたるの路あり吐蕃は之を得て號て無憂城と謂ひしとかや、李徳裕は此維州を得たるを以て極めて便利とおし、是より牛僧儒をも納べからずし、無憂城を以て、叛の將軍と併せて、吐蕃に歸せしに、吐蕃は、之を境上にて誅し慘酷あるは極もおかりしとなん、李徳裕と牛僧儒との怨みは是より愈〳〵深きに至りける、牛僧儒も引薦きて宰相を罷たりしかば、李徳裕は入り代りて宰相となる、宗閔も亦相を罷しが再び宰相とおりたり、李徳裕と云ふ者又宰相を罷めければ、二黨は相互に敵たる朋黨の者を排擯て我朋黨を拔けたり、文宗皇帝は毎に嘆きて曰せあるやう、河北州の賊を除き去るは易く朝廷の朋黨を除き去るは難しと、李徳裕は引退きて、貶黜されしが、上の立玉ふに至りて、李徳裕を召て宰相とおしける、徳裕は上に言し上て言へるやう、正人は邪人を指て邪しものと言ひ、邪人は亦正人を指て邪しものと言ひしかば、之を辨別るは人主にありと、上は喜玉ひて納聞られしとおん、徳裕は維州を降參せしめたる事を追論して、悉怛謀に褒美として、右衛將軍を贈加、昭儀の節度使(官名)劉從諫と云ふ者卒してより、嶺自ら軍府を領じける、李徳裕の言へるやう、澤潞(昭儀郡なり)の事體は河朔三鎮(成徳郡、魏博郡幽州を云ふ)と同じからず、河朔は國の亂に逢ひ習慣こと已に久し、累朝之を度外となして置たり、澤潞は京師に近くして、心腹の如し、若又嶺が自分勝手に節度使(官名)とおりしを其儘に授け置きしかば、朝廷の威光や命令が諸鎮に行はれざるべし、上の問玉へけるやう、如何せば、之を制すべきや、嶺の恃とする所は三鎮なり、但鎮魏が與に力を合せ嶺と同しうせざれば、嶺また能く爲し能はざるべきおり、重臣の者を遣て鎮魏に諭して之を討しめける、また詔して曰せあるやう、澤潞の一鎮府は卿と事體が同じからず、子孫の謀事をなして、輔は頽なり車は牙なり此の二つの者相助け合の勢ひを存する勿れ、鎮魏は悚息て命令を聽たりける、二鎮の兵は朝廷より遣す所の行營將たる王宰石雄の二人と各〳〵進みて征討したり、○河東州の都將たる楊弁と云ふ者亂を作し、節度使(官名)李石を逐ふ、中使の馬元實と云ふ者を遣りて曉喩し且之を覘しむるに、馬元實は賂を受けて

還り衆の者の中にて、大聲にて言へるやう、相公は楊早く牙に節度使を與べし、牙門(本陣の門なり)より柳子列(地名なり其地柳の木を列ね植るを以て名づくるなり)に至る十五里なり、地に曳き連なる光明く甲士は如何して、之を取り得べきならんと、李德裕は之を問詰めしかば元實辭屈して奏し上けるやう、微賊(楊辨なり)は決して恕すべからず、如し國力弱くして支へざれば、寧そ劉稹を捨つべしと、河東の兵出戍る者朝廷にては客軍(遊軍と云ふが如し)に太原郡を取しむるを聞て妻孥も亦屠さるゝを恐れ乃ち歸り、揚辨を擒にして、京師に送り、之を斬たり、未幾くならざるに劉稹も亦勢ひ究蹙しかば、澤潞の人劉稹を殺して降參し、澤潞は平ぎける、李德裕に大尉衞國公(官爵なり)を加へ、牛僧孺の官を貶し循州の長史(官名)となし、李宗閔をば封州に流したり、○宦者の仇士良と云者の官爵を削りて其家を籍沒しとなん、是より先に仇士良は致仕なしければ、其黨の者は歸るを送りたり、ときに士良は、之等の人に敎へて曰へるやう、天子は閑に居しむべからず、常に宜しく奢て靡になさしめて、娛みを取り、暇の他事に及ぶことなからしむべし、また愼みて天子には書物を讀しめ、儒生を親近ぬやうになすべきなり、天子をして前の代に天子となり、國を興し國を亡したるを見れば心に憂懼を知りて、吾輩は遂に疎じ斥げらるゝに至らん○天下の佛寺を毀ちて、僧尼は勒べて還俗せしめたり、○會昌六年、上は崩御になり玉ふ、位に在す七年にして改元する者一、會昌と云ふ、光王立て帝となる、是を宣宗皇帝と稱ふ、(宣宗皇帝)名は怡と云ふ、憲宗帝の第十三子なり、幼ときは不慧なる者と號ひたりけれど、太和年中より後には、益〻自ら韜匿(自ら才智をかくして言行にださぬを云ふ)せられしとかや、文宗帝は好みて宣宗帝に言を誘ひ發せしめ、以て笑ひ喜び玉ひける、武宗帝は豪邁にして、尤も之を禮せざりしかど光王は叔に當るを以て名づけて光叔と云ひたり、武宗帝は疾篤く子は幼なければ、宦官の者は、天子を立る策を禁中に定めて、詔のりして、怡を立て皇太叔となし名を忱と更め、權に軍國の事を匂當はしむるに、裁決し玉ふこと咸〻く道理に當り、人々は初めて、其隱れて見ざる德行あるを知る、尋て位に卽き玉ふ、○李德裕と云ふ者官を罷られ、牛僧儒、宗閔等の者も比に官がへせられ、德裕は三度貶れて、崖州の司戶(官の名)となりて、死したり、○令狐陶と云ふ者同平章事(官の名)となる、是より先に令狐陶は學士たりしかば、上は嘗て太宗帝の選るゝ所の金鏡錄を以て令狐陶に授けて讀ましめ又貞觀政要を屛風に書きて、每に顏色を正し手を拱きて讀み玉ふ、曾て學士の畢緘と云ふ者と國邊の要害をする事を論ぜしとき、畢緘は具に方略を陳ければ、上は悅び玉ひて曰せあるやう、意ざりき、廉頗杜牧の如き良將の吾禁中に在りしとは、卽ち畢緘を用ゐて、邊帥となせしに果して、其任に稱ひしとなん、上は聰敏明察にして、强記よく嘗て密に學士の韋澳と云

ふ者をして、州、縣、境土、風俗、物産及び諸〻の利害を纂て次序をおさしめ、號て處分語と曰ふ、刺史(官の名)の朝廷に參內し辭を請出る者ありて曰へるやう、上は本州の事を處分して、人を驚かしめたりと、建州の刺史も亦た入朝して辭を乞しかば、上の問玉ふやう、建州は京師を去ること幾何ぞ、對て曰く八千里あり、上再度曰せありけるに、卿が彼地に到りて政をおすも、朕は皆之を知る遠と謂ふ勿れ、此の階の前は、則ち萬里の遠きも近に同じあり、令狐陶は奏上て李遠を杭州の刺史に擢てる、上の曰せあるやう、我聞く李遠の詩に云へる、長き日を一局の棋にて消るのみありしかば、安に能く人を理むるとを得べき、令狐陶の曰へるやう、詩人は身を高興に托るも、實に唯碁を打ちて日を消す如き者にあらざるなり、嘗て詔あり曰く刺史たる者は、外鎭より直に、治所に徙るを得る勿れ、必らず京師に至らしめ、面前にて善く其人を察んと、令狐陶は嘗て故人を直に隣り州る刺史とおし、便利の道より、官づきし地に之しむ、上は之を問玉ひ曰せあるやう、詔命は既に行る、直に廣格とは用ゐざるべし、宰相は實に權あり、時に天方に塞し、令狐陶は天子の命を承汗流れて重ねたる裘に透りけるとなん、上は朝廷に臨み群臣に對する未だ嘗つて惰たる容はあらざるあり、宰相政事を奏上る毎に、旁ら一人の立つものなきも威光嚴にして、仰ぎ視る可からず、事を奏上畢りければ忽怡然て閑に語る一刻許にして、徐に復容を整へ曰せあるやう、卿輩善く努て之を爲し行へ、朕は常に卿輩に負き再び朕に相見ゆるを得ざるを恐るおりと、令狐陶と云ふ者嘗て人に語り謂へるやう、吾政事を秉こと十年、最とも恩の遇待を受く、延英殿に政事を奏上る毎に未だ嘗て背に汗して、衣を沾さぬことはあらざるなり、上は曾て學士韋澳を召し左右の者を屏ぞけ韋澳に問ひて曰せあるやう、近日の內侍(宦官)なり權勢は如何ばかりぞや、韋澳は對へて申し上るやう、陛下は威光を以て決斷し玉ふは前の朝廷の比ぶべきやうなし、上は目を閉ぢ者を搖じて曰せらる、全く未だ左樣なとには至らずして、尙宦官を畏るゝとども多く有りける又嘗て令狐陶と盡く宦官を誅さんと謀りしかど澀に無幸にまて及ばんとを恐れ玉ひければ、令狐陶は密に奏あげて曰へるやう、但罪あるものは捨すおく、又宦官の缺るおりとも補ふなかれ、然らば、自ら消耗盡るに至らん、宦者密に其奏上を見たるより、益朝廷の士と相惡く、南司は宰相北司は宦官なり、其南北司の相惡きこと、水火の相容ざる如し○大中十三年、上は崩御になり玉ふ、位に在す十四年、改元する者一、長子立て帝となる、是を懿宗皇帝と稱ふ、(懿宗皇帝)初め名は溫と云ふ、鄆王に封ぜらる、寵愛なきより、立て太子となるを得ず、宣宗皇帝崩御になりて宦者之を立つ、名を漼と更む、○浙東の賊裘甫と云ふ者起るおり、名聲が中原(國中おり)に振ふ、觀察使(官の名)王式と云ふ者討ちて之を斬りたり○九年、徐州の賊

龐勛と云ふ者起りたり、是より先南詔(鎭府)大理皇帝と稱し、兵を擧て入來りて寇む播州邕州交阯を陷し入れ、勅して徐州泗州の兵をして桂州を守らしめけるに、期限を過しかど交代らざりければ、遂に亂を作しける、龐勛は粮料判官たり、戍兵卒は推て以て主とあし、兵を擁して北に還へり、過る所ろ人を剽し物を掠め、徐州に至り、節度使(官の名)郭彦曾を殺し、諸郡を陷しいれけるに、招討使(官の名)康承訓と云ふ者之を擊ち沙陀の朱邪赤心を前鋒として戰ひしかば、龐勛は敗れて死したりける、因りて赤心に姓名を李國昌と賜ひ、大同軍節度使(官の名)となし、尋ぎて又振武軍節度使(官の名)となしたり、○咸通十四年、上は崩御にあり玉ふ、位に在ずこと十五年、改元する者一、子晉王立て帝とある是を僖宗皇帝と稱ふ、

(僖宗皇帝)名は儇と云ふ、懿宗帝の少子あり、年十三にして、宦官に立らる、懿宗帝より、以來、奢侈玉こと日に甚だしく兵を用ゐること息まず、賦斂は愈〳〵急あり、洪水や、旱りつゞいくなどの天災ありとも、代官の者は實を以て上聞ざりければ、百姓は流浪し殍れになりしかと、控訴る所おく、所在に相集まり、盜をなしたりける、濮州の人王仙芝と云ふ者曹州に起り寇句の人黃巢と云ふ者あり、王仙芝に應援をなし、黃巢は馬に騎りて射ることを善くし任俠を好み、嘗て進士に擧られしが、下第し、仙芝とふるに私に鹽を賣り販き、是に至り、兵を聚め

州や縣を攻て物を剽め取り、駢乏の民之に歸くもの、數月にして數萬あり、王仙芝は攻て、汝鄭唐鄧の州郡を陷し入れ、鄂州に寇し、安州を陷しと云ふ者と申州に戰ふて、而して大に打敗れ、又大ひに黃梅縣に敗りて王仙芝を斬り黃巢は鄆州沂濮縣等を陷いれ、宗汴(二州の名)を掠め南に渡り、洪州虔州、吉州饒州、信州を陷いれ、宣州に寇し、浙東に入りしに、鎭海の節度使(官の名)高駢に擊破られ、遂に廣南に趁き廣州を陷いれ、潭州に出て、北に渡り襄陽郡に向ひ、荊門に敗れしかば、復た引て南の方に到り、宣州を陷いれ、采石より、江を渡り、已にして、淮を渡り申州を陷いれ、潁州宋州徐州襄州の境に入り、東都を陷いれ、又引て西の方潼關より、長安に入りしかば、上は蜀州に出奔られたり、黃巢は僭りて大齊皇帝と號ふ、諸道兵を發し赴き援けしむ、是より先沙陀の李國昌と云ふ者の子克用は兵馬使(官の名)となり、蔚州を戍る、大同軍の諸大將相謀り曰へるやう、今天下大に亂れ、朝廷の號令復た四方に行なはれず、此れ乃ち英雄豪傑たる者功をあし名望を取り家を富し身を貴くするに善き秋と謂ふべし、李振武の名聲天下に聞え、其子克用の勇こと諸軍に冠たり、若し輔け以て、事を擧る代北は平ぐには足らざるあり、人を遣りて潛に蔚州に詣り李克用に說しむ、克用は雲州に赴むき、之を取る、河東の節度使催康、昭義の節度使李鈞と云ふ者討て大に敗る、李克用は忻州代州に寇し、晉陽に逼る、已にして盧龍郡の兵に

破らる、蔚州朔州の兵も亦討て其父國昌を敗ぶりければ、克用父子は亡て達旦(夷狄の別種)に走る、朝廷にては其克用父子の罪を赦るし、其兵を召し賊を討しむ、克用は沙陀の兵を將み來る、賊は之を憚り曰へるやう、鴉軍(軍中國用を號として其軍皆黒き服を衣るを以てなり)至たると、連りに賊を破りて、遂に長安を復かへす、黄巢は宮室を焚て遁て蔡州に至る、蔡州の節度使(官の名)秦宗權と云ふ者之に降參し、黄巢は汴州に起きしかば、李克用等は追撃ちて大に之を破ぶり、未だ幾はくならずして、賊黨は黄巢を斬りて降參したりける、〇李國用の汴州に至るや、朱全忠と云ふ者裴ひ撃ち、全忠と云ふ者は黄巢の將朱温と云ふ者あり、先に黄巢に遣はされ、攻て同州華州を陷しいれ、尋きて華州を以て降參せしかば、名を全忠と賜ひ、宣武の節度使となす、李克用と云ふ者を館しけるとき甚だ恭し、克用は酒に乘じて頗る全忠に無禮を加ふ、全忠は不平を鳴らし、兵を發して上原驛を圍み之を攻めしに、克用は尚醉ふてありしなれば、左右の者は水を以て其面に沃ぎかけて、兵の起りたるを告ぐ克用は乃ち目を張り弓を援り起て而して走る、會々大に雷雨して晦冥なりしかば、醉ひを扶け電光に乘じて、城に縋り遁出でけるに汴州の人あり橋にて兵を以て扼とめられ從者力戰し橋を度るを得て而して免れたり、克用は晉陽に還りて甲兵を治へ表を上つりて朱全忠を討んと乞ふ、詔して之を和解せしかど、克用は聽かざりしとあん、〇上は成都を發し

て、長安に還御玉ふ、〇秦宗權と云ふ者、僭はりて皇帝と號ふ、〇上の蜀州に奔り玉ふや、官者の田令孜と云ふ者實に之を扶けて挾さみ出てしかば、自ら以て功ありとおもし、政權は皆己れより出つる者とし、河中(州の名)の王重榮と云ふ者前に亂を作し自立したりければ、田令孜は朱玫等を遣り之を攻しむ、王重榮は、救ひを李克用に求めたり、克用は方に朝廷の朱全忠と相表裏にありて共に臣を滅ぼさんと欲つすと、兵を引き河中に赴むく、京師の者ハ震るひ恐れ田令孜は上を劫やかして、鳳翔郡に奔る、朱玫等追逼しかど及よばず、肅宗皇帝の玄孫ある襄王熅を立て帝となす、朱玫が將に王行瑜と云ふ者あり、朱玫を斬る、熅は河中に奔るも五、乾符、廣明、中和、光啓、文德と曰ふ、は長安に還御玉ふ、位に在す十五年、改元すること日に宦官の者と相處玉ふのみ、天下大に亂れ、盜賊蠭起ち、豪傑は因り其間に起りて、互に相呑噬とて國を取合ふて爭亂止むときあく、朝廷にてい之を制へること能はず、上は崩御にあり玉ふ、壽王立て帝となる、是を昭宗皇帝と稱ふ、(昭宗皇帝)名は傑と云ふ、僖宗帝の弟なり、僖宗帝の大漸にあり玉ひしとき、之を立て太弟となしたり、遂に位に即く後名を曄と改たむ、帝は明粹として英れたる氣性あり、文學を喜み玉ふ、僖宗帝の威光や命令の振はずして、朝廷の權勢が日に卑きを以て、前代の功烈を

恢復するの志あり、踐祚の始め、中外の者は忻々焉たりしかど、内、官官の者に制へられ、外は勢ひ強き藩鎭(節度使のことをいふ)わりて、初めの志ざしも遂になしとげざりしとなん、○越州(會稽郡なり)の董昌と云ふ者號を僭り、董昌の先に杭州に據りしとき、錢鏐と云ふ者あり兵馬使(官の名)となる、朝廷董昌に命し漸東に帥とし、錢鏐をして、杭州を領せしむ、是に至り董昌は越州にありて帝と稱ふ、錢鏐に詔して、之を討しめける、○鳳翔郡の李茂貞、華州の韓建、邠州の王行瑜あと云ふ者、三鎭にて兵を擧げ、闕を犯し、宰相を殺し、帝の廢立を謀る、李克用來り討と聞き乃ち去る、克用邠州を攻め、王行瑜を斬り、將に兵を岐華(岐陽なり)に移さんとす、貴戚八にして近習の者沙陀(李克用なり)の太だ盛なるを恐れ之を止めたり、克用は隴西郡王より爵を晉王に進められしかば、兵を引て晉陽に還りける、○錢鏐と云ふ者越州に打ち克ち、董昌と云ふ者誅に伏したりける、○初め李克用は渭北にゐろしけるに、李茂貞韓建等は、之を憚かり、朝廷に事ふること、甚だ恭し、李克用の去りし後は、二鎭復驕り慢ぶり、李茂貞と云ふ者又兵を擧て闕を犯したれば、上は華州に出奔し玉ひける、李克用と云ふ者は援の兵を遣り朱全忠と云ふ者洛陽の宮を營み鄕を迎かふと聞き、茂貞韓建と皆懼れ、上を奉じて長安に還らしむ、是より先嘗て諸王に命じ巡警をなさしめたり、又四方に出て藩鎭の者を撫て慰さめしめんと欲しける、南北司たる宰相宦官の朝

廷に在りて、事を用ひ謀る者は、其己等に不利あるを恐れ、交々諫め以て不可ざるものとなしければ、上は已を得ずして、之を罷め玉ふ、上は華陽に在せし時、宦官の者劉季述圍て諸王十一人を殺したり、是に至り劉季述と云ふ者上を少陽院に幽めて、太子の裕を立てたり、同平章事(官の名)崔胤と云ふ者神策軍の大將に謀き、劉季述を討誅す、上の位に復し玉ふや、宦官は崔胤を去るを謀る時に朱全忠と云ふ者天子を挾みて諸侯に令するの意あり、崔胤は書を以て全忠を召す、全忠は兵を擧げて來る、宦者の韓全誨等と云へる者上を劫かして鳳翔郡に如しむるに、珠全忠と云ふ者は之を圍みしが、李茂貞は遂よ擊て全誨等を殺し上を奉り長安に還らしめたり、全忠は兵を以て宦官の出て外方に使する者は、詔じて所在にて誅さしめ、黃衣を着する幼弱宦官の者三十人を生存て、禁中の洒掃などに備へたり、文宗帝より以後は天子を廢するも立るも皆宦官の掌握に在り、定策國老とて宦官の者は天子の廢立を謀るなど天下一の權威を持ちて、却つて天子は門生の如くなりとの綽號をなすに至る、是に及んで大に誅殺れたりけるとかや、朱全忠は東平王より爵を進めて、梁王とあり、汴に還りたり、⊙朱全忠は權威の天下に震ひけるより、帝位を簒奪の志あり、崔胤は懼れて、之が備へをあせしかば、朱全忠は表を上つりて崔胤を除き去らんと請ひて、密かに其黨に崔胤を殺さしめ、遂に上に都を東京に遷さんと請ひ、百

官をして東の方洛陽に行を促し、士ひより民に至るまで駢立て、徒したり、上は侍臣に謂あるやう、朕聞く鄙語に云へるあり、紵干山の頭は積雪ありて、雀あどは皆凍え殺す　何ぞ飛去りて暖地に至り生ながらへる處にて樂まざる、朕も今亦漂泊たり、竟に何れの所に落入るを知らずとて凍雀に喩へて怨み玉ひ泣だ下て、巾を沾せしとかや、上は洛陽に至り玉ひしとき李茂貞と云ふ者等は檄を移し、興復を以て辭となしける朱全忠は將に西の方を討んとせしかど、上の英氣あるより、變事の生ずるを恐れ、人を遣て、洛陽に入りて、遂に帝を弑さしむ、○上は位に即き玉ひしより、賢人豪傑を用ゐず、嘗つて朝廷の士にして、鄭綮と云ふ者あり、俳諧を好みしが、多く歌後の詩とて、五七言絶句あど半句を歌て意を見はし、時の政事を嘲りたり上は鄭綮の蘊して見さざる所あるを以て、手ら朝廷の班簿に書注て、以て宰相となしたり、堂吏（中書省の吏）走りて鄭綮の所に至り宰相に命ぜらるゝを告ぐ、已にして而して、鄭綮を賀客至りければ、鄭綮は首を搔きて、曰へるやう、歌後鄭氏の五男宰相となる、時の政事の治るは知るべきあり、○上は、位に在す十七年、改元する者七、龍紀、大順、景福、乾寧、光化、天福、天祐と云ふ、子立て帝とある、是を哀皇帝と稱ふ（哀皇帝）初め名は祚と云ふ、昭宗帝に廢太子の裕と云ふ者あり、已に壯あるに至り朱全忠は裕を惡みければ、祚は幼かりしかど、立ことを得たり因りて名を祝と更めたり、朱全忠は裕等九人の者を殺す、皆昭宗帝の子あり、朱全忠は相國（天子を輔佐て政事をなす即ち我國の總理大臣あり）とあり、九錫と云ふ重き爵を加へける、帝は位に在して仍天祐と稱ふ、四年あらずして、梁に禪り玉ふ、尋ぎて弑さる、唐は高祖皇帝初めて位に即しより是に至り二十世にして、其年數は凡二百九十年なり、

通俗十八史略卷六

五代

梁

（梁太祖皇帝）初め名は温と云ふ、姓は朱氏、碭山の人にして朱五經（名は誠と云ふ、五經を以て教授す故に云ふ）と云ふ者の子なり、少くして無頼（身の頼りところなきもの）なり、黄巣と云ふ者に從がひて、盜賊をなしたり、後唐に降參して名を全忠と賜はる、初め汴を鎭めしが、攻て徐州袞州鄆州を併はせ、河北河東の諸郡を攻む、屢〳〵李克用と兵を交へ、尋ぎて、河中晉降を取り、又兵を華岐に用ゐ、東の方青州を降し、南の方荊襄を取り、諸鎭藩の間を横行（横は道に由ざるを云ふ横行は即ち勝手次第に藩鎭の間を侵し陵くを云ふ）し、劫やかして唐の都を洛陽に遷し、遂に唐を簒ひ、名を晃と更たむ、其兄の全昱と云ふ者を封じて王となし、嘗て之を罵りて曰るやう、失三（朱氏の三男なり、即ち全忠を云ふ）汝ぢ天子となるか、汝ぢ黄巣に從ひ盜賊をなせしが、天子は汝ぢを用ゐ、四鎭（宣武宣議太平護國）の節度使となす、何ぞ汝ぢに唐の天子が負くことありけるにや、汝ぢは唐家三百年の社稷を滅ぼし自ら帝王となる、行〳〵は當に一族の者も滅ぶるに至るべきなり、是時李克用と云ふ者晉に王たり、李茂貞と云ふ者岐に王たり、楊行密と云ふ者吳王となり、淮南に王たり、楊行密は已に卒

せしかば、其子行密代りて王となる、王建と云ふ者蜀に王たり、錢鏐と云ふ者兩浙（浙東浙西なり）に王たり、王潮と云ふ者閩州に據りしが、已に卒せしかば、弟の審知と云ふ者王潮に代りたり、馬殷と云ふ者湖南に據り、劉隱と云ふ者廣州に據たりける、皆唐の末に至りしより以來諸州の地を割て之に據りたりしとなん、○梁主は馬殷を以て楚王となす、○蜀王の王建と云ふ者帝と稱ふ、○晉王の李克用と云ふ者卒したり、初め克用は養子に存勗と云ふ者ありて、最も驍勇して功らありしかば、養子の存信と云ふ者は存勗を疾で遂に譖言せしより存孝と云ふ者は其禍いの及ばんことを懼れて、叛んを謀りしに、李克用は討ちて之を獲にし囚へ歸へりしが其存孝の才智を惜みて、意ひけるやう、刑に臨みしかば、必らず、之が爲に赦さんことを請ふものあらん、然るに諸將は其才能を疾みて、竟に一人の赦さんことを請ふと言ふ者なくして、遂に死するに至りける、又薛阿檀と云ふ者あり、亦勇きものにして、密かに存信と通ぜしかど、謀事の泄れ露はれんを恐れて自殺したりとかや、是れより李克用の兵勢は寢〳〵弱くなりければ、唐の末に至りては、數〳〵汴人の朱全忠に攻められて、邢、洛、泌、隋、鄧等の數州を失なひ、汴兵は直に進んで晉陽の城下に抵りければ、李克用は、城に登りて、兵を備へ禦せぎ守りて、寢るも食するも其遑なきまでに迫られける後に汴の兵は再び晉陽を取り圍みしかど、軍中疫病の行なはるゝを以て兵を引還へしたり、ときに李克用は幾んど、奔らんとせしが、汴の兵引去るに會ふて、奔り出ることを止めたりしとなん、李克用は汴人朱全忠と兵を爭さふてと能はざる十年なりければ、之を悒々して卒するに至る、子存勗代りて立つ時に梁の兵は晉を侵し潞州を圍みしに、晉の李嗣昭と云ふ者城を閉固たく守りて年を踰たり、梁は夾塞を築きて之を守る存勗は諸將と謀て曰へるやう、朱溫の憚かり恐るゝ者は先王李克用のみ、吾新たに立つを聞かば、童子の如く視て、必ず、驕り怠たるの心あらん、若し精れたる兵を選み、道を倍ぎて之に趍き其不意に出でば、威名を取り覇業を定むるは、此の一擧にあり、機は失しなふべからざるなり、兵を帥ゐ晉陽を發し、三垂岡の下に伏勢して旦に大霧の降りしに乘じ直ちに夾寨に抵り塹を塡め攻鼓を鳴らし、兵を躁して入りしかば梁の兵は大ひに潰れて、遂に潞州の圍みを解くに至るべし、○淮南の將軍張顥、徐溫と云ふ者楊渥を弑し、徐溫又張顥を弑す、將軍も吏もともに楊隆演と云ふ者を推立てける徐溫は自ら昇州を領し、養子の徐知誥と云ふ者を遣りて云を治めしむ、○梁王審知と云ふ者を以て閩州の王となしたり、○梁又劉守光を以て燕王となす、守光と云ふ者は盧龍郡の節度使（官の名）仁恭と云ふ者の子なり、是れより先に劉守光は父の仁恭を囚へて自ら軍府を領せり、○梁の夏州亂れ、兵は所在に起り立ちて、節度使の李彝昌と云ふ者を殺し、其族父（父の再從兄弟なり）の仁福と云ふ者を以て李彝昌に代たり、夏州の李氏、本の姓は拓跋氏と云ふ、

上世唐より姓を賜ひ、鎭を領すること久し、○廣州の劉隱と云ふ者卒す、其弟巖之に代りて立つ、○劉守光と云ふ者燕帝と稱ふ、○鎭州の王鎔と、定州の王處直と云ふ者と晉王を推て同盟の主となす、梁鎭州を攻め、襲擊して諸郡を取りしかば、普王は其兵を柏鄉縣に伐て大ひに之を破りたり、晉鎭州定州二鎭の兵を帥ゐて燕を伐ければ、梁主は之を救ひて、大ひに破れ逃走歸りける、是より先に梁主は已に疾となりし、是に至り慙憤ふりて曰へるやう、我天下を經營ること三十年、今日意はざりき、太原の遺孽、克用の子李存勗なり)をして、更に勢ひの昌熾なるかくの如きに至らしむるとは、吾存勗の志ざしを見るに小き者にあらず、我死せば諸兒は彼に敵すること能はざるなり、後に吾死するも葬むるの地なきに至らん、疾愈〳〵劇しく且氣短かく怒り躁がしくて、假子の友文と云ふ者の妻を愛し將に友文を立て、嗣となさんと欲しけるに其子友珪と云ふ者の爲に遂に弑されたり、位に在ます、六年改元する者二つ開平乾化と曰ふ、初め汴州を以て東都開封府となし、洛陽を西都となす、都を洛陽に遷す者凡そ四年、友珪と云ふ者自ら立しが、尋ぎて誅されければ均王又立たりける(均王)名は友貞と云ふ、初め東都指揮使(官の名)となる、友珪と云ふ者其位を纂ふて弑したり、兵を起し之を誅して位に汴と云ふ處にて即き玉ひ、名を瞋と更ためける、○晉王は幽州に入り、燕の劉仁恭と守光と云ふ二人を執へ歸りて、之を斬る、○梁は荊南の節度使(官の名)高季昌と云ふ者に爵を賜ひ、王となす、○契丹の阿保機と云ふ者帝と稱ふ、阿保機は古の東胡の種なり、其國は先に横山縣の南にあり、本は鮮卑と云ふところの舊地なりしが、元魏の時に自ら契丹と號ふ初め太賀氏(其君の名)子八人あり、八部(一但利皆二乙室活、三實活、四納尾、五頻沒、六內會雞、七集解、八奚嗢、と云ふ、大人は部の長なり)大人と云ふ、其一人を推て主となし、三歲毎に一人づゝ代りて主となる、唐の開元年中に邵固と云ふ者あり、衆の者を統治めしかば、詔して王の位を襲ことを許したり、是に至り、諸部にては耶律斡里の少子阿保機と云ふ者を以て主となし、奚渤海の諸國を幷せ取り、始めて元を建て、復以前の如く代りて主の位を受くることなくして、國の人は之を天皇王と謂ひたりける、○廣州の劉巖と云ふ者越王と稱ふ、己にして、帝と稱ひ、國の號を改ため漢と曰ふ、后に又名を龔と更たむ、○吳の徐溫と云ふ者治所を昇州に徙し徐知誥を以て、入りて吳の政事を輔佐しめたり、○蜀主の王建と云ふ者死したり、子の宗衍と云ふ者立て蜀主となる、○吳王の楊隆演と云ふ者卒したり、弟の楊溥と云ふ者立て吳王となる、○梁は錢鏐と云ふ者を以て吳、越國の王となしたり、○晉は梁と連歲兵を交へ戰ひしが、梁の魏州は晉に降參し、晉王は魏州に入りて、德州澶州を拔取りしかば、梁の劉鄩と云ふ者晉陽を襲擊なせしかども克こと能はず、還りて、鎭定二州の營所を攻む、晉の師之を打ち敗りける、又劉鄩は兵を轉じて、魏州を攻め

しが、晉王が又擊で之を敗かたりはれば、梁又兵を遣りて晉陽を復び襲撃せしに、晉人ね撃て之を逐ひ卻けたり、晉王い衛州、磁州、洺州、相州、邢州、滄州、貝州の兵に克て、濮州、鄆州を掠めけれや、梁人い河を決へ水を深くし水勢を強くして以て晉兵の攻入るを嚴重に防ぎ限りけるに、晉王い攻て其四つの寨を抜取り已よして大軍を擧梁を伐ち胡柳に戰ふ、晉の周徳威と云ふ者敗れ死す、晉王い兵を引牧め復戰ひて大ひに梁の軍を破りたり、晉い徳勝嶺の南北に兩の城を築く、梁の兵之を攻しかど克つ能はず、梁の招討使たる王瓚と云ふもの晉兵に敗られ、梁の河中州い晉に降參したりける、鎭州の將軍い趙王たる王鎔と云ふ者を弑せしかば、晉王い討て、之を平げたり、是より先に吳蜀兩國より屢〳〵書を遣りて、晉王に勸め帝と稱はしめんとなん、晉王自ら謂ひけるやう、先王の遺言あり、當に唐の社稷を恢復すべきあり、既にして國に傳へる天子の寶を魏州に得たりしかば、將佐等い皆賀ぎ奉て、天子の位に即き勸進で已ず、遂に魏州に在りて帝の位よ即き玉ふて、國を唐と號ふ、李嗣源と云ふ者を遣りて襲ひ討ちて梁の郓州を取らじむ、梁い王彦章と云ふ者を以て招討使（官の名）となしたりしかば、唐の主い德勝嶺南北二城の守りの兵を戒めて曰せわるやう、王彦章と云ふ者い軍に臨む毎に二つの鐵槍を用ゐけるに、皆其重さ百斤あり、一つを鞍に置き一つを手に提さげ向ふ所之に當るものなし、時に人王彦章を指して王鐵槍と云ひ、其勇決に恐れしかば、輕躁おからんことを謹しむべしと、王彦章い果して南城を抜き、進みて諸の寨を擊取り、楊劉城に至たり、力めて攻じかど克たずして兵を引き退きたり、梁又王彦章を遣りて郓州を攻しむ、唐主之を救ひて大に梁の兵を敗り王彦章死せり、唐李嗣源と云ふ者を以て、前鋒となし五日にして大梁に入りければ、梁主い猶諸兄弟（友諒、友能、友雍、友徽、を云ふ）の危き場合に乘じて亂を起すを謀らんことを慮かり、盡く之を殺し尋きて、其臣下に命じて、己を殺さじむ、位よ在る十一年、改元する者二、貞明、龍德と云ふ、梁太祖帝より稱せしより、是に至り、二世十七年にして亡ひける

唐

（唐莊宗皇帝）名い存勗と云ふ、沙陀の人あり、本姓い朱邪と云ふ、先世の時よ姓を李を賜ひたり、父の（李克用）と云ふ者い勇氣して謀略あり、一目い微眇おりしかば、獨眼龍と號ひしとなん、李克用い唐の爲に黃巢と云ふ者を討ち平らげ、大ひなる功績を立て、晉に王となり、朱氏と仇をなし、暮年よ至り頗る、領地を蹙められ、其愛い顏色にまで形はるゝに至れり、時に存勗い尙幼くおりしが、進み出言へるやう、朱氏い凶惡ことを行ひ亂暴なることと も多くして皆其極を窮めければ、人々い之を怨み、神々い之を怒玉ふ、況や惡事の極まる將に自ら斃るゝに至るや必せり、吾家世々忠義貞操を襲じたり、大人宜しく身を退き德を養

なひ、時世に遵ふて、吾器量を晦し以て朱氏の衰ふるを待つべし、奈何ぞ輕〳〵しく氣を沮喪して群くの臣下に望みを失ないしめんやと、李克用い其言を聞て悦こび、終するに臨み、立て、嗣ぎとなし、其臣下の者に謂けるやう、此子(存勗を云ふ)志氣遠大あり、必らず、能く吾存念なる事を行ひ成さんと、年十七ゟして、晉王の位に即く、即ち兵を擧て梁を破り潞州を圍みたる兵を解きたりしかゞ、是より連戰に勝を得たり、梁祖い嘆じて曰せあるやう、子を生まゝ當に李亞子(存勗の幼名なり)の如けんこそ欲する所あり、吾兒い豚犬の如く何の用をか成んのみ、時に存勗い東の方幽州を取り併せ、北の方契丹の兵を卻ぞけ、南の方梁と河を夾みて戰ふこと百度ありたりけるが、是より先晉陽の監軍たる者い故唐の宦者張承業と云ふ者なり、承業い晉王の爲に財賦の紹拾をあし、且兵卒や軍馬の闕るものあるときい、之を召集めて補なひ、攻戰ふこと連年ありしが軍馬兵粮ともよ缺るよ應し、幾を送り繼ぎて、其乏からざるを得たるい、皆承業の力なり、承業い、唐の宗廟社稷を恢復さんことのみ意に在りしが、晉王存勗の將よ帝と稱はんとするを聞き即ち力おりて諫むるも、止む可からざるを知り、慟哭て曰へるやう、諸侯にして血戰(血を戰陳の間に濺ぐを云ふ)するも本より唐家の爲にもたるものなり、然かるに今晉王存勗い自ら天下を取るの老奴の思慮を誤るとて悒々しより遂に疾をなして卒せり、晉王存勗は位に即きて晉を改めて、唐となし、

唐の祀を奉承て汴に入り、梁を討滅して大梁に都し已して雒陽に遷りける、侍中(官の名)たる郭崇韜と云ふ者謀略あり、唐の主を輔佐て帝業ことを成就しめしかゞ、是に至り、政事の權を掌握て謀猷を施こし政事の苛にも法理にかなはざるものい規して益することと大ひに双忠を竭し、主の爲に隱すことなく、才能ある人物を朝廷に薦引げ、他の宰相たる者い但郭宗韜の成たる者を受け行ふのみなり、㊀荊南の高季興と云ふ者入朝したり、季興なる者い季昌の名を改めし者なり、唐、季興を以て南平王となす、○蜀主の王衍と云ふ者盤遊(何もせずして遊ぶを云ふ)て女に淫り酒に湎みて、國亂れ盜賊起り立ちけれゞ、唐にてい皇子の繼岌と云ふ者を遣りて、郭崇韜と共に之を伐しめ、遂に蜀を滅し、王衍を降參せしめて、其一族の者を赤すること殺し盡したり、皇子の繼岌い讒言を信し、郭崇韜を殺して還りたり、㊁唐い梁を滅し之に克しより後寒驕或時い自ら白粉を傅眉墨を引きて優人と共に戲れ玉ふ、優になりしときの名を李天下と云ふ、嘗て自ら呼て李天下李天下と曰せられしことあり、ときに優人の敬新磨と云ふ者進て、前み出て、其類を批しかゞ、帝い顏色を失ひ玉ひけれゞ、敬新磨い徐ゟ曰しあぐるやう、陛下こそ天下を理むる者い但帝一人なり、然かるに陛下い李天下李天下と仰せあるい尙